令和５年度

久留米市内遺跡群

高　倉　遺　跡（第　２　次調査）
庄屋野遺跡（第10～16次調査）
久留米城本丸跡（第　１　次調査）
筑後国府跡（第 313 次調査）
西　郷　遺　跡（第　２　次調査）

令和６（2024）年３月
久留米市教育委員会

令和５年度

久留米市内遺跡群

高　倉　遺　跡（第　２　次調査）
庄　屋　野　遺　跡（第10～16次調査）
久留米城本丸跡（第　１　次調査）
筑　後　国　府　跡（第 313 次調査）
西　郷　遺　跡（第　２　次調査）

令和６（2024）年３月
久留米市教育委員会

序

筑紫平野の中心に位置する久留米市は、九州最大の河川である筑後川と耳納連山の山並みに代表される、水と緑が豊かな都市です。久留米市では「水と緑の人間都市」を基本理念に「誇りがもてる美しい都市　久留米」、「市民一人ひとりがかがやく都市　久留米」「活力あふれる中核都市　久留米」を目指す都市の姿として掲げ、都市づくりを総合的に進めています。また、市民が久留米市に誇りと愛着をもつことができるように、郷土の歴史を未来へつなぎ、地域の史跡や伝統行事などの魅力的で豊かな資源を大切に受け継ぎ、まちづくりの文化に根付いた歴史都市を目指しています。

令和３年度には『筑後川と生きる「歴史のまち　久留米」～地域とともに、歴史遺産を見つけ守り、活かし伝える～』を基本理念とした「久留米市文化財保存活用地域計画」を策定しました。この計画を基に、地域にとって大切で、これからも残していきたいと思うモノ、コト「歴史遺産」を地域とともに見つけ守り、活かし伝えることで、地域の魅力を引き出し、地域の誇りや郷土への愛着を育くんでいくことを目指しています。

郷土の歴史を未来へつなぐ上で最も基本となることは文化財情報の記録や保存です。私ども教育委員会では、市内各所の開発によって失われる、先人の残した貴重な文化財を後世に伝えて行くために、現状保存、あるいは発掘調査による記録保存の措置を講じています。

本書で報告するのは、令和３年度から令和５年度に国および県の補助を受けて発掘調査を実施した遺跡です。

本書が、地域史の研究や学習の一資料として、また文化財保護行政に対する理解と地域への誇り・愛着の一助として多少なりとも役立つことができれば幸いに存じます。

末文となりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和６年３月 31 日

久留米市教育委員会
教育長　井上　謙介

例　言

１．本書は、令和３年度から令和５年度に久留米市市民文化部文化財保護課が国費・県費の補助を受けて実施した、久留米市内遺跡群の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の小澤太郎と廣木誠、西拓巳、小川原励、長谷川桃子、河野美帆が担当した。

３．本書に掲載した、各遺跡の調査番号と遺跡略記号は第１表に掲載した。遺跡略記号については（略記号）－（調査次数）の順で記載した。

４．本書に掲載した遺構実測図の測量は、調査担当者と会計年度任用職員の青木佐智子、大淵文子、加藤登、國武三歳、進上裕永、中村麻衣、平田広之、藤木幸子、舟越朝菜、山口誠也、山田治代が行った。遺構配置図はトータルステーションで三次元データを取得し、株式会社 CUBIC 製遺構実測ソフト「遺構くん cubic」にて編集・保存した。土層図、個別遺構図は水糸メッシュ法（1/10）で調査担当者が作成した。

５．遺構実測図は、国土調査法第Ⅱ座標系を用いて、世界測地系を元に作成した。遺構実測図の方位は、全て座標北を示す。なお久留米城本丸跡第１次調査のみ、平成 28 年の熊本地震に伴うパラメータ補正を行った。

６．埋土と出土遺物の色調は、『新版 標準土色帖』（日本研事業株式会社）に拠った。

７．遺構実測図の浄書は、調査担当者と会計年度任用職員の山元博子、湯川琴美、横井理絵が行い、「遺構くん cubic」と米国アドビ製の製図ソフト「Adobe Illustrator」を用いた。

８．遺構写真は、デジタルカメラ（キヤノン EOS ６Ｄ Mark. Ⅱ、リコー PENTAX　Ｋ－１Mark Ⅱ）を用いて各担当者が撮影し、空中写真は、有限会社空中写真企画に委託し撮影した。写真は掲載にあたり、米国アドビ製の画像編集ソフト「Adobe Photoshop」で編集した。

９．本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。

ＳＡ……柵列	ＳＢ……掘立柱建物	ＳＤ……溝	ＳＥ……井戸
ＳＫ……土坑	ＳＰ……ピット	ＳＴ……墓	ＳＸ……その他の遺構

10. 遺物実測は、調査担当者と会計年度任用職員の今村理恵、江藤玲子、江口里織、山元が行った。

11. 遺物実測図の凡例は、下記のとおりである。

・断面の黒塗りは須恵器、灰色は瓦器、斜線は鉄製品を意味する。

・調整の線は、直線「――――――」が明瞭な稜線を、破線「―― ―― ――」が不明瞭な稜線とケズリを、一点鎖線「― － ― － ―」が回転ナデを示す。

12. 遺物観察表は、調査担当者が作成した。その凡例は、下記のとおりである。

・法量の単位は cm である。（ ）は残存値と復元値を、－ は欠損または該当する部位が無いことを示す。

・胎土は0.5㎜未満の砂粒を「微砂粒」、１㎜未満を「細砂粒」、１㎜以上を「砂粒」とした。

・貿易陶磁器の分類は大宰府分類に準拠し、以下の文献に拠った。

太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡　―陶器分類編―』太宰府市の文化財第49集

山本信夫2022「第７章　貿易陶磁器」日本中世土器研究会編『新版　概説中世の土器・陶磁器』真陽社

・登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める、出土遺物の登録番号である。

（例）２０２１１１－０００００１

調査番号　　登録番号

13. 遺物実測図の浄書は、調査担当者と会計年度任用職員の山元、湯川、横井が「Adobe Illustrator」で行った。

14. 遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて調査担当者がリコーPENTAX　K-1 Ⅱデジタルカメラを用いて撮影した。写真は掲載にあたり、「Adobe Photoshop」で編集した。

15. 本書に収録した遺物及び図面、写真などの調査に関連する記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される予定である。

16. 本書の執筆は各担当者が行い、文責は本文目次及び文末に記した。全体の編集は、小川原が担当した。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……（小川原）1

個人住宅建設に伴う発掘調査

Ⅱ．高倉遺跡（第２次調査）……（小川原）3

Ⅲ．庄屋野遺跡（第 10 次調査）……（長谷川）23

Ⅳ．庄屋野遺跡（第 11 次調査）……（長谷川）27

Ⅴ．庄屋野遺跡（第 12 次調査）……（長谷川）29

Ⅵ．庄屋野遺跡（第 13 次調査）……（長谷川）33

Ⅶ．庄屋野遺跡（第 14 次調査）……（長谷川）39

Ⅷ．庄屋野遺跡（第 15 次調査）……（廣木・河野）41

Ⅸ．庄屋野遺跡（第 16 次調査）……（小川原・長谷川）53

Ⅹ．高三潴遺跡（第 14 次調査、概要報告）……（河野）64

各種開発確認調査

Ⅺ．久留米城本丸跡（第１次調査）……（小澤・西）65

Ⅻ．筑後国府跡（第 313 次調査）……（廣木）87

XIII．西郷遺跡（第２次調査）……（廣木）92

XIV．筑後国府跡（第 314 次調査、概要報告）……（廣木）97

XV．東櫛原今寺遺跡（第 10 次調査、概要報告）……（小川原）98

XVI．筑後国分寺跡（第 46 次調査、概要報告）……（河野）99

〔巻末〕抄録……巻末

挿 図 目 次

Ⅱ．高倉遺跡（第２次調査）

第 1 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）……5

第 2 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）……5

第 3 図　遺構配置図（1/100）……6

第 4 図　ＳＥ１・25・30 実測図（1/40）……8

第 5 図　ＳＫ７・８・10、ＳＴ 20 実測図（1/40）……9

第 6 図　出土遺物実測図①（1/4）……11

第 7 図　出土遺物実測図②（1/2：34・36，1/4）……12

第 8 図　出土遺物実測図③（1/4）……13

第 9 図　高倉遺跡第１・２次調査遺構略図（1/250）……16

第 10 図　調査区全景（北上空から）……17

第 11 図　検出状況（南から）……17

第 12 図　ＳＥ１・25 掘削状況（北から）……17

第 13 図　ＳＥ１土層堆積状況（西から）……17

第 14 図　ＳＥ30 土層堆積状況（南から）……17

第 15 図　ＳＫ７土層堆積状況（北から）……17

第 16 図　ＳＫ７完掘状況（北から）……17

第 17 図　ＳＫ 10 土層堆積状況（南から）……17
第 18 図　ＳＫ 10 遺物出土状況（北から）……18
第 19 図　ＳＫ７・８・10 完掘状況（北から）……18
第 20 図　ＳＴ 20 土層堆積状況（南から）……18
第 21 図　ＳＴ 20 遺物出土状況（東から）……18
第 22 図　出土遺物写真①……18
第 23 図　出土遺物写真②……19
第 24 図　出土遺物写真③……20
第 25 図　出土遺物写真④……21
第 26 図　出土遺物写真⑤……22

Ⅲ．庄屋野遺跡（第 10 次調査）

第 27 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）……24
第 28 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）……24
第 29 図　遺構配置図（1/100）……25
第 30 図　ＳＡ１実測図（1/80、1/40：土層図）……26
第 31 図　調査区全景（北上空から）……26
第 32 図　ＳＡ１Ｐ１土層（北から）……26
第 33 図　ＳＡ１Ｐ３土層（東から）……26

Ⅳ．庄屋野遺跡（第 11 次調査）

第 34 図　遺構配置図（1/100）……27
第 35 図　ＳＢ 43 実測図(1/80)……28
第 36 図　調査区全景（北から）……28

Ⅴ．庄屋野遺跡（第 12 次調査）

第 37 図　遺構配置図（1/100）……30
第 38 図　ＳＢ３・ＳＰ５実測図
（1/80、1/40:ＳＢ３Ｐ６、ＳＰ５土層図）……30
第 39 図　出土遺物実測図（1/4)……31
第 40 図　調査区全景（北東上空から）……31
第 41 図　ＳＢ３Ｐ６土層（南から）……32
第 42 図　ＳＢ３Ｐ６完掘状況（北から）……32
第 43 図　ＳＰ５土層（東から）……32
第 44 図　ＳＰ５完掘状況（東から）……32
第 45 図　出土遺物写真……32

Ⅵ．庄屋野遺跡（第 13 次調査）

第 46 図　遺構配置図（1/100）……33
第 47 図　ＳＤ 16、ＳＫ１・２・49 実測図（1/40）……35
第 48 図　遺物実測図（1/4、1/2:18）……36
第 49 図　調査区全景（北から）……37
第 50 図　ＳＤ 16 完掘状況（北東から）……37
第 51 図　ＳＫ１完掘状況（南東から）……37
第 52 図　ＳＫ２完掘状況（北東から）……37
第 53 図　出土遺物写真……38

Ⅶ．庄屋野遺跡（第 14 次調査）

第 54 図　遺構配置図（1/50）……39
第 55 図　調査区全景（北から）……40

Ⅷ．庄屋野遺跡（第 15 次調査）

第 56 図　表土剥ぎ風景（北から）……41
第 57 図　南区全景（南東から）……42

第 58 図　北区全景（南東から）……42
第 59 図　遺構配置図（1/100）……43
第 60 図　ＳＫ１・20 完掘状況（北東から）……44
第 61 図　ＳＫ 25 遺物出土状況①（北西から）……44
第 62 図　ＳＫ 25 遺物出土状況②（西から）……44
第 63 図　ＳＫ 25 完掘状況（北西から）……44
第 64 図　ＳＫ１・20・25・26・30・35 実測図（1/40）……45
第 65 図　ＳＫ 26 完掘状況（南西から）……46
第 66 図　ＳＫ 30 完掘状況（西から）……46
第 67 図　ＳＫ 35 完掘状況（南西から）……46
第 68 図　出土遺物実測図（1/2：５・23、1/4：その他）…48
第 69 図　出土遺物写真①……50
第 70 図　出土遺物写真②……51
第 71 図　出土遺物写真③……52

Ⅸ．庄屋野遺跡（第 16 次調査）

第 72 図　遺構配置図（1/100）……54
第 73 図　ＳＫ 60 実測図（1/40）……55
第 74 図　出土遺物実測図①（1/4）……56
第 75 図　出土遺物実測図②
（1/2：22 ～ 24・30、1/4：25 ～ 29）……57
第 76 図　西区全景（東から）……59
第 77 図　東区全景（西から）……59
第 78 図　ＳＫ 60 土層堆積状況（北東から）……59
第 79 図　ＳＫ 60 完掘状況（東から）……59
第 80 図　出土遺物写真①……59
第 81 図　出土遺物写真②……60
第 82 図　出土遺物写真③……61
第 83 図　出土遺物写真④……62
第 84 図　出土遺物写真⑤……63

Ⅹ．高三潴遺跡（第 14 次調査、概要報告）

第 85 図　調査地点の位置図（1/25,000）……64
第 86 図　西区全景（東から）……64
第 87 図　井戸掘削状況（東から）……64

ⅩⅠ．久留米城本丸跡（第１次調査）

第 88 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）……66
第 89 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）……66
第 90 図　絵図と地図に見る久留米城本丸（抜粋）……68
第 91 図　調査前風景（北東から）……69
第 92 図　調査風景（北東から）……69
第 93 図　遺構配置図（1/200）……70
第 94 図　調査区全景（北西上空から）……71
第 95 図　久留米城本丸跡全景（西上空から）……71
第 96 図　本丸上空から外郭方面を望む（北西上空から）
……71
第 97 図　本丸上空から京隈方面を望む（北東上空から）
……71
第 98 図　ＳＫ 10 実測図（1/40）……72
第 99 図　ＳＸ１検出状況（南東から）……73
第 100 図　ＳＸ２検出状況（南東から）……73
第 101 図　ＳＸ３検出状況（南東から）……73
第 102 図　ＳＸ 23 検出状況（南東から）……73
第 103 図　北サブトレンチ土層図（1/20）……74
第 104 図　北サブトレンチ西半土層（南西から）……74
第 105 図　北サブトレンチ中央土層（南西から）……74
第 106 図　北サブトレンチ東半土層（南西から）……74
第 107 図　青灰色土整地層検出状況（南西から）……74
第 108 図　調査区中央部整地層検出状況（北東から）……75
第 109 図　調査区南部砕石層検出状況（北東から）……75

第 110 図　出土遺物実測図（1/8：４～５、1/4：１～３・６～８、1/2：９・10）……75
第 111 図　出土遺物写真……76
第 112 図　篠山神社拝殿前列石遠景（南西から）……79
第 113 図　篠山神社拝殿前列石確認状況（南西から）……79
第 114 図　篠山神社拝殿前列石位置図・実測図（1/400、1/20）……80
第 115 図　瓦葺の篠山神社拝殿……84
第 116 図　銅板葺の篠山神社拝殿……84
第 117 図　戦前の久留米城本丸跡……84
第 118 図　工事中の本丸跡入口……85

ⅩⅡ．筑後国府跡（第 313 次調査）

第 119 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）……87
第 120 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）……88
第 121 図　調査風景（北東から）……89
第 122 図　調査区全景（南から）……89
第 123 図　調査区東壁北側土層図（1/40）……90
第 124 図　遺構配置図（1/50）……90
第 125 図　ＳＤ１土層（東から）……91
第 126 図　ＳＤ１土層図（1/20）……91
第 127 図　第 313 次調査と周辺の主要遺構模式図（1/1,500）……91

ⅩⅢ．西郷遺跡（第２次調査）

第 128 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）……92
第 129 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）……93
第 130 図　調査区全景（西から）……93
第 131 図　遺構配置図（1/50）……93
第 132 図　甕棺検出状況（南から）……94
第 133 図　甕棺検出状況（北東から）……94
第 134 図　ＳＴ１実測図・ＳＫ２断面図（1/20）……94
第 135 図　出土遺物実測図（1/8：１・２、1/4：３・４）…95
第 136 図　出土遺物写真……96

ⅩⅣ．筑後国府跡（第 314 次調査、概要報告）

第 137 図　調査地点の位置図（1/25,000）……97
第 138 図　東区全景（北から）……97
第 139 図　西区全景（南から）……97

ⅩⅤ．東櫛原今寺遺跡（第 10 次調査、概要報告）

第 140 図　調査地点の位置図（1/25,000）……98
第 141 図　調査区全景（北西上空から）……98
第 142 図　遺構掘削状況（北上空から）……98

ⅩⅥ．筑後国分寺跡（第 46 次調査、概要報告）

第 143 図　調査地点の位置図（1/25,000）……99
第 144 図　遺構検出状況（南から）……99
第 145 図　サブトレンチ掘削状況（西から）……99

表目次

第 1 表　『令和５年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表……1
第 2 表　高倉遺跡第２次調査出土遺物観察表①……14
第 3 表　高倉遺跡第２次調査出土遺物観察表②……15
第 4 表　庄屋野遺跡第 13 次調査出土遺物観察表……37
第 5 表　庄屋野遺跡第 15 次調査出土遺物観察表……49
第 6 表　庄屋野遺跡第 16 次調査出土遺物観察表……58
第 7 表　久留米城本丸跡第１次調査出土遺物観察表……76
第 8 表　廃藩以降の久留米城本丸跡の変遷……82
第 9 表　西郷遺跡第２次調査出土遺物観察表……96

Ⅰ．はじめに

１．令和３・４・５年度実施調査の概要

久留米市では、平成５年度より発掘調査等国庫補助事業によって発掘調査を実施した遺跡について、『久留米市内遺跡群』として成果を取りまとめ、報告書を毎年刊行している。

令和５年度の市内遺跡発掘調査等国庫補助事業による調査は、令和３年度から継続中の益生田古墳群第５次調査を含めて、令和６年１月 31 日現在９件である。

本書には、令和３年度に実施した久留米城本丸跡第１次調査、令和４年度に実施した高倉遺跡第２次調査、庄屋野遺跡第 10 ～ 14 次調査、および令和５年度に実施した庄屋野遺跡第 15･16 次調査、筑後国府跡第 313 次調査、西郷遺跡第２次調査の本報告を掲載した。併せて、令和５年度に実施した筑後国府跡第 314 次調査や東櫛原今寺遺跡第 10 次調査、高三潴遺跡第 14 次調査、筑後国分寺跡第 46 次調査の概要報告を収録した。報告書作成に係わる整理作業は､久留米市埋蔵文化財センターと西町文化財整理事務所において実施した。

なお、益生田古墳群第５次調査の報告は、『田主丸古墳群Ⅲ－益生田古墳群Ａ群の調査－』（久留米市文化財調査報告書第 449 集、令和６年）として刊行している。

第１表　『令和５年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表

調査年度	調査番号	遺跡名	調査次数	調査期間	調査面積（㎡）	担当者	調査原因	遺跡略記号	備考
Ｒ３	202111	久留米城本丸跡	1	20210709 ～ 20210826	151	小澤　太郎 西　拓巳	各種開発確認調査	LHM-001	本報告
Ｒ４	202205	高倉遺跡	2	20220705 ～ 20220729	95	小川原　励	個人住宅本調査	TKK-002	本報告
Ｒ４	202207	庄屋野遺跡	10	20220908 ～ 20220922	59	長谷川　桃子	個人住宅本調査	SYN-010	本報告
Ｒ４	202208	庄屋野遺跡	11	20220908 ～ 20220922	95	長谷川　桃子	個人住宅本調査	SYN-011	本報告
Ｒ４	202210	庄屋野遺跡	12	20221108 ～ 20221128	89	長谷川　桃子	個人住宅本調査	SYN-012	本報告
Ｒ４	202211	庄屋野遺跡	13	20221108 ～ 20221128	89	長谷川　桃子	個人住宅本調査	SYN-013	本報告
Ｒ４	202212	庄屋野遺跡	14	20221108 ～ 20221128	9	長谷川　桃子	個人住宅本調査	SYN-014	本報告
Ｒ５	202302	庄屋野遺跡	15	20230418 ～ 20230502	85.3	廣木　誠	個人住宅本調査	SYN-015	本報告
Ｒ５	202304	筑後国府跡	313	20230510 ～ 20230511	15	廣木　誠	各種開発確認調査	TKH-313	本報告
Ｒ５	202305	西郷遺跡	2	20230516 ～ 20230517	3.7	廣木　誠	各種開発確認調査	SAI-002	本報告
Ｒ５	202307	筑後国府跡	314	20230613 ～ 20230719	89	廣木　誠 河野　美帆	各種開発確認調査	TKH-314	概要報告
Ｒ５	202308	東櫛原今寺遺跡	10	20230718 ～ 20230818	73	小川原　励	各種開発確認調査	KIM-10	概要報告
Ｒ５	202310	庄屋野遺跡	16	20230823 ～ 20230908	84	小川原　励	個人住宅本調査	SYN-16	本報告
Ｒ５	202312	高三潴遺跡	14	20231016 ～ 20231117	71.5	小川原　励 河野　美帆	個人住宅本調査	TMZ-14	概要報告
Ｒ５	202314	筑後国分寺跡	46	20231129 ～ 20231129	15	小川原　励 河野　美帆	各種開発確認調査	TKB-46	概要報告

２．調査の体制

令和５年度の発掘調査等国庫補助事業に係わる調査の体制は、以下のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会		教 育 長	井上　謙介
調査総括：久留米市市民文化部		部　　長	竹村　政高
		次　　長	古賀　裕二
	文化財保護課	課　　長	井上　英俊
		課長補佐	甲斐田　邦彦
		課長補佐兼課主査	白木　守、丸林　禎彦
		主　　査	小澤　太郎
		事務主査	江島　伸彦
		事前確認担当	本田　岳秋
		発掘調査・整理・報告書作成担当	江島　伸彦、廣木　誠
			西　拓巳、小川原　励
			長谷川　桃子、河野　美帆
		会計年度任用職員（整理担当）	今村　理恵、江藤　玲子

会計年度任用職員（発掘作業）

青木　佐智子、案納　哲夫、池尻　忠行、池田　隆司、石井　利男、石橋　康子、井上　知義
井上　吉清、江藤　光男、大淵　文子、大熊　澄子、大塚　ヒロ子、鐘江　　清、
久保田　英嗣、國武　三歳、坂田　康史、佐田　農夫男、進上　裕永、飛野　博文、原　博文
平川　真帆、福田　孝利、堀江　俊文、山口　誠也、山田　治代、横山　満浩

会計年度任用職員（整理作業）

江口　里織、山元　博子、湯川　琴美、横井　理絵

個人住宅建設に伴う発掘調査

高　倉　遺　跡（第　２　次調査）
庄 屋 野 遺 跡（第 10 次調査）
庄 屋 野 遺 跡（第 11 次調査）
庄 屋 野 遺 跡（第 12 次調査）
庄 屋 野 遺 跡（第 13 次調査）
庄 屋 野 遺 跡（第 14 次調査）
庄 屋 野 遺 跡（第 15 次調査）
庄 屋 野 遺 跡（第 16 次調査）
高 三 潴 遺 跡（第 14 次調査、概要報告）

Ⅱ．高倉遺跡（第２次調査）

１．調査に至る経緯

本調査は、令和４年６月２日、土地所有者より久留米市大善寺町夜明 1117-7 における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出されたことに端を発する。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である高倉遺跡の範囲内に含まれるため、同月 17 日に試掘調査を実施した。調査の結果、地表下 15 ㎝で複数のピットが確認された。開発予定建物の基礎構造上、遺跡の現状保存が不可能であったことから、同日、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。同月 22 日、土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年７月５日から７月 29 日にかけて現地調査を実施し、その後、整理作業を実施した。対象面積 456 ㎡のうち、調査面積は 95 ㎡である。

２．位置と環境

九州最大の穀倉地帯である筑紫平野を貫く筑後川は、久留米市街北西部に位置する久留米城付近から大きく流路を南西へと転じ、大きな蛇行を繰り返しながら有明海へと注ぐ。有明海の干満の差は約６ｍと日本最大である。潮汐により川の水位や流れが変動する感潮域は現在、河口から筑後大堰までの 23 ㎞であるが、大堰が建設される以前はより上流まで広がっていた。高倉遺跡は、久留米市南部を南東から北西へ流れる広川の左岸に位置し、耳納山地から西方に延びる低位台地の西端に立地する。広川は調査地より 3.2 ㎞南西で筑後川に合流する。高倉遺跡が立地する低位台地の南側や西側には水田が広がる。

調査地周辺は旧筑後川左岸に位置し、広川が筑後川に合流する地点に近いことから水上交通に適していたことが想定される。そのため、多くの遺跡が確認されており、周辺での発掘調査は、広川の対岸における圃場整備に伴う大善寺北部地区遺跡群や、低地を挟んだ南側の低台地に位置する高三潴遺跡で多く実施されている。以下周辺の遺跡について述べる。

旧石器時代の遺構は確認されてないが､御供田遺跡から安山岩製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺構も確認されてないが、高三潴遺跡や早津崎五反田遺跡で縄文時代前期の曽畑式土器が出土している。

弥生時代は多くの遺跡で遺構が確認されている。特に墳墓が多くの遺跡で検出されており、汐入遺跡では、土壙墓や木棺墓、甕棺墓が、高倉遺跡や隈裏遺跡、中寺遺跡、畑中遺跡、道蔵遺跡では甕棺墓、東裏遺跡では石棺墓、高三潴遺跡や早津崎五反田遺跡では、土壙墓、木棺墓、石蓋土壙墓、甕棺墓等が確認されている。大善寺遺跡からは弥生時代中期の遺物が出土しているが明確な遺構は確認されていない。道蔵遺跡では、前期末～中期初頭の竪穴建物跡や、後期から終末期の二重環濠

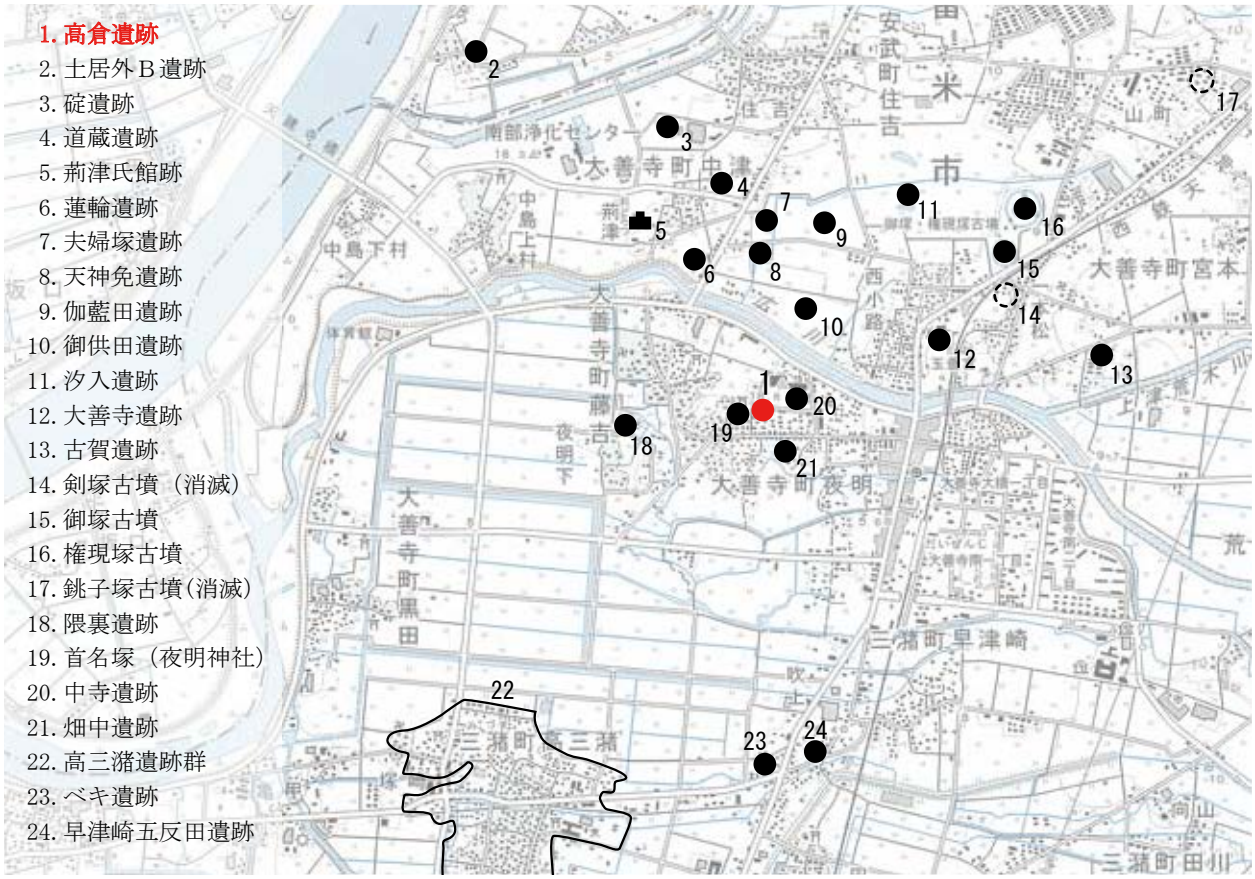
や竪穴建物、井戸、土坑を検出し、韓式土器（軟質土器）や銅鏃、青銅製鉈も出土している。高三潴遺跡は、近世以前から遺跡の存在が知られており、弥生時代前期末～中期の竪穴建物や溝、後期から終末期の溝や掘立柱建物が確認され、溝からは小銅鐸が出土している。墓域も確認され、後期の甕棺墓や木棺墓からは小玉や連玉が出土している。発掘調査が行われる以前には、銅剣が複数出土している。ベキ遺跡では後期の建物跡が検出されている。

古墳時代には大善寺北部地区で「イロハ塚」と呼称されるように数多くの古墳が築かれる。剣塚古墳は消滅しているが、円墳で、勾玉や刀、鏃が出土したと伝えられる。御塚古墳は三重の周濠を巡らす全長 78 ｍの帆立貝型前方後円墳である。埋葬施設は未調査のため不明ではあるが、埴輪・土師器・須恵器・新羅土器等が出土しており、５世紀後半の築造と考えられている。権現塚古墳は御塚古墳の北東側に隣接する直径 50 ｍの円墳で二重の周濠を有する。埋葬施設は御塚古墳と同様に未調査であるため不明であるが、埴輪や土師器・須恵器・新羅土器等が出土している。築造時期は御塚古墳に後出する６世紀前半と考えられている。権現塚古墳の北東に位置する銚子塚古墳は二重の周濠を持つ前方後円墳とされているが、そのほとんどが開墾され、わずかな高まりが地形として残るのみで、全容は明らかでない。また、汐入遺跡からは鉄鏃を副葬する土壙墓１基が確認されている。その他、御供田遺跡、蓮輪遺跡、天神免遺跡、夫婦塚遺跡、碇遺跡から建物跡または溝、土坑等の生活諸施設が検出されている。

律令期の付近一帯は、筑後国三潴郡として『和名類聚抄』に記載され、郡内には高家･田家･三潴･鳥養･夜明･青木･荒木･管綜の８つの郷名が見える。大善寺町付近が「夜明郷」、三潴町付近が「三潴郷」に比定される。この三潴郡の郡衙に比定されるのは道蔵遺跡である。道蔵遺跡では計画的に配置された建物群が確認されている。天神免遺跡は豪族の居館、夫婦塚遺跡は官衙関連施設、伽藍田遺跡は墓地・集落、御供田遺跡、蓮輪遺跡、汐入遺跡、大善寺遺跡は集落と考えられている。古賀遺跡は大善寺玉垂宮の東約 400 ｍに位置しており、数条の溝や土師器、須恵器など奈良～平安時代の遺物や焼米等が出土しており、郡衙推定地の一つである。また、夜明神社境内にある首名塚は、筑後国の初代国司であった道君首名を没後に祀ったとされている。

中世の遺跡は、荊津伊賀守の館跡と伝えられる荊津氏館跡に代表される。同館の一部では、濠から大量の土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土し、13 世紀代の館跡と考えられている。高倉遺跡では銅鏡や青磁を副葬した土壙墓が２基検出されている。碇遺跡では青銅製和鏡（秋草蝶鳥文鏡）を副葬した土壙墓が検出され、蓮輪遺跡では井戸や土坑から大量の瓦器埦や棒状土製品が出土した。土居外遺跡は、筑後川旧河道の対岸に位置し、青銅製和鏡（草花双鳥鏡）や 20 点以上の土錘が出土した。大善寺遺跡では大善寺の僧坊跡と考えられる掘立柱建物等を検出している。

高倉遺跡が位置する低位台地は北西方向に緩やかに標高が上がり、夜明神社周辺で標高が最も高くなる。弥生時代の甕棺墓が出土している中寺遺跡や畑中遺跡は同一台地上に位置するため、一体の遺跡として捉えることもできる。本調査地の西隣は高倉遺跡第１次調査地で、弥生時代の甕棺墓２基、中世土壙墓２基が検出されている。



第１図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第２図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

３．調査の記録

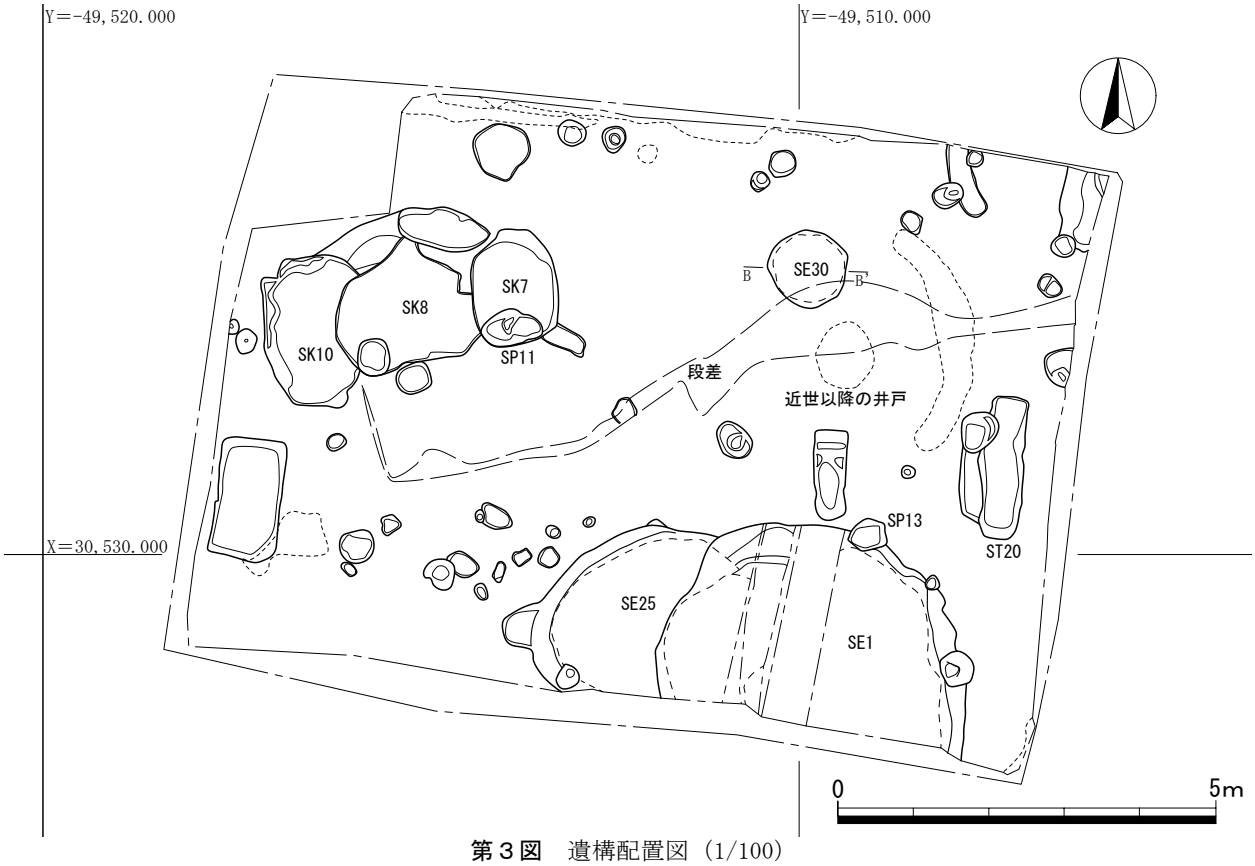
（１）調査の経過

今回の調査は、第１次調査で確認された弥生時代・中世の遺構の広がりを確認することを目的とした。令和４年７月５日に機材等を搬入し、翌６日に重機による表土剥ぎを行った。表土剥ぎ終了後７日に遺構検出を行い、遺構掘削を開始した。井戸を複数検出したが、完掘すると建物基礎に影響を及ぼす可能性があったため、一部の掘削に留めた。随時遺構の測量や遺物の出土状況、土層図の作成、写真撮影を行った。同月 28 日に掘削作業が完了し、高所作業車より全体写真を撮影した。翌 29 日に重機による埋戻しを行い、機材を撤収し調査を終了した。

遺構はトータルステーションで測量し､測量データは｢遺構くん cubic｣で編集･保存した。ただし、遺物出土状況や土層図は水糸メッシュ法（1/10）で記録した。遺構写真はデジタルカメラ PENTAX K-1 Ⅱを用いた。

（２）検出遺構

遺構検出面は南北で高低差があり、地表から遺構検出面まで、北部で 20 ㎝、南部で 60 ㎝を測る。調査区中心付近において、北東から南西に延びる比高 10 ～ 20 ㎝の段が確認された。全面が削平されており、包含層は確認できなかった。主要遺構は、井戸３基、土坑３基、土壙墓１基である。第１次調査に比べ遺構の密度が低く、土坑等は底部が残存する程度である。



第３図　遺構配置図（1/100）

井戸

ＳＥ１（第４・12・13 図）

調査区南東で検出した。南半は調査区外へ延びる。検出時はＳＥ 25 と同一遺構と認識し、サブトレンチの設定、掘削を行った後、全体を掘削していたが、掘削中にＳＥ 25 に後出する別遺構と判明した。上面は 30 ～ 40 ㎝程度の掘削に留めている。サブトレンチの掘削結果、遺構検出面から深さが 1.1 ｍ以上あること、0.7 ｍ掘削した時点で水が湧くことが明らかになり、調査区端に位置することもあり、遺構の掘り下げを断念した。平面形は歪みのある円形と推測され、直径 4.1 ｍを測り、最深部は調査区の南に位置すると考えられる。未完掘であるため詳細は不明であるが、サブトレンチ内北部では、幅 38 ㎝の段を有し、南側が急角度で深くなる。

土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、土製品、石製品、弥生土器等が多量に出土した。出土遺物から 12 世紀後半に属すると考えられる。

ＳＥ 25（第４・12 図）

調査区南部で検出した。ＳＥ１に先行する。ＳＥ１と同様に上面約 30 ㎝の掘削に留めている。南部が調査区外へ広がるため詳細は不明であるが、平面形は楕円形と推測され、直径 2.25 ｍ以上を測る。未完掘ではあるが西部に段を有し､西半には外周から 0.2 ｍ内側で傾斜変換線がみられる。遺構の埋土外周は暗褐色土だが、中心部では円形状に黄褐色粘土ブロックが混入し、内側と外側で埋土の差が明確である。

出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、土製品が出土した。出土遺物やＳＥ１との重複関係から 12 世紀後半以前に属すると考えられる。

ＳＥ 30（第３・４・14 図）

調査区北東部で検出した。南東 0.5 ｍにおいても井戸を検出したが、埋土から近世以降の染付の磁器が複数出土した。近世以降は今回の調査では対象としていないため取り扱わない。ＳＥ 30 は検出位置や規模が近く、同時期の遺構である可能性も考えられるが、近世以降の遺物は確認されていない。平面形は円形で、直径 1.05 ｍを測る。0.75 ｍ掘削したが、掘削面積は狭くなったため、下部の掘削は断念し完掘はできなかった。

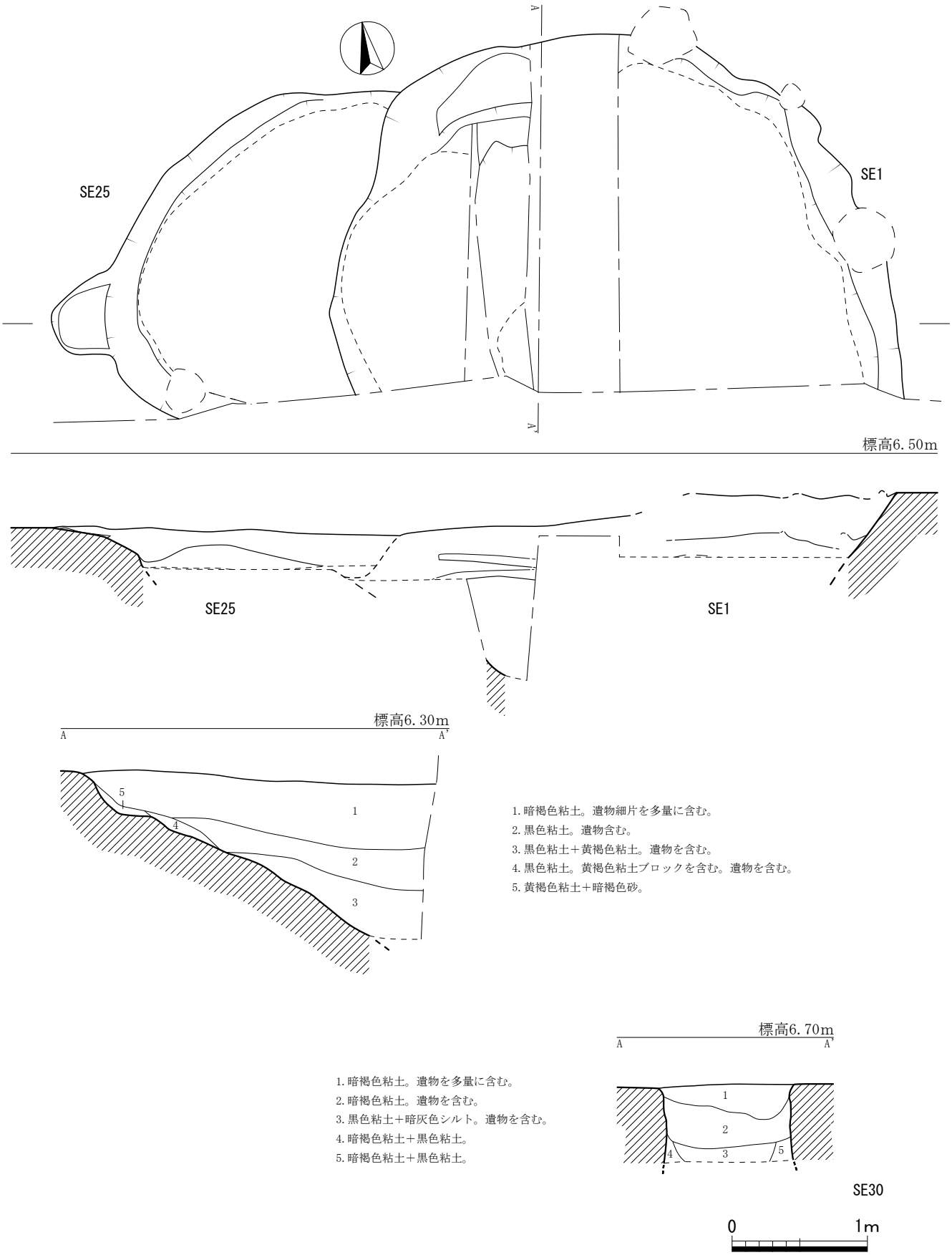
出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、弥生土器である。出土遺物から 12 世紀後半～ 13 世紀以降に属すると考えられる。

土坑

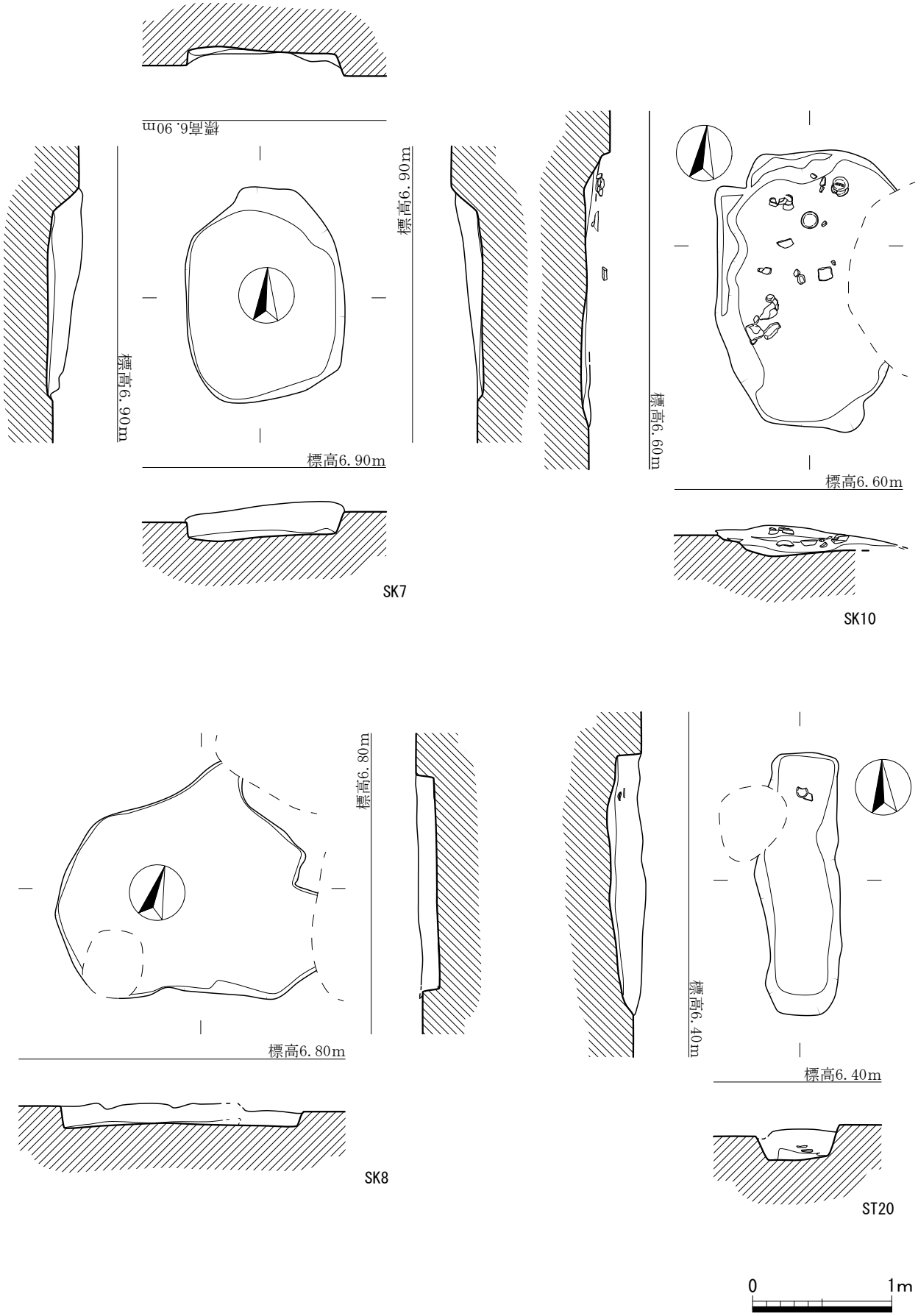
ＳＫ７（第５・15・16・19 図）

調査区の北西部で検出した。検出時はＳＫ８・10 と同一遺構と考えていたが、掘削中に埋土の差が明らかになったため、別遺構と判断した。ＳＰ 11 に先行し、ＳＫ８に後出する。平面形は隅丸方形に近く、長軸長 1.53 ｍ、短軸長 1.13 ｍ、深さは最深部で 0.28 ｍを測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は土師器、瓦器である。



第４図　ＳＥ１・25・30 実測図（1/40）



第５図　ＳＫ７・８・10、ＳＴ 20 実測図（1/40）

ＳＫ８（第５・19 図）

調査区の北西部で検出した。ＳＫ７に先行し、ＳＫ 10 に後出する。平面形は楕円形に近い不整形である。長軸長 1.9 m以上、短軸長 1.7 m、深さは最深部で 0.3 mを測る。底面はほぼ平坦である。

出土遺物は土師器、須恵器である。

ＳＫ 10（第５・17 ～ 19 図）

調査区の北西部で検出した。ＳＫ８に先行する。平面形は楕円形で、長軸長 2.02 m、短軸長 1.35 m以上、深さは最深部で 0.22 mを測る。北部、西部にそれぞれ段を有し、底面はほぼ平坦である。土師器や壁土等の部材片と考えられる粘土塊がまとまって出土した。

出土遺物は土師器、須恵器、粘土塊である。出土遺物から 10 世紀後半～ 11 世紀に属すると考えられる。

土壙墓

ＳＴ 20（第５・20・21 図）

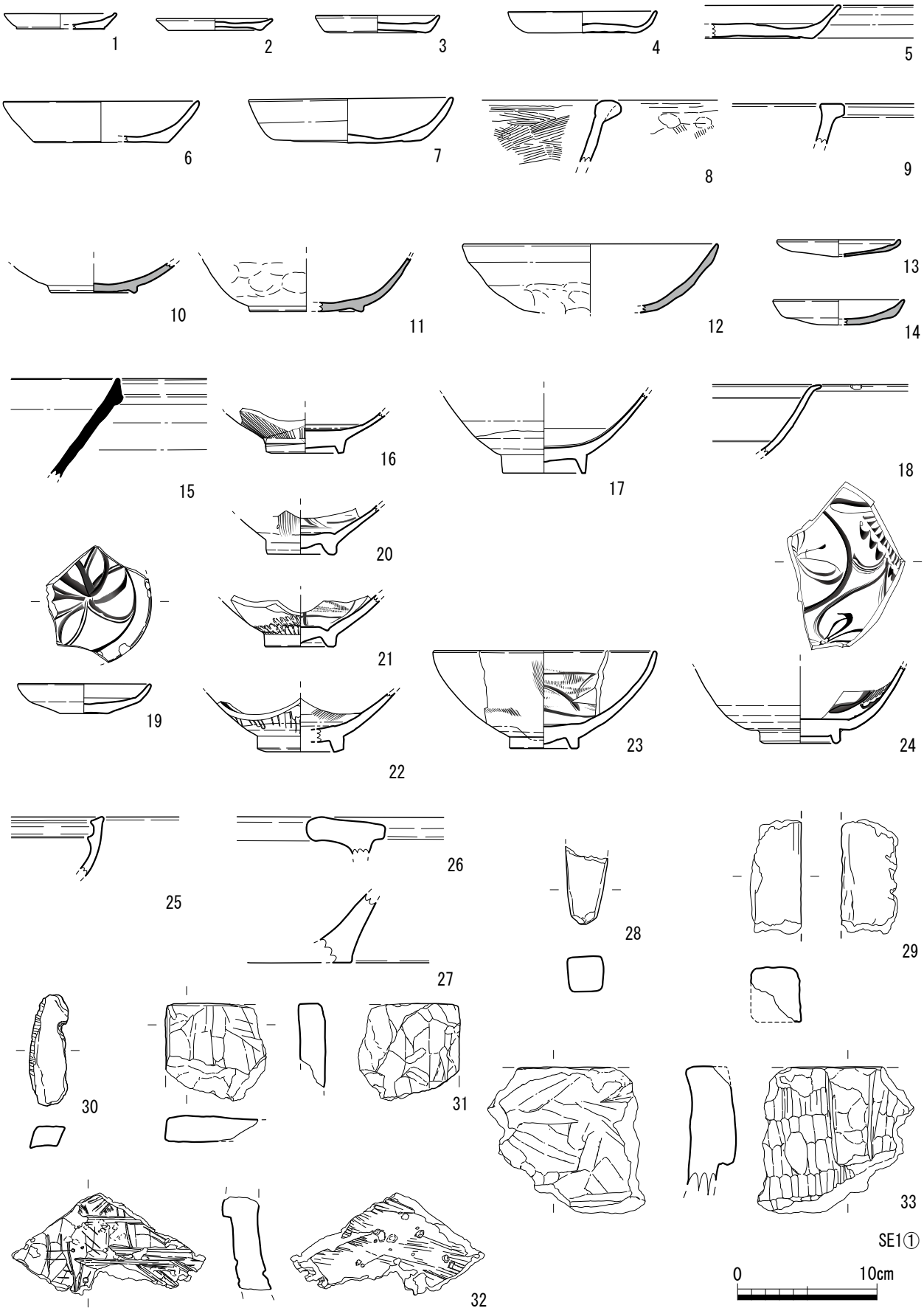
調査区東部で検出した土壙墓である。平面形は隅丸方形に近い形状を呈し、長軸長 1.9 m、短軸長 0.63 m、深さは最深部で 0.28 mを測る。北部で完形の土師器の小皿が出土した。底面は凹凸があり、平坦ではない。

出土遺物は土師器、輸入陶磁器、瓦器である。出土遺物から 12 世紀後半に属すると考えられる。

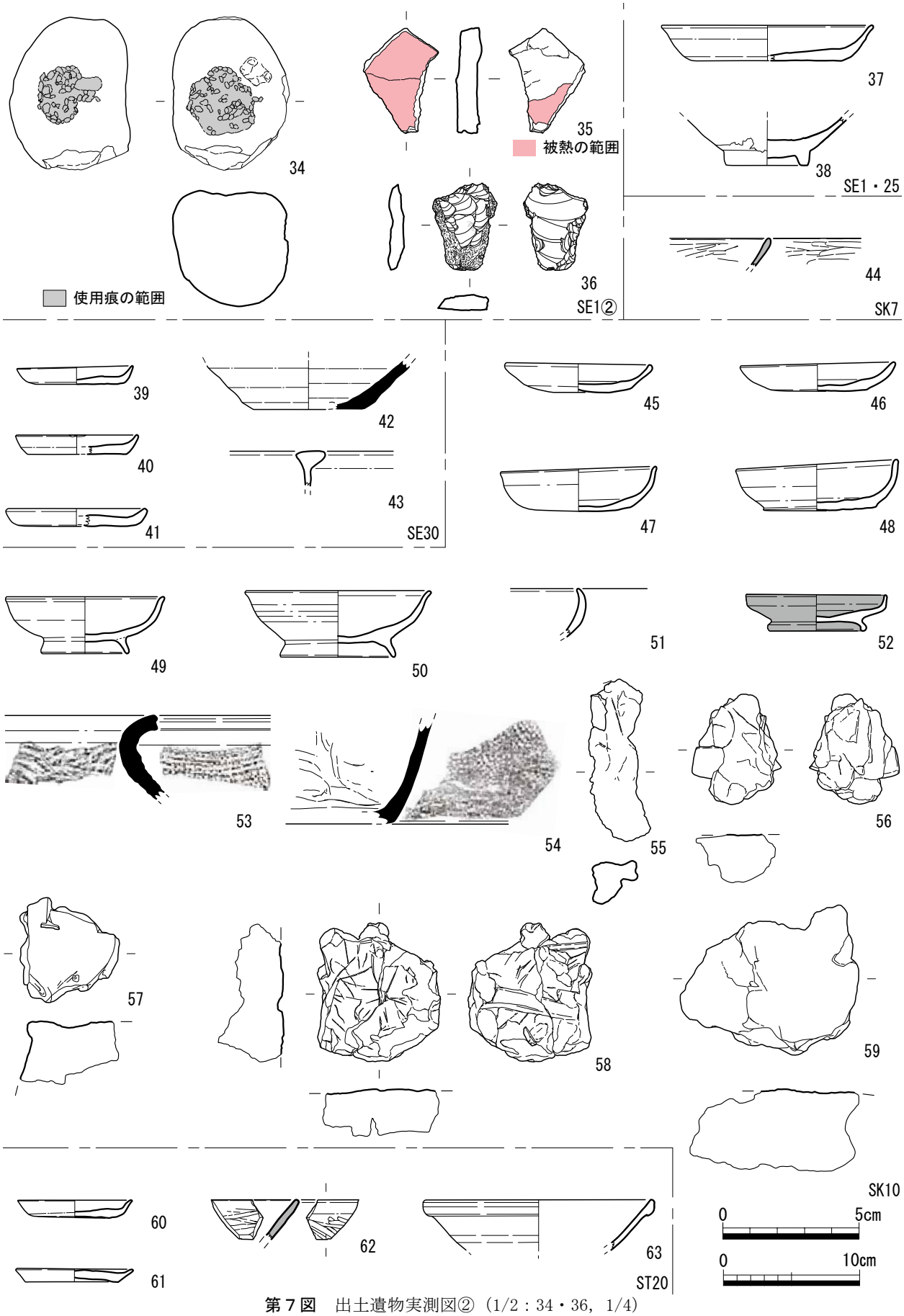
（３）出土遺物（第６～８・22 ～ 26 図、第２・３表）

今回の調査では、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、石製品、弥生土器がパンコンテナー４箱分が出土した。以下主要な遺物について述べる。

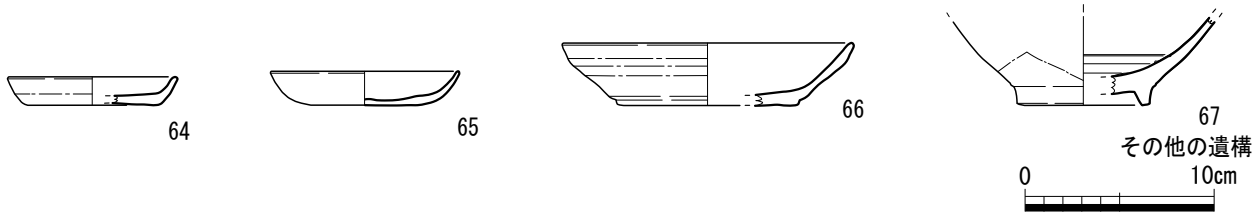
１～ 36 はＳＥ１出土遺物。１～９は土師器で、１～４は小皿である。１～３は底部糸切り、４はヘラ切りである。５～７は坏である。５は底部糸切り、６はヘラ切りで、７は摩耗により不明である。８・９は土鍋である。８の口縁端部は丸みを帯び、９の口縁は断面台形を呈する。10 ～ 14 は瓦器で、10 ～ 12 は押出し技法によって成形された埦である。内外面にミガキは確認できない。15 は東播系須恵器の鉢である。口縁部の面が器壁に対して外傾し、端部は丸みを帯びる。16 ～ 19 は白磁である。16・17 は碗で、16 は外面に回転ヘラケズリの痕が縦筋として残り、内面見込には沈線が施される。また、輪状の釉掻き取りが施される。17 は内外面無文で、内面下部に沈線を施し、外面下部は施釉されていない。18・19 は皿である。18 は口縁が外反し、端部の一部に輪花と考えられる窪みがある。19 は体部中位の屈曲部内面に沈線状の段を有し、見込にヘラ状の施文具で草花文を施す。20 ～ 24 は青磁碗である。20・21・23 は内面にヘラ状の施文具で簡略化した花文と点綴文が施される。釉が薄く、見込と体部で段を有する。20・23 は外面に縦の櫛目文を施し、21 は外面下部にヘラ状の工具痕が残る。22 も釉は薄く、内面に幅の細い櫛目文、外面に幅の広い櫛目文を施す。見込は輪状の釉掻き取りが施される。24 は釉が厚く、内面に片彫蓮花文、横から見た葉文を施す。25 は陶器の鉢で口縁端部が内面に突出し、その下に１条の突起がある。26・27 は弥生土器である。26 は口縁が内側に大きく張り出し、外側には低く傾斜しわずかに張り出す。甕棺



第６図　出土遺物実測図①（1/4）



第７図　出土遺物実測図②（1/2：34・36，1/4）



第８図　出土遺物実測図③（1/4）

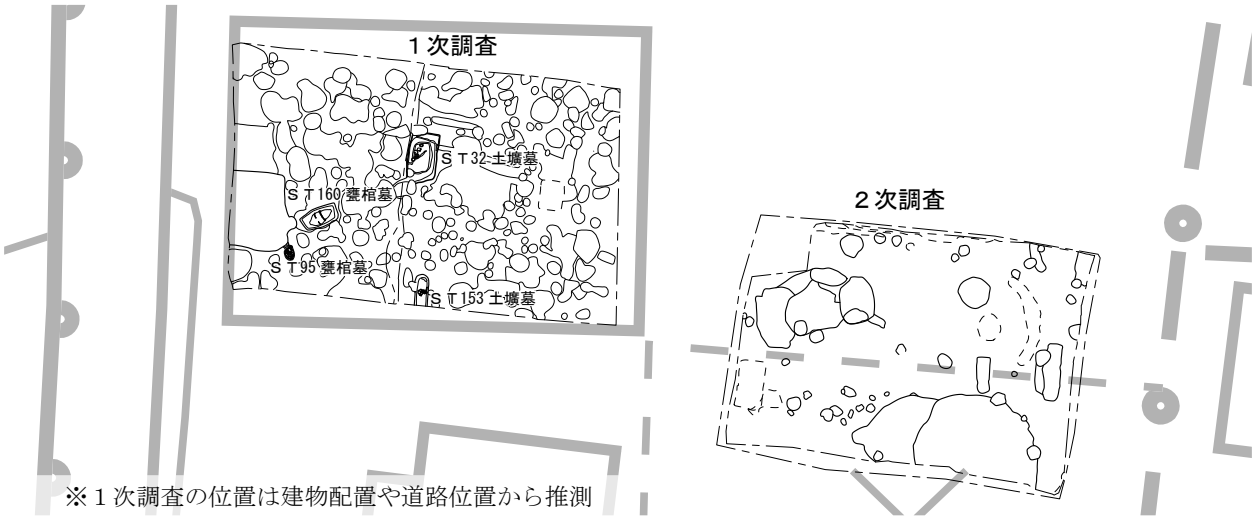
片と考えられる。28 は棒状土製品で厚みがあり、断面が正方形を呈する。29 は棒状土製品で 28 より厚みがあり、断面は正方形を呈すると考えられる。30 ～ 33 は滑石製の石鍋の破片または、破片を加工した石製品である。30 は厚さ 1.5 ㎝程度で折断され、内面側の一部に窪み状の加工を施す。31 は破片の側面を少なくとも１面は平坦に加工している。32 は内外面とも線状の傷がつけられる。断面長方形の瘤状把手がつく。34 は凹石で３面を使用する。35 は台石で、両面に平滑面を有す。また、一部に熱を受ける。36 は黒曜石製の剥片で、主要剥離面に加工痕がみられる。**37・38** はＳＥ１とＳＥ 25 を同一遺構として掘削した際出土した遺物である。38 は青磁碗で、全体に熱を受け、見込に重ね焼きの痕跡が残る。**39 ～ 43** はＳＥ 30 出土遺物。39 ～ 41 は土師器の小皿で底部は糸切りである。42 は東播系の須恵器鉢の底部と考えられる。外面下部は回転ナデによる稜線が明確に成形される。43 は弥生土器で、口縁は断面形が丸みを帯びた三角形に近く、内側に少し張り出す。**44** はＳＫ７出土の瓦器埦である。内外面上部にはミガキ痕が残る。**45 ～ 59** はＳＫ 10 出土遺物。45 ～ 51 は土師器で、45・46 は小皿、47・48 は坏である。底部はヘラ切り後板状圧痕が残る。底部付近は丸みを帯びる。49・50 は埦で、口縁部がわずかに外反する。ともに体部下半は回転ヘラケズリで調整を行い、50 は回転ナデを施す。51 は鉢で、体部は丸みを帯び、口縁は内傾する。52 は黒色土器Ｂ類の台付皿で、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。底部はヘラ切り後押し出している。53・54 は須恵器である。53 は甕の口縁で、端部を窪ませる。外面は細かな格子、内面は青海波のタタキを施す。54 は甕または壺の底部で、摩耗が著しいため詳細は不明であるが、外面には格子のタタキ痕が残る。内面器壁はオサエによる凹凸が著しい。55 ～ 59 は壁土である。55 ～ 58 には土師器片が含まれる。56 には４点の土師器片が確認でき、多くの土師器片を含むことから意図的に土師器片を混ぜていたことが想定される。56 ～ 59 には平坦面が、56 ～ 58 は竹や木等の部材によると考えられる窪みがみられる。**60 ～ 63** はＳＴ 20 出土遺物。60・61 は土師器小皿で、底部は糸切り後板状圧痕が残る。62 は瓦器埦口縁であり、内面は摩耗が著しいがミガキの痕跡は確認できる。63 は白磁碗の口縁部で厚みのある玉縁である。**64** はＳＰ 11 出土土師器小皿である。底部は糸切りである。**65** はＳＫ７・８・10 が同一遺構と考え掘削した際に出土した土師器小皿である。底部はヘラ切りである。**66・67** はＳＥ１に後出するＳＰ 13 出土遺物。66 は土師器坏で、底部は糸切りである。体部は回転ナデにより器壁の厚さにムラが生じている。67 は青磁の碗で、内面見込と体部の境界付近に沈線が施される。その下部は輪状に釉が掻き取られ、胎土が露出した箇所に目跡が残る。外面には縦筋状の回転ヘラケズリの痕跡が確認できる。

第２表　高倉遺跡第２次調査出土遺物観察表①

遺物番号	出土遺構	材質	器種	法量（cm）			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	外面	内面	外面	内面			
1 第6・22図	ＳＥ１	土師器	小皿	(8.0)	(6.3)	1.1	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	砂粒（赤色砂粒、雲母）		202205000009
2 第6・22図	ＳＥ１	土師器	小皿	8.1	6.6	0.9	橙	にぶい橙 橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒（赤色粒子、雲母）		202205000033
3 第6・22図	ＳＥ１	土師器	小皿	(8.6)	(6.8)	1.3	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒（赤色粒子、雲母）		202205000026
4 第6・22図	ＳＥ１	土師器	小皿	(10.5)	(7.8)	1.5	橙	橙 にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	精良		202205000036
5 第6・22図	ＳＥ１	土師器	坏	－	－	(2.4)	橙、褐灰	橙、褐灰	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	細砂粒（赤色粒子）		202205000020
6 第6・22図	ＳＥ１	土師器	坏	(13.8)	(9.4)	3.0	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒（赤色粒子、雲母）		202205000037
7 第6・22図	ＳＥ１	土師器	坏	14.6	10.4	3.2	にぶい黄褐 橙	にぶい黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒（赤色粒子、雲母）	板状圧痕	202205000031
8 第6・22図	ＳＥ１	土師器	土鍋	－	－	(4.4)	褐灰、黒	にぶい橙 褐灰	ハケメ、ナデ オサエ	ハケメ、ナデ	砂粒（石英、雲母）	煤付着	202205000008
9 第6・22図	ＳＥ１	土師器	土鍋	－	－	(2.9)	黒褐	橙	オサエ、ナデ	ナデ	細砂粒（雲母、赤色粒子）	煤付着	202205000022
10 第6・23図	ＳＥ１	瓦器	埦	－	5.9	(2.1)	灰白	灰白	不明	不明	細砂粒（赤色粒子、雲母）	底部押出し、板状圧痕	202205000038
11 第6・23図	ＳＥ１	瓦器	埦	－	(8.0)	(3.8)	灰	灰	回転ナデ、ナデ	ナデ	細砂粒（雲母）	底部押出し	202205000035
12 第6・23図	ＳＥ１	瓦器	埦	(18.1)	－	(4.9)	暗灰、灰白	暗灰、灰白	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒（雲母、赤色粒子）	底部押出し	202205000029
13 第6・23図	ＳＥ１	瓦器	皿	(8.7)	(7.8)	(1.2)	灰白、黒	暗灰	回転ナデ、ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	微砂粒（雲母）		202205000024
14 第6・23図	ＳＥ１	瓦器	皿	(9.2)	(7.5)	(1.8)	灰白、褐灰	灰白、褐灰	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	ほぼ精良		202205000023
15 第6・23図	ＳＥ１	須恵器	鉢	－	－	－	灰	褐灰	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	砂粒		202205000025
16 第6・23図	ＳＥ１	白磁	碗	－	4.8	(2.9)	灰白	灰白	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	見込　輪状釉掻き取り 白磁碗Ⅳ類（福建省系）	202205000019
17 第6・23図	ＳＥ１	白磁	碗	－	5.9	(5.8)	にぶい黄橙 灰白	灰白	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	白磁碗Ⅴ類（福建省系）	202205000011
18 第6・23図	ＳＥ１	白磁	碗	－	－	(4.6)	灰白	灰白	施釉	施釉	ほぼ精良	沈線有り 白磁碗Ⅷ 類	202205000017
19 第6・23図	ＳＥ１	白磁	皿	(9.4)	3.3	2.1	灰白	灰白	ヘラ切り、施釉	施釉	ほぼ精良	白磁皿Ⅵ-2a 類	202205000034
20 第6・23図	ＳＥ１	青磁	碗	－	(4.8)	(3.5)	灰白 灰オリーブ	灰オリーブ	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	同安窯系青磁碗Ⅰ-1b 類	202205000004
21 第6・23図	ＳＥ１	青磁	碗	－	5.1	(3.7)	灰白 灰オリーブ	灰オリーブ	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	同安窯系青磁碗Ⅰ-1a 類	202205000032
22 第6・23図	ＳＥ１	青磁	碗	－	(4.8)	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	見込　輪状釉掻き取り 同安窯系青磁碗Ⅰ-1c 類	202205000012
23 第6・24図	ＳＥ１	青磁	碗	(16.1)	4.9	7.0	灰白 灰オリーブ	灰白	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	同安窯系青磁碗Ⅰ-1b 類	202205000021
24 第6・24図	ＳＥ１	青磁	碗	－	5.1	(5.5)	灰 灰オリーブ	灰オリーブ	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	精良	龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2b 類	202205000027
25 第6・24図	ＳＥ１	無釉陶器	鉢	－	－	(4.2)	灰褐	灰赤	回転ナデ	回転ナデ	砂粒	陶器鉢Ⅰ-1b 類	202205000016
26 第6・23図	ＳＥ１	弥生土器	甕	－	－	(2.6)	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒（雲母、角閃石）		202205000010
27 第6・24図	ＳＥ１	弥生土器	甕	－	－	(4.9)	橙 にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	細砂粒（赤色粒子、角閃石）		202205000015
28 第6・24図	ＳＥ１	土製品	棒状土製品	(5.6)	(3.0)	2.5	橙、黒褐	－	ナデ	－	細砂粒（雲母、赤色粒子）	一部被熱	202205000030
29 第6・24図	ＳＥ１	土製品	棒状土製品	(8.2)	(4.1)	4.0	褐灰	－	ナデ	－	細砂粒（雲母、赤色粒子）		202205000007
30 第6・24図	ＳＥ１	石製品	滑石加工品	8.0	2.8	1.5	黒、灰	－	－	－	－	穿孔有り	202205000006
31 第6・24図	ＳＥ１	石製品	滑石加工品	7.0	7.2	1.9	灰	－	－	－	－	両面に赤褐色の斑点有	202205000003
32 第6・24図	ＳＥ１	石製品	滑石加工品	7.2	13.9	3.4	褐灰	灰白	－	－	－		202205000014
33 第6・24図	ＳＥ１	石製品	石鍋	(10.5)	(11.3)	1.9～3.2	灰白、灰褐	－	－	－	－		202205000018
34 第7・24図	ＳＥ１	石製品	凹石	11.2	8.9	9.5	灰、明黄褐	－	－	－	－		202205000013

第３表　高倉遺跡第２次調査出土遺物観察表②

遺物番号	出土遺構	材質	器種	法量（cm）			色調		調整		胎土	備考	遺物登録番号
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	外面	内面	外面	内面			
35 第7・24図	ＳＥ１	石製品	台石	(15.4)	(9.4)	(3.3)	赤灰、褐灰	－	－	－	－	全面被熱	202205000005
36 第7・25図	ＳＥ１	石器	剥片	3.2	2.4	0.7	黒	－	－	－	－	黒曜石、4.69 g	202205000028
37 第7・25図	ＳＥ１ ＳＥ25	土師器	皿	(15.4)	(11.0)	2.6	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)		202205000001
38 第7・25図	ＳＥ１ ＳＥ25	青磁	碗	－	(6.0)	(3.3)	灰黄 にぶい赤褐	灰黄 にぶい赤褐	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	見込　輪状釉掻き取り 福建省系青磁Ｂ	202205000002
39 第7・25図	ＳＥ30	土師器	小皿	(8.5)	7.1	1.3	橙 にぶい褐	橙 にぶい褐	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子)	底部　板状圧痕	202205000067
40 第7・25図	ＳＥ30	土師器	小皿	(9.0)	(7.2)	0.9	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒（石英、赤色粒子、雲母）	内外面に煤付着	202205000064
41 第7・25図	ＳＥ30	土師器	小皿	(11.0)	(9.2)	1.3	橙	橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	ほぼ精良		202205000063
42 第7・25図	ＳＥ30	須恵器	鉢	－	(8.0)	(3.6)	灰白	灰黄	回転ナデ、ケズリ ヘラ切り	回転ナデ	砂粒 (長石、石英)		202205000066
43 第7・25図	ＳＥ30	弥生土器	甕	－	－	(2.5)	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒（長石、石英、角閃石）	一部被熱	202205000065
44 第7・25図	ＳＫ７	瓦器	埦	－	－	(2.0)	暗灰、灰白	暗灰 灰白	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	ほぼ精良		202205000040
45 第7・25図	ＳＫ10	土師器	小皿	10.6	7.6	2.1	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)	底部　板状圧痕	202205000043
46 第7・25図	ＳＫ10	土師器	小皿	11.2	7.1	2.0	橙 にぶい橙	橙 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)	底部　板状圧痕	202205000044
47 第7・25図	ＳＫ10	土師器	坏	11.3	7.4	3.1	橙	橙 にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)	底部　板状圧痕 煤付着	202205000048
48 第7・25図	ＳＫ10	土師器	坏	11.7	8.2	3.1～3.8	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)	底部　板状圧痕	202205000047
49 第7・25図	ＳＫ10	土師器	埦	(11.5)	(6.2)	4.2	橙 にぶい橙	灰褐	回転ヘラケズリ、ナデ 回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)		202205000045
50 第7・25図	ＳＫ10	土師器	埦	(13.4)	(8.3)	4.9	橙	橙	回転ナデ、ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)		202205000046
51 第7・25図	ＳＫ10	土師器	鉢	－	－	(3.5)	橙	橙	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	細砂粒、 (雲母、赤色粒子)		202205000041
52 第7・25図	ＳＫ10	黒色土器	高台付皿	10.2	6.8	2.7	黒、灰黄褐	黒	回転ナデ、ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒 (赤色粒子、雲母)	Ｂ類（両黒）	202205000049
53 第7・25図	ＳＫ10	須恵器	甕	－	－	(6.1)	灰	灰	タタキ（格子） 回転ナデ	タタキ（青海波） 回転ナデ	細砂粒		202205000050
54 第7・26図	ＳＫ10	須恵器	甕	－	－	(7.5)	明褐灰 にぶい橙	明褐灰	タタキ（格子） ナデ	ナデ、オサエ	砂粒、細砂粒 (赤色粒子、雲母)		202205000051
55 第7・26図	ＳＫ10	土製品	壁土	(11.9)	(4.0)	(3.1)	橙、褐灰	－	－	－	－	土師器片含む	202205000042
56 第7・26図	ＳＫ10	土製品	壁土	(8.1)	(6.6)	(4.5)	にぶい橙	－	－	－	－	土師器片含む	202205000052
57 第7・26図	ＳＫ10	土製品	壁土	(7.7)	(7.2)	(4.6)	橙	－	－	－	－	土師器片含む	202205000054
58 第7・26図	ＳＫ10	土製品	壁土	(10.2)	(9.0)	(3.5)	にぶい橙 橙	－	－	－	－	土師器片含む 部材痕有	202205000053
59 第7・26図	ＳＫ10	土製品	壁土	(11.0)	(13.1)	(6.0)	橙 にぶい橙	－	－	－	－	部材痕有	202205000055
60 第7・26図	ＳＴ20	土師器	小皿	(8.4)	6.0	1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	ほぼ精良	底部　板状圧痕	202205000061
61 第7・26図	ＳＴ20	土師器	小皿	8.3～8.6	6.6～7.0	0.9～1.4	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	ほぼ精良	底部　板状圧痕	202205000062
62 第7・26図	ＳＴ20	瓦器	埦	－	－	(2.9)	暗灰、灰	暗灰	回転ナデ ミガキ	回転ナデ、ミガキ	細砂粒（長石、石英、雲母）		202205000060
63 第7・26図	ＳＴ20	白磁	碗	(17.0)	－	(3.7)	白	白	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	白磁碗Ⅳ類	202205000059
64 第8・26図	SP11	土師器	小皿	(9.0)	(6.8)	1.5	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒（赤色粒子、雲母、石英）		202205000056
65 第8・26図	ＳＫ７・８・10	土師器	小皿	(9.8)	(5.6)	1.8	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	細砂粒（赤色粒子、雲母）		202205000039
66 第8・26図	SP13	土師器	坏	(15.4)	(9.6)	3.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	細砂粒（石英、雲母、赤色粒子）		202205000057
67 第8・26図	SP13	青磁	碗	－	(7.0)	(4.0)	灰黄	灰黄	回転ヘラケズリ 施釉	施釉	ほぼ精良	見込　輪状釉掻き取り 福建省系青磁Ｂ	202205000058



第９図　高倉遺跡第１・２次調査遺構略図（1/250）

４．総括

今回の調査では古代の遺構や弥生時代の遺物を確認した。ＳＫ10は10世紀後半～11世紀代に属するが、先行するＳＫ８やＳＫ７についても、ＳＫ７から瓦器埦片が出土していることからほぼ同時期であることが想定される。ＳＥ１からは12世紀後半の輸入陶磁器が出土している。ＳＥ25からも同安窯系の青磁碗片と考えられる遺物や底部ヘラ切り、糸切りの土師器がともに出土しており、12世紀後半に収まると考えられる。またＳＥ30は東播系の須恵器鉢や底部糸切りの土師器小皿が出土しており、12世紀後半から13世紀以降に埋没したと考えられる。検出された３基の井戸はＳＥ１・25は平面形が歪んだ円形や楕円形であり、直径２ｍ以上の規模であるのに対し、ＳＥ30の平面形はほぼ正円で、直径も約１ｍと小型であり、形態に違いがみられる。また、ＳＥ１の壁面は緩やかに傾斜していくが、ＳＥ30はほぼ垂直に掘りこまれており、ＳＥ１・25とＳＥ30には時期差がある可能性が高い。

第１次調査では弥生時代中期前半と考えられる甕棺墓が２基検出されているが、今回の調査では弥生時代の遺構は確認できなかった。しかし、同時期の甕棺片と考えられる遺物が後世の遺構から出土している。調査区上面は削平されているため、弥生時代の遺構が失われている可能性がある。

また、第１次調査では２基の土壙墓が確認されている。ＳＴ153は長軸長1.5ｍ以上、短軸長0.45ｍ、深さ0.4ｍを測り、平面形が隅丸方形から楕円形を呈する。底部から瓦器埦や土師器小皿が出土し、12世紀後半に属すると考えられる。主軸方位は今回検出したＳＴ20に近似すると想定される。ＳＴ32は長軸長1.5ｍ、短軸長１ｍ、深さ0.6ｍを測り、平面形は方形を呈する。完形の同安窯系青磁碗や小碗・皿、白磁皿が出土し、12世紀後半に属すると考えられる。調査地周辺では井戸が集中する点、12世紀後半に属する井戸と土壙墓が近接している点が注目される。今後の調査で集落と墓域の関係を明らかにしていきたい。（小川原）

第 10 図　調査区全景（北上空から）

第 11 図　検出状況（南から）

第 12 図　ＳＥ１・25 掘削状況（北から）

第 13 図　ＳＥ１土層堆積状況（西から）

第 14 図　ＳＥ 30 土層堆積状況（南から）

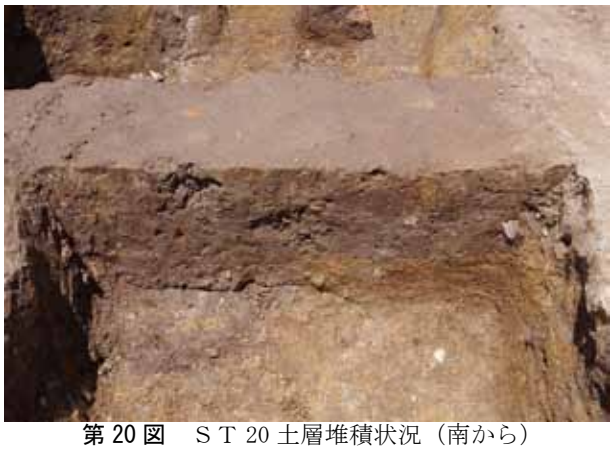
第 15 図　ＳＫ７土層堆積状況（北から）

第 16 図　ＳＫ７完掘状況（北から）

第 17 図　ＳＫ 10 土層堆積状況（南から）

第 18 図　ＳＫ 10 遺物出土状況（北から）

第 19 図　ＳＫ７・８・10 完掘状況（北から）



第 20 図　ＳＴ 20 土層堆積状況（南から）

第 21 図　ＳＴ 20 遺物出土状況（東から）

第 22 図　出土遺物写真①

第 23 図　出土遺物写真②

第 24 図　出土遺物写真③

第 25 図　出土遺物写真④

第 26 図　出土遺物写真⑤

Ⅲ．庄屋野遺跡第 10 次調査

１．調査に至る経過

令和４年６月 13 日、土地所有者から専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財である庄屋野遺跡に含まれる。建物の基礎構造上、遺跡の保護は不可能であったことから、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。令和４年７月 15 日に土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年９月８日から９月 22 日まで発掘調査を実施した。対象面積 201 ㎡のうち調査面積は 59 ㎡である。

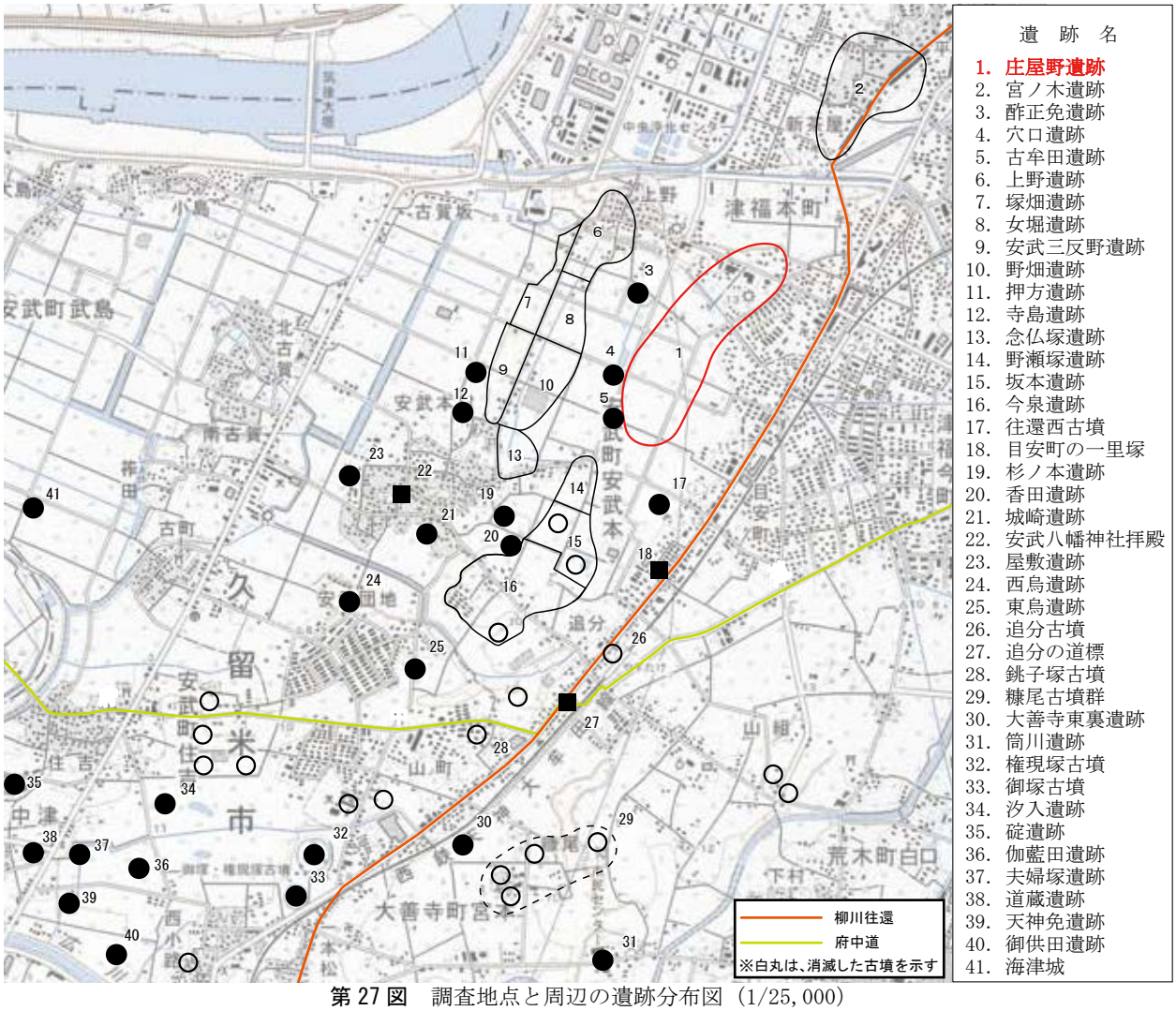
２．位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部、筑後川の中流域に位置する。筑後川は久留米城付近で流れを南西へと変え、その左岸には筑後川や金丸川、広川によって形成された氾濫原が広がる。氾濫原の東側には標高 10 m前後の低台地が点在しており、庄屋野遺跡はこの台地上に位置する。

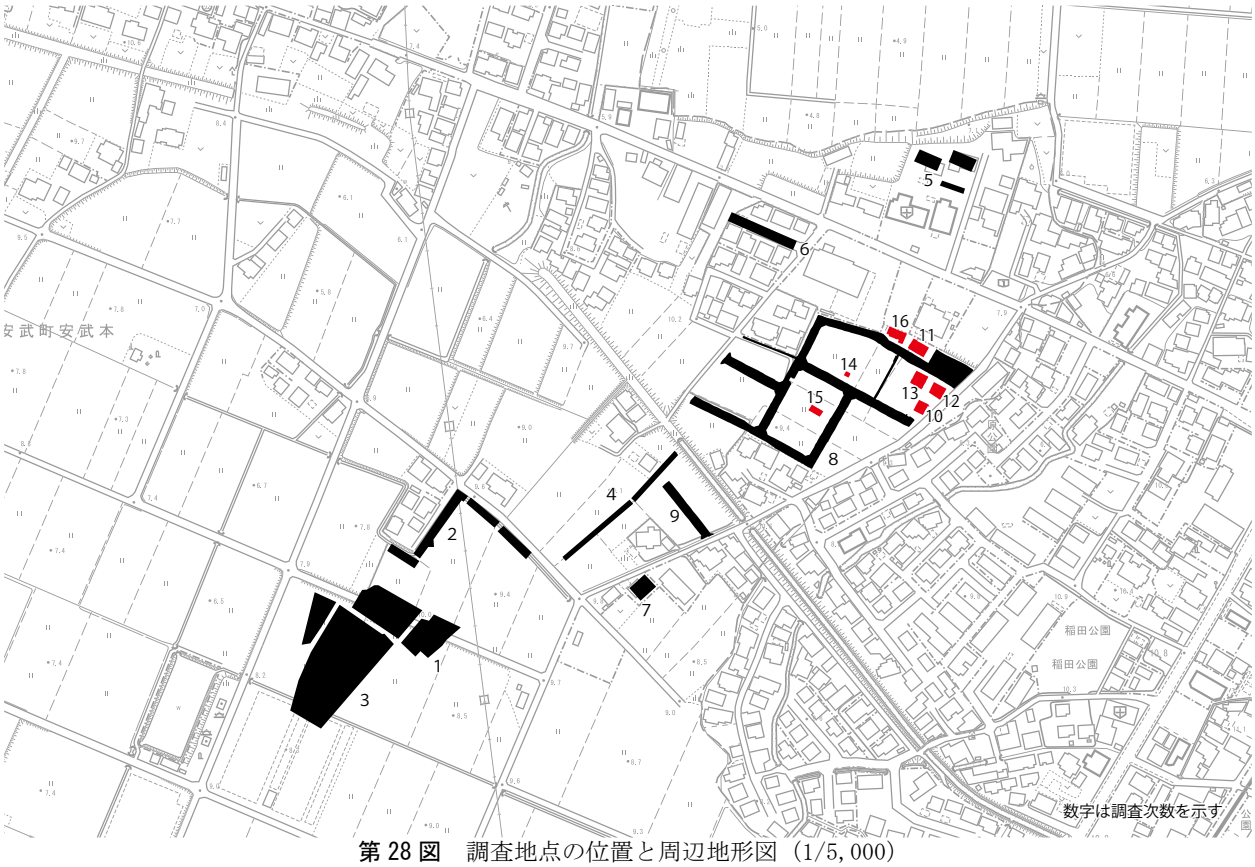
庄屋野遺跡周辺で確認されている縄文時代の遺構は主に落とし穴状遺構である。念仏塚遺跡、庄屋野遺跡、穴口遺跡、古牟田遺跡、野畑遺跡、野瀬塚遺跡、今泉遺跡、坂本遺跡では、落とし穴状遺構が列状に検出されている。

弥生時代になると、塚畑遺跡を中心とした台地上で集落域と墓域が検出される。前期の遺構としては、城崎遺跡で土坑、野畑遺跡で貯蔵穴、塚畑遺跡や坂本遺跡で竪穴住居が確認されている。前期末には、今泉遺跡で竪穴住居 20 基と土坑 23 基が馬蹄状に配置される集落が認められた。また、同時期には墓域も確認されており、酢正免遺跡の土壙墓、安武三反野遺跡の壺棺墓 18 基などがある。中期になると居住域は南方へと展開する。中期初頭では、庄屋野遺跡で台地の北端を廻る大溝が検出されており、環濠集落に伴うものと考えられている。中期前半の酢正免遺跡・安武三反野遺跡の土坑群や東烏遺跡の 22 基の竪穴住居や 16 基の土坑など、集落域が確認されている。墓域としては、安武三反野遺跡の甕棺墓、石蓋土壙墓、木棺墓からなる列状埋葬が挙げられる。後期に入ると集落域は広がる。塚畑遺跡で環濠を伴う集落が営まれる。上野遺跡と庄屋野遺跡では竪穴住居、押方遺跡では掘立柱建物や竪穴住居、安武三反野遺跡では大溝や 30 棟の掘立柱建物群が検出され、これが塚畑遺跡を中心に営まれた集落域の南限とみられる。また、野畑遺跡では前期末から終末期にかけて掘立柱建物や土坑が分布しており、塚畑遺跡の大溝と同方向の大溝が検出されていることから、野畑遺跡まで集落域があったと考えられる。なお、墓域については、明確な時期決定には至っていないものの、安武三反野遺跡の石蓋土壙墓などが後期に属すると考えられている。

古代の安武一帯は、『倭名類聚抄』の三潴郡に相当し、８つある郷のうち、田家郷に比定されて



第 27 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第 28 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）

いる。野畑遺跡では、総柱建物を伴う約 30 棟の建物群が検出され、土坑から刻書土器が出土した。念仏塚遺跡では正方位の建物群や耳皿、「大印」「南宅氏」といった墨書土器が出土した。野瀬塚遺跡では二彩陶器や「三万大領」「大領」「三万少」などと書かれた墨書土器が出土した。これらの遺構は、田家郷に関連する官衙的建物と想定されている。８～10 世紀にはこのほかにも、庄屋野遺跡、今泉遺跡、天神免遺跡、宮ノ木遺跡、酢正免遺跡、寺島遺跡、杉ノ本遺跡で遺構が見つかっている。

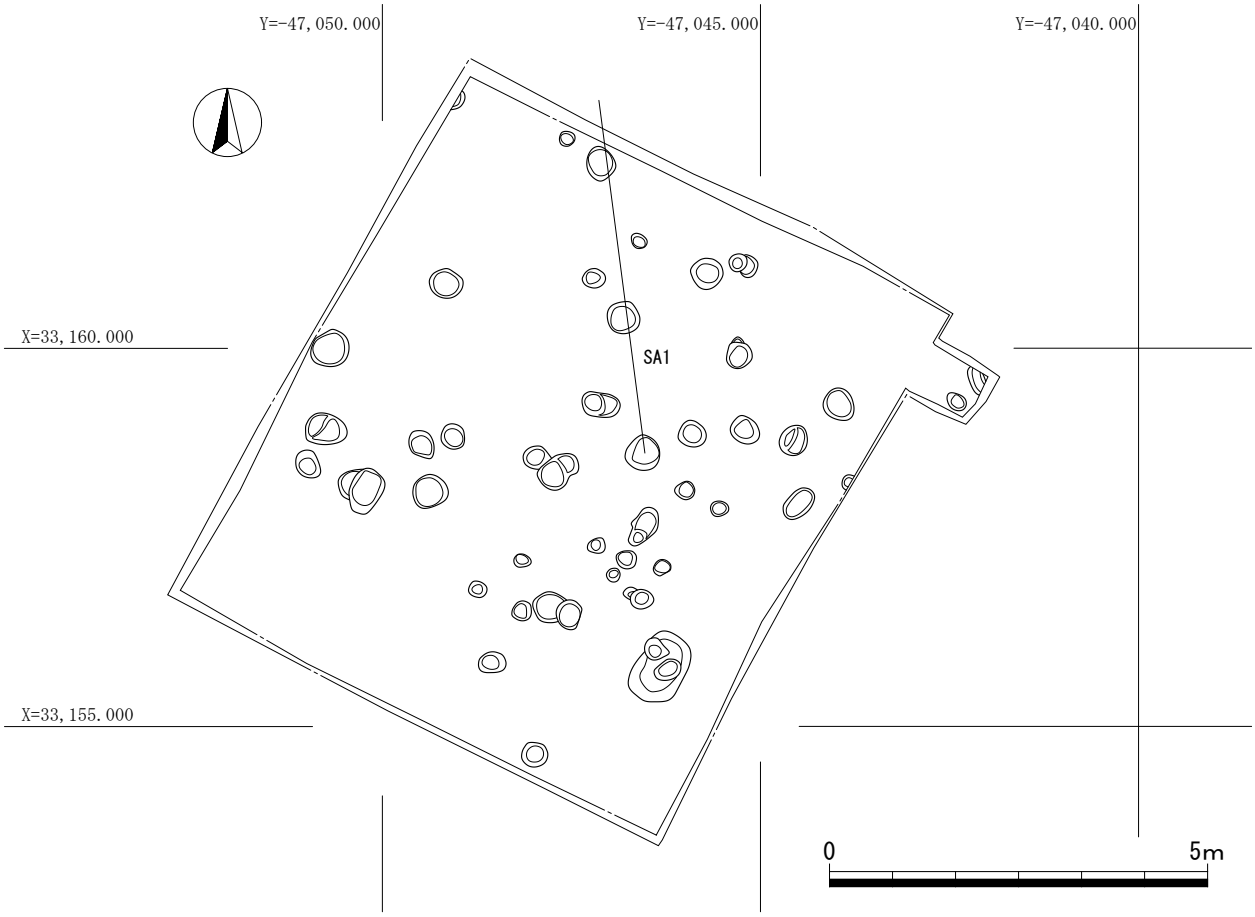
３．調査の記録

（１）調査の経過

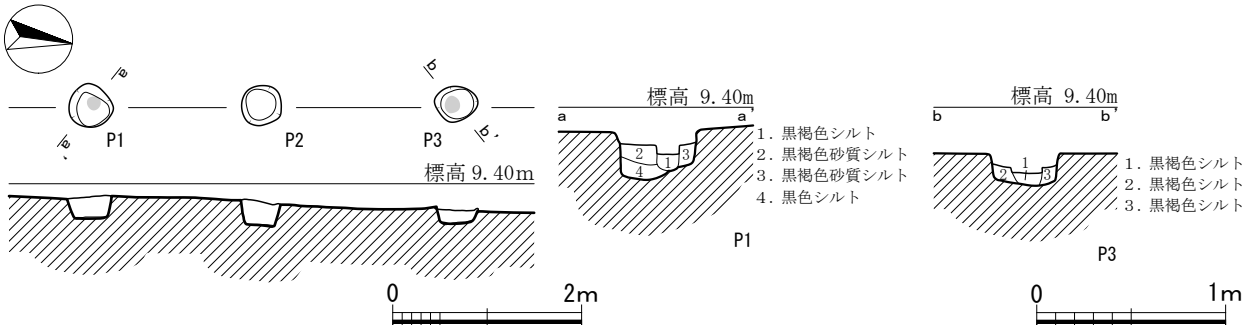
今回の調査では、第８次調査で確認された遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。

令和４年９月８日、重機による表土剥ぎを行った。その後、人力による遺構の検出、掘り下げ、個別遺構図の作成・遺構写真の撮影を行った。同年９月 21 日、全景写真を撮影した。翌日埋め戻しおよび機材の撤収を行い、現地での調査を終了した。

遺構はトータルステーションを使用して測量し、データの編集と保存は、株式会社ＣＵＢＩＣ製ソフト「遺構くん cubic」を用いて行った。土層断面図は水糸メッシュ法（1/10）で記録した。遺構写真は、Canon　EOS　6Ｄを使用して撮影した。



第 29 図　遺構配置図（1/100）



第 30 図　ＳＡ１実測図（1/80、1/40：土層図）

（２）検出遺構

今回の調査では、柵列１条とピット多数を確認した。以下、遺構の詳細について述べる。

柵列

ＳＡ１（第 29・30 ～ 33 図）

調査区北側で検出した柵列である。方位はＮ-7.9°-Ｗである。柱間寸法は1.8ｍ～2.0ｍを測る。柱穴は 34 ～ 46 ㎝、柱痕は 14 ～ 16 ㎝を測る。深さは 16 ～ 25 ㎝を測る。Ｐ１の埋土から土師器の甕の細片が、Ｐ２から土師器の甕や坏の細片が出土している。

（３）出土遺物

今回の調査では、柵列やピットから土師器の坏や甕の細片がパンコンテナー１箱分出土しているが、図化できるものはなかった。

４．総括

第Ⅸ章の総括を参照されたい。　（長谷川）

第 31 図　調査区全景（北上空から）

第 32 図　ＳＡ１Ｐ１土層（北から）

第 33 図　ＳＡ１Ｐ３土層（東から）

Ⅳ．庄屋野遺跡第 11 次調査

１．調査に至る経過

令和４年６月３日、土地所有者から専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財である庄屋野遺跡に含まれる。建物の基礎構造上、遺跡の保護は不可能であったことから、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。令和４年７月 11 日に土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年９月８日から９月 22 日まで発掘調査を実施した。対象面積 202 ㎡のうち調査面積は 95 ㎡である。

２．位置と環境

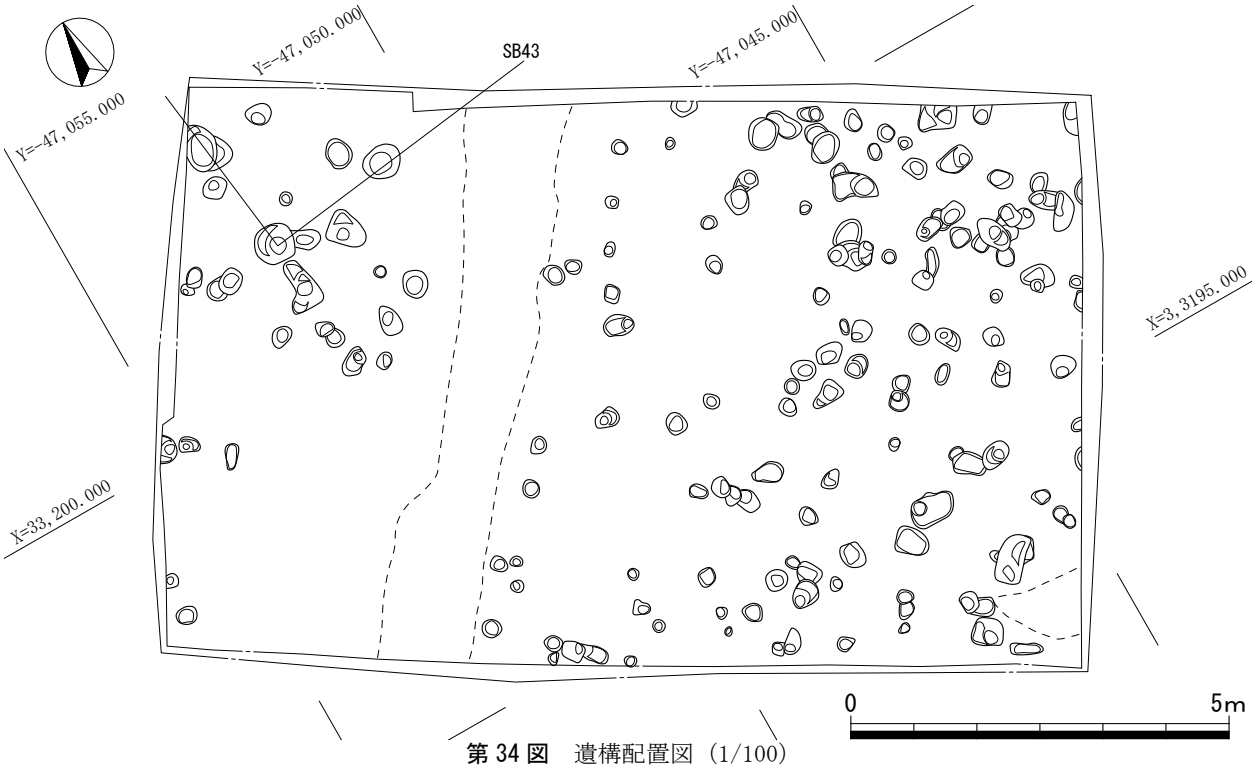
本調査地は第 10 次調査地の北 30 ｍに位置する。周辺環境の詳細は、第Ⅲ章を参照されたい。

３．調査の記録

（１）調査の経過

今回の調査では、第８次調査で確認された遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。

令和４年９月８日、重機による表土剥ぎを行った。その後、人力による遺構の検出、掘り下げ、



第 34 図　遺構配置図（1/100）

個別遺構図の作成・遺構写真の撮影を行った。同年９月 21 日、全景写真を撮影した。翌日埋め戻しおよび機材の撤収を行い、現地での調査を終了した。

遺構は、トータルステーションを使用して測量し、データの編集と保存は、株式会社ＣＵＢＩＣ製ソフト「遺構くん cubic」を用いて行った。土層断面図は水糸メッシュ法（1/10）で記録した。遺構写真は、Canon　EOS　6Ｄを使用して撮影した。

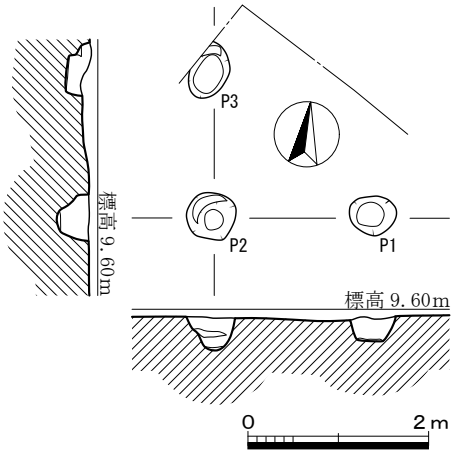
（２）検出遺構

今回の調査では、掘立柱建物１棟とピット多数を確認した。以下、遺構の詳細について述べる。

掘立柱建物

ＳＢ 43（第 35・36 図）

調査区北西部で検出した掘立柱建物である。方位はＮ -7.1°　－Ｗである。南北１間以上、東西１間以上の規模を有する。柱間は南北 1.6 ｍ、東西 1.6 ｍである。柱穴は円形・楕円形を成し、直径は 52 ～ 60 ㎝、深さは 23 ～ 35 ㎝である。出土遺物は土師器の坏や甕の細片が出土している。



第 35 図　ＳＢ 43 実測図（1/80）

（３）出土遺物

今回の調査ではピットから土師器の坏や甕の細片がパンコンテナー１箱分出土しているが、図化できるものはなかった。

４．総括

第Ⅸ章の総括を参照されたい。　（長谷川）

第 36 図　調査区全景（北から）

Ⅴ．庄屋野遺跡第 12 次調査

１．調査に至る経過

令和４年９月９日、土地所有者から専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財である庄屋野遺跡に含まれる。建物の基礎構造上、遺跡の保護は不可能であったことから、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。令和４年 11 月４日に土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年 11 月８日から 11 月 28 日まで発掘調査を実施した。対象面積 201 ㎡のうち調査面積は 89 ㎡である。

２．位置と環境

本調査地は第 10 次調査の北東に隣接する。周辺環境の詳細は、第Ⅲ章を参照されたい。

３．調査の記録

（１）調査の経過

今回の調査では、第８次調査で確認された遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。

令和４年 11 月８日､機材を搬入し､調査を開始した。翌日､重機による表土剥ぎを行った。その後、人力による遺構の検出、掘り下げ、個別遺構図の作成･遺構写真の撮影を行った。同年 11 月 24 日、全景写真を撮影した。翌日埋め戻しを行い、同年 11 月 28 日に機材を撤収し、現地での調査を終了した。

遺構は、トータルステーションを使用して測量し、データの編集と保存は、株式会社ＣＵＢＩＣ製ソフト「遺構くん cubic」を用いて行った。土層断面図は水糸メッシュ法（1/10）で記録した。遺構写真は、Canon　EOS　６D を使用して撮影した。遺物写真は、PENTAX　K- １Ⅱを使用して撮影した。

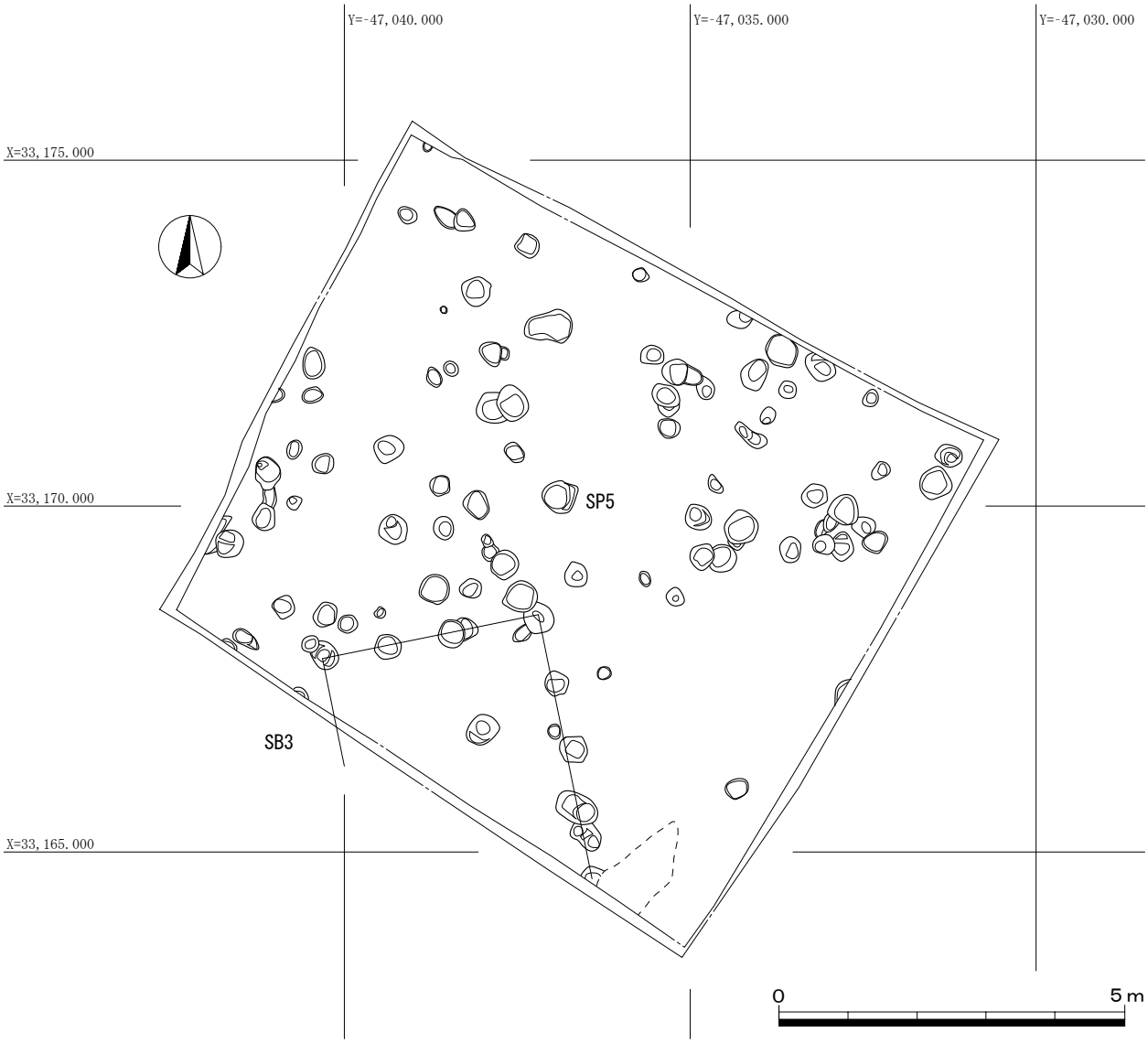
（２）検出遺構

今回の調査では、掘立柱建物１棟とピット多数を確認した。以下、遺構の詳細について述べる。

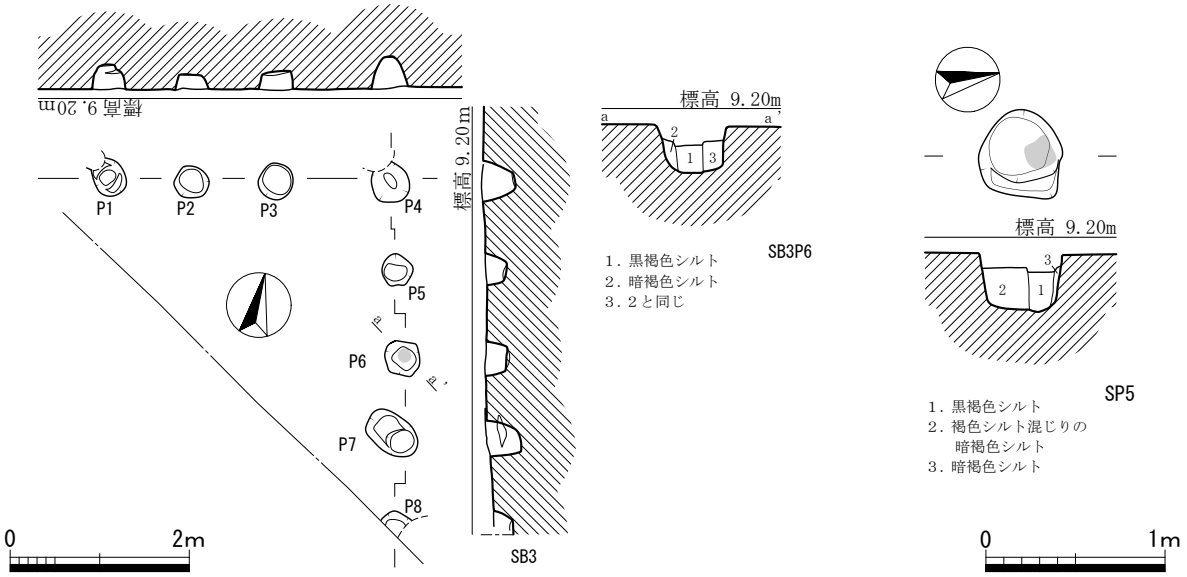
掘立柱建物

ＳＢ３（第 38 ～ 42 図）

調査区南部で検出した掘立柱建物である。方位はＮ -11.5°　－Ｗである。南西部が調査区外へ出るため正確な規模は不明であるが、南北４間以上、東西３間以上の規模を有する。柱間は南北 92 ㎝～ 128 ㎝、東西 92 ㎝～ 102 ㎝であり、不揃いである。柱穴は円形・楕円形を成し、直径は 34 ～



第 37 図　遺構配置図（1/100）



第 38 図　ＳＢ３・ＳＰ５実測図（1/80、1/40：ＳＢ３Ｐ６、ＳＰ５土層図）

62 ㎝、深さは 16 ～ 36 ㎝である。出土遺物はＰ１から土錘が、Ｐ４から土師器の坏や甕の細片が出土している。

ピット

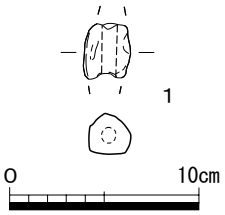
ＳＰ５（第 38・43・44 図）

調査区中央で検出したピットである。平面形は円形を呈する。直径 96㎝、深さ 64 ㎝を測る。柱痕を確認したが、ＳＰ５と柵列や掘立柱建物を成す柱穴を確認できなかった。出土遺物は掘方から土師器の坏や甕の細片が出土している。

（３）出土遺物（第 39・45 図）

今回の調査ではピットから土師器の坏や甕の細片がパンコンテナー１箱分出土しているが、大半は細片で図化できなかった。

１はＳＢ３Ｐ１から出土した土錘である。長さ 2.9㎝以上、厚さ 2.3 ㎝を測る。色調は褐灰色を呈する。胎土は精良であり、外面をナデて仕上げる。



第 39 図　出土遺物実測図（1/4）

４．総括

第Ⅸ章の総括を参照されたい。　（長谷川）

第 40 図　調査区全景（北東上空から）

第 41 図　ＳＢ３Ｐ６土層（南から）

第 42 図　ＳＢ３Ｐ６完掘状況（北から）

第 43 図　ＳＰ５土層（東から）

第 44 図　ＳＰ５完掘状況（東から）

第 45 図　出土遺物写真

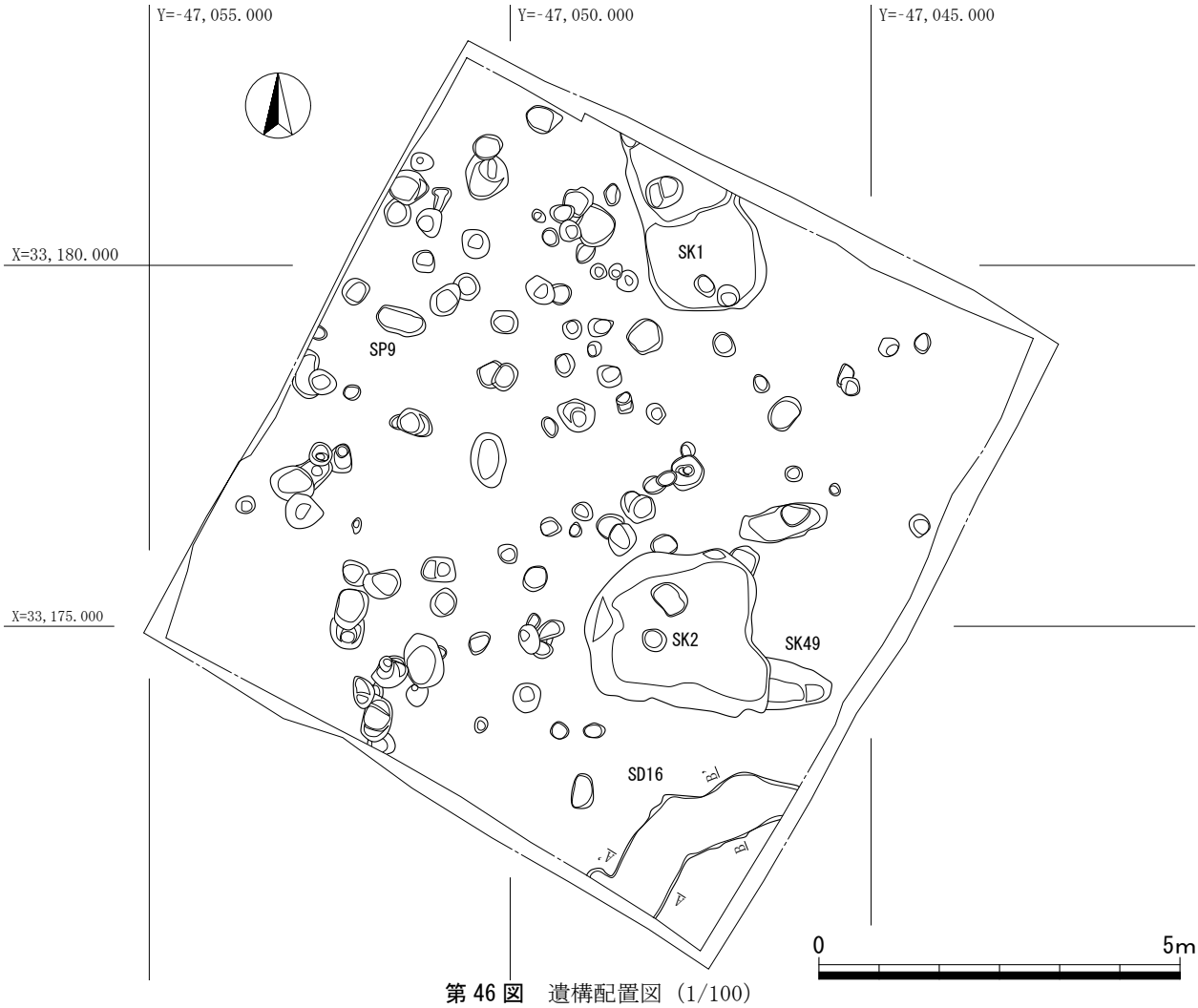
Ⅵ．庄屋野遺跡第 13 次調査

１．調査に至る経過

令和４年 10 月 17 日、土地所有者から専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財である庄屋野遺跡に含まれる。建物の基礎構造上、遺跡の保護は不可能であったことから、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。令和４年 11 月７日に土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年 11 月８日から 11 月 28 日まで発掘調査を実施した。対象面積 201 ㎡のうち調査面積は 89 ㎡である。

２．位置と環境

本調査地は第 10 次調査地の北に隣接する。周辺環境の詳細は、第Ⅲ章を参照されたい。



第 46 図　遺構配置図（1/100）

３．調査の記録

（１）調査の経過

今回の調査では、８次調査で確認された遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。

令和４年 11 月８日、機材を搬入し、調査を開始した。11 月 10 日、重機による表土剥ぎを行った。その後、人力による遺構の検出、掘り下げ、個別遺構図の作成・遺構写真の撮影を行った。同年 11 月 24 日、全景写真を撮影した。翌日埋め戻しを行い、同年 11 月 28 日に機材を撤収し、現地での調査を終了した。

遺構は、トータルステーションを使用して測量し、データの編集と保存は、株式会社ＣＵＢＩＣ製ソフト「遺構くん cubic」を用いて行った。土層断面図は水糸メッシュ法（1/10）で記録した。遺構写真は、Canon　EOS　６D を使用して撮影した。遺物写真は、PENTAX　K- １Ⅱを使用して撮影した。

（２）検出遺構

今回の調査では、溝１条、土坑３基、ピット多数を検出した。以下、遺構の詳細について述べる。

溝

ＳＤ 16（第 47・50 図）

調査区南東部で検出した溝である。長さ 2.7 m分を検出した。南西側と東側は調査区外へ延びる。幅 80 ㎝、深さ 10 ㎝を測るが、南西側へと傾斜する。断面形は台形を呈する。

土坑

ＳＫ１（第 47・51 図）

調査区北部で検出した土坑である。北部は調査区外へ延びる。規模は長軸 2.0 m以上、短軸 1.5 m、深さ 30 ㎝を測る。平面形は楕円形を呈する。２段のテラスを有し、北側へ深くなる。遺物は、土師器の蓋、坏、高坏、皿、甕、須恵器の甕、土錘などが出土している。

ＳＫ２（第 47・52 図）

調査区南部で検出した土坑である。規模は長軸 2.3 m、短軸 2.2 m、深さ 40 ㎝を測る。平面形は不整形を呈する。ＳＫ 49 に後出する。遺物は、土師器の坏、甕、須恵器の坏蓋、坏などが出土している。

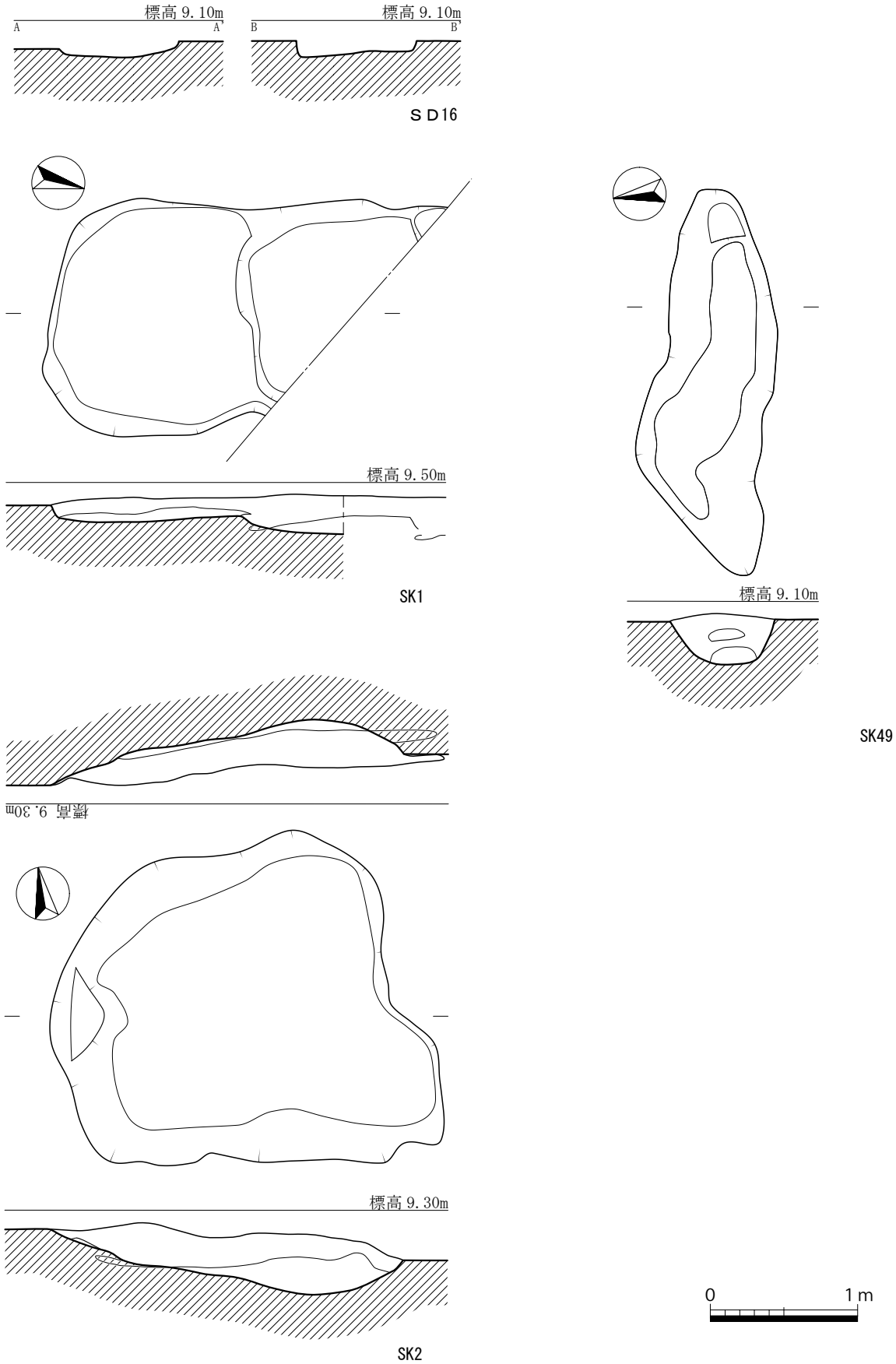
ＳＫ 49（第 47・49 図）

調査区南部で検出した土坑である。規模は長軸 2.5 m、短軸 0.7 m、深さ 34 ㎝を測る。平面形は溝状を呈する。ＳＫ１に先行する。遺物は、土師器甕の細片が出土している。

（３）出土遺物（第 48・53 図・第 4 表）

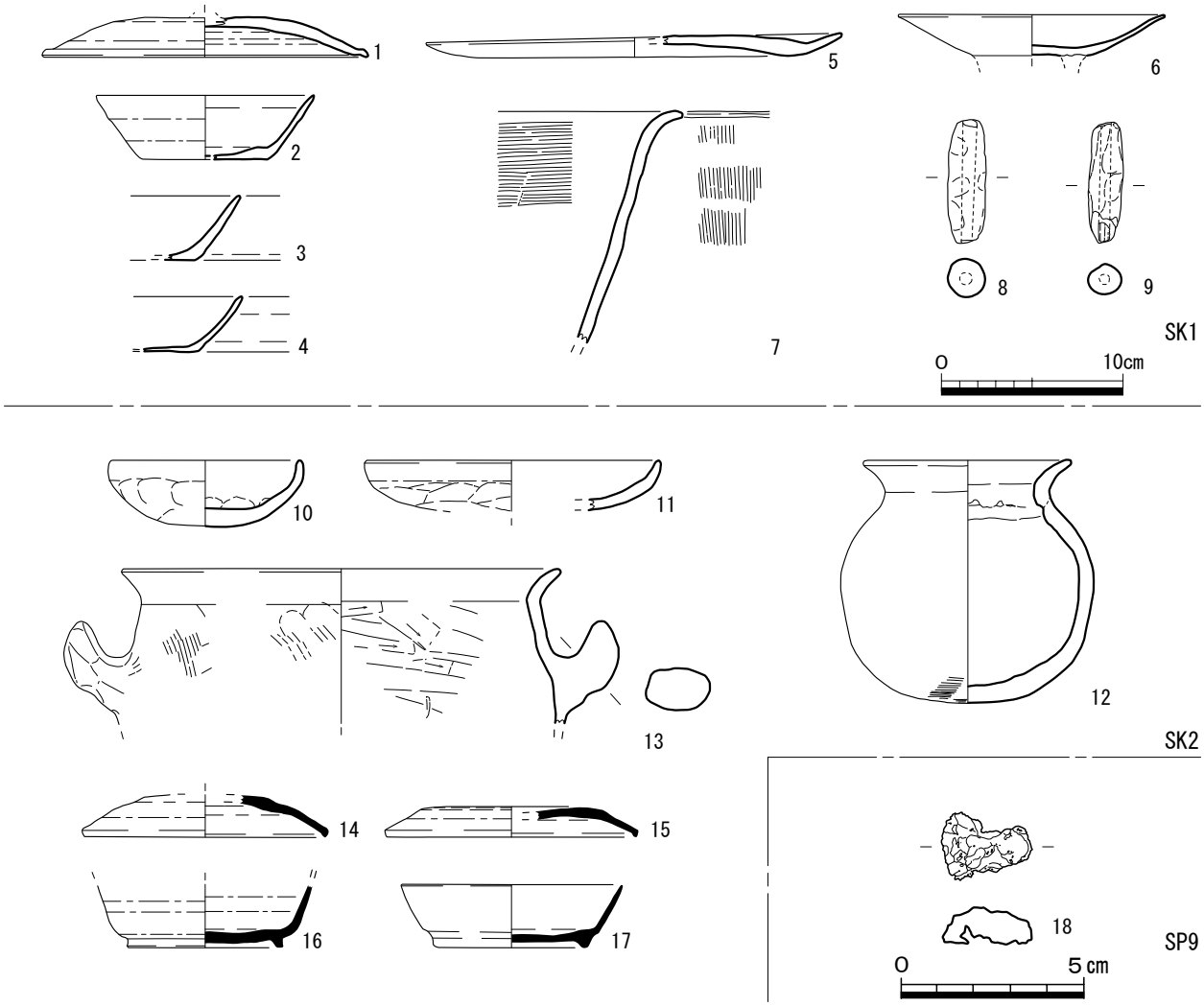
今回の調査では、パンコンテナー１箱分の遺物が出土した。法量等の詳細については、観察表を参照されたい。

１～９はＳＫ１から出土した。１は土師器の蓋である。外面は回転ヘラケズリと回転ナデ、内面



第 47 図　ＳＤ 16、ＳＫ１・２・49 実測図（1/40）

は回転ナデで仕上げる。２～４は土師器の坏である。２は外面を回転ナデで仕上げる。内面は調整不明である。３・４は摩耗のため調整は不明である。５は土師器の皿である。歪みが著しい。６は土師器の高坏である。７は土師器の甕である。内外面にハケ目がみられる。８・９は土錘である。**10 ～ 17** はＳＫ２から出土した。10・11 は土師器の坏である。外面は胴部から底部にかけて手持ちヘラケズリがみられ、口縁部はヨコナデで仕上げる。12・13 は土師器の甕である。13 は把手が胴部に付く。14・15 は須恵器の蓋である。16・17 は須恵器の高台付坏である。16 の高台はやや外反するが、17 の高台はコの字に近い。**18** はＳＰ９から出土した銅滓である。



第 48 図　遺物実測図（1/4、1/2：18）

４．総括

第Ⅸ章の総括を参照されたい。　（長谷川）

第４表　庄屋野遺跡第 13 次調査出土遺物観察表

遺物番号	遺構	材質	器種	法量			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	外面	内面	外面	内面			
1 第 48・53 図	ＳＫ１	土師器	蓋	(17.9)	－	(2.2)	灰黄褐～橙	明赤褐	回転ヘラケズリ	ナデ　回転ナデ	雲母を含む		202211 000006
2 第 48・53 図	ＳＫ１	土師器	坏	(12.0)	(6.8)	3.5	橙	浅黄橙	回転ナデ	不明	精良		202211 000002
3 第 48・53 図	ＳＫ１	土師器	坏	－	－	3.5	にぶい橙	にぶい橙	回転ヘラケズリ ナデ？　ヘラ切り	不明	精良		202211 000003
4 第 48・53 図	ＳＫ１	土師器	坏	－	－	3.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	不明	精良		202211 000001
5 第 48・53 図	ＳＫ１	土師器	皿	22.9	17.0	1.0	黄橙	浅黄橙	不明	不明	精良	歪み著しい	202211 000004
6 第 48・53 図	ＳＫ１	土師器	高坏	(14.6)	－	(2.3)	橙～暗灰	橙～にぶい橙	不明	不明	雲母を含む		202211 000005
7 第 48・53 図	ＳＫ１	土師器	甕	－	－	(12.8)	橙～にぶい橙	橙～褐灰	ヨコナデ　ハケ目	ヨコナデ　ハケ目 ナデ？	雲母を含む		202211 000007
8 第 48・53 図	ＳＫ１	土製品	土錘	6.8	2.0	2.1	浅黄橙	－	ナデ		雲母を含む		202211 000008
9 第 48・53 図	ＳＫ１	土製品	土錘	6.7	1.9	1.7	にぶい黄橙～褐灰	－	ナデ		雲母・角閃石を含む		202211 000009
10 第 48・53 図	ＳＫ２	土師器	坏	(10.3)	－	3.6	明赤褐	明赤褐	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ　ナデ	細粒砂・中礫・角閃石・雲母を含む		202211 000011
11 第 48・53 図	ＳＫ２	土師器	坏	(16.4)	－	(2.7)	橙～にぶい赤褐	橙～にぶい赤褐	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	細粒砂を含む 雲母を含む		202211 000010
12 第 48・53 図	ＳＫ２	土師器	甕	(11.4)	－	13.4	橙	明赤褐～にぶい橙	ハケ目	不明	細礫・雲母・角閃石を含む	胴部最大径 13.9	202211 000012
13 第 48・53 図	ＳＫ２	土師器	甕	(24.2)	－	(9.0)	橙	橙	ヨコナデ　ハケ目 ユビオサエ	ヨコナデ ケズリ	粗砂・細礫・中礫・雲母を含む		202211 000013
14 第 48・53 図	ＳＫ２	須恵器	蓋	(13.6)	－	(3.5)	暗灰～灰	灰	回転ナデ　ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	中砂・細礫を含む		202211 000017
15 第 48・53 図	ＳＫ２	須恵器	蓋	(14.0)	－	(1.6)	灰黄	灰白～浅黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ　ナデ	ほぼ精良		202211 000016
16 第 48・53 図	ＳＫ２	須恵器	坏	－	8.6	(3.5)	灰	灰	回転ナデ　ナデ ヘラ切り	回転ナデ　ナデ	中砂・極粗砂・細礫・中礫・雲母を含む		202211 000015
17 第 48・53 図	ＳＫ２	須恵器	坏	(12.2)	(8.6)	3.5	にぶい黄橙	灰白	ナデ？	ナデ？	ほぼ精良		202211 000014
18 第 48・53 図	ＳＰ９	銅滓	銅滓	1.9	2.5	1.0	明緑灰～緑灰						202211 000019

第 49 図　調査区全景（北から）

第 50 図　ＳＤ 16 完掘状況（北東から）

第 51 図　ＳＫ１完掘状況（南東から）

第 52 図　ＳＫ２完掘状況（北東から）

第 53 図　出土遺物写真

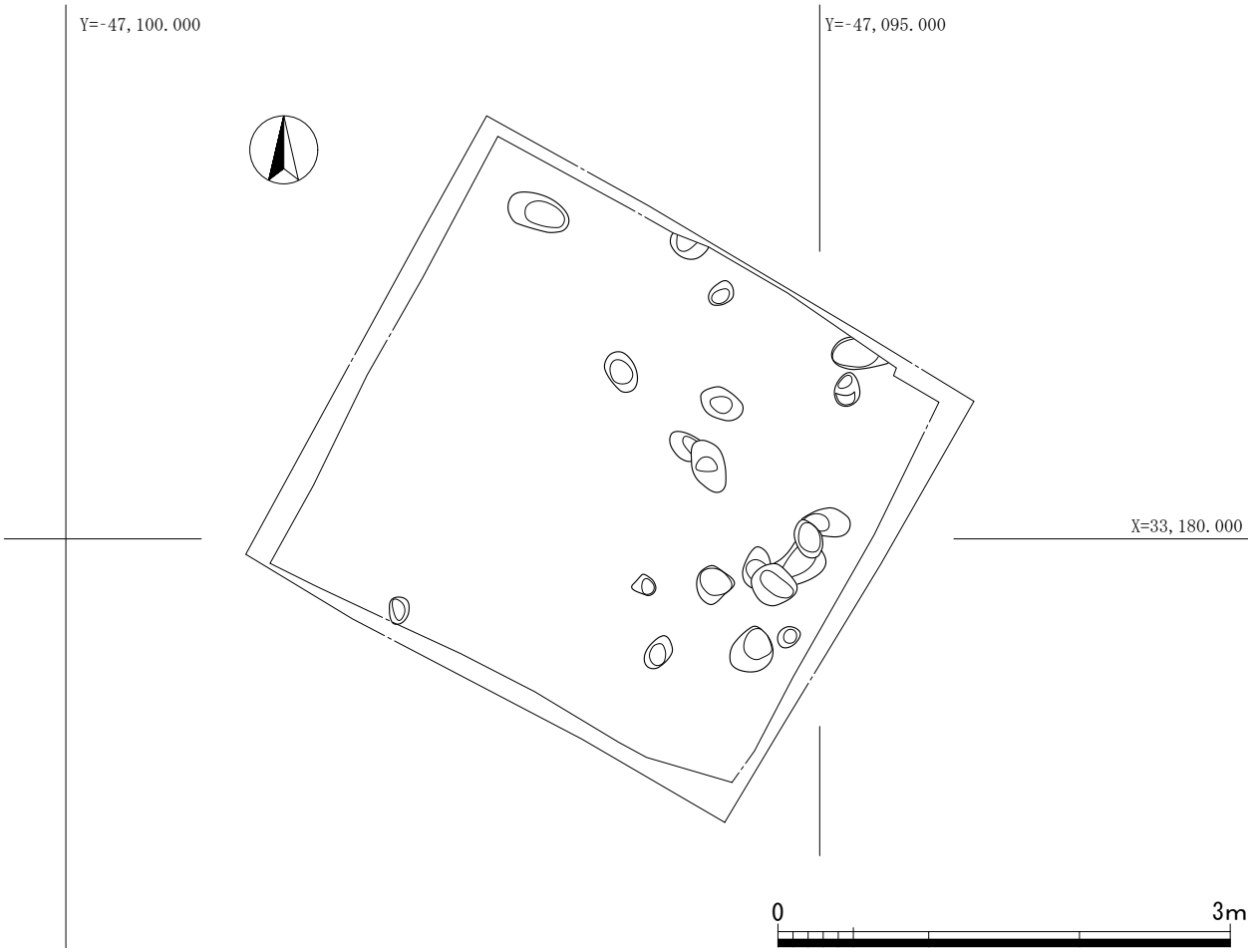
Ⅶ. 庄屋野遺跡第 14 次調査

１．調査に至る経過

令和４年 10 月 14 日、土地所有者から専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財である庄屋野遺跡に含まれる。建物の基礎構造上、遺跡の保護が不可能であった一部分について、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。令和４年 11 月１日に土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年 11 月９日から 11 月 28 日まで発掘調査を実施した。対象面積 204 ㎡のうち調査面積は９㎡である。

２．位置と環境

本調査地は第 13 次調査地の西 40 ｍに位置する。周辺環境の詳細は、第Ⅲ章を参照されたい。



第 54 図　遺構配置図（1/50）

３．調査の記録

（１）調査の経過

今回の調査では、８次調査で確認された遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。

令和４年 11 月８日、機材を搬入し、調査を開始した。翌日、重機による表土剥ぎを行った。同月 10 日、人力による遺構の検出、掘り下げ、個別遺構図の作成・遺構写真の撮影を行い、全景写真を撮影した。同月 25 日に埋め戻しを行い、同年 11 月 28 日に機材を撤収し、現地での調査を終了した。

遺構は、トータルステーションを使用して測量し、データの編集と保存は、株式会社ＣＵＢＩＣ製ソフト「遺構くん cubic」を用いて行った。

（２）検出遺構

今回の調査では、ピット多数を検出したが、柵列や掘立柱建物になるようなものは確認できなかった。

（３）出土遺物

今回の調査ではピットから土師器の坏や甕の細片が出土しているが､図化できるものはなかった。

４．総括

第Ⅸ章の総括を参照されたい。（長谷川）

第 55 図　調査区全景（北から）

Ⅷ．庄屋野遺跡第 15 次調査

１．調査に至る経過

本調査は、専用住宅建設に伴う発掘調査である。令和４年 10 月 14 日、土地所有者より久留米市安武町安武本 2932 - 36 における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である庄屋野遺跡内にあたり、令和３年度に宅地造成に先立ち実施した第８次調査地内に位置する。先の調査成果から古代の遺構が展開することは確実であったが、造成後の遺構面までの深度を確認するため、10 月 18 日に確認調査を行った。結果、充分な保護層が確保され、検出した遺構の保護も可能であったが、建物の耐震性を考慮して杭を打設することとなり、遺構の破壊を免れないことから発掘調査が必要である旨を回答した。その後の協議により、国庫補助事業として対応することとし、令和５年４月 10 日に土地所有者から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、現地調査を実施する運びとなった。調査期間は令和５年４月 18 日から５月２日である。

２．位置と環境

本調査地は第 14 次調査地の南西 30 ｍに位置する。周辺環境の詳細は、第Ⅲ章を参照されたい。

３．調査の記録

（１）調査の経過

本調査は、隣接地で検出した遺構群の分布状況を確認することを目的として実施した。現地調査は廃土置き場の都合上、南北２区に分けて行うこととし、令和５年４月 18 日に南区の表土剥ぎから着手した。19 日には作業員を投入し、遺構検出に取りかかり、遺構掘削や実測作業、写真撮影は随時行った。24 日に南区の全景写真撮影を行ったあと、26 日に反転作業を行い、27 日から北区の遺構検出・掘削を実施した。５月１日に掘削・実測作業等を終え、２日に全景写真を撮影するとともに埋め戻し・機材撤収を行い、全ての現地作業を終了した。遺構実測図（1/10）は水糸メッシュ法で作製し、遺構配置図はトータルステーションを用い、その記録は株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん cubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、Canon EOS 6D で撮影した。

第 56 図　表土剥ぎ風景（北から）

第 57 図　南区全景（南東から）

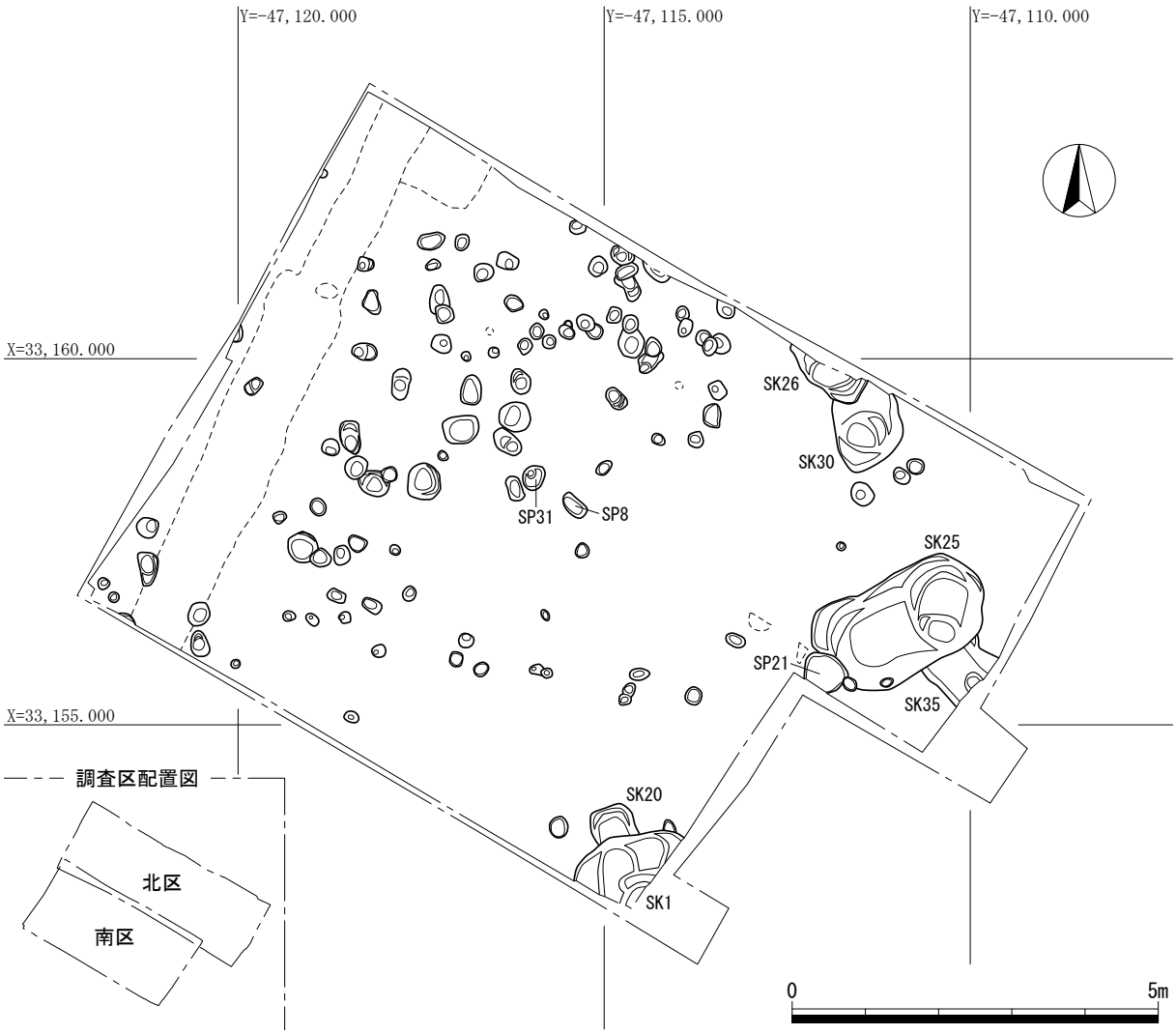
第 58 図　北区全景（南東から）

（２）基本層序

調査地点は通称「庄屋野台地」の北西端に位置し、標高 10.3 ｍ程度を測る。周辺地形は東から西へ比高を減じ、200 ｍ西方で筑後川の氾濫によって形成された低地に至る。基本層序は、上位より造成土（30 ㎝）、旧耕作土（10 ㎝）、床土（10 ～ 15 ㎝）が認められ、床土下位の遺物包含層（25 ～ 30 ㎝）を経て遺構検出面である地山に至る。現地表から遺構検出面までの深さは 80 ㎝であり、標高は 9.5 ｍを測る。

（３）検出遺構

調査区は廃土置き場が制限されていたため南北２区に分けて調査を行い、遺構番号は通し番号を付している。検出した遺構は、土坑６基およびピットである。土坑は調査区南東側に、ピットは中央から北西側にかけて検出され、一部撹乱を受けるものの残存状況は良好である。近隣の調査では掘立柱建物も検出されているが、本調査では建物を成す柱穴は確認できなかった。以下、土坑について詳述する。



第 59 図　遺構配置図（1/100）

土坑

ＳＫ１（第 60・64 図）

調査区南東隅で検出した。ＳＫ 20 に後出する。一部調査区外に及ぶため全容は不明であるが、東西長 1.62 m以上、南北長 0.97 m以上を測り、深さは最深部で 0.64 mである。底面はフラットで、壁面は垂直気味に立ち上がり、遺構内の上半には複数のステップが認められた。埋土は暗褐色を呈し、黄白色のブロック土を多く含む。埋土内からは土師器の坏・高台・甕、須恵器の蓋・高坏、甕のほか、鉄製釘および被熱石が出土した。

ＳＫ 20（第 60・64 図）

調査区南東隅で検出した。ＳＫ１に先行する。平面形は隅丸方形で、一辺 0.6 m程度、深さは 0.28 mを測る。底面は平坦であり、壁面は外傾して立ち上がり上端に至る。遺構内の北側には幅５cm 前後の狭小なステップを有する。埋土は暗褐色土で、黄橙色・黄白色ブッロク土を多く含む。埋土内からは土師器の坏・甕および須恵器蓋の転用硯が出土している。

ＳＫ 25（第 61 ～ 64 図）

調査区北東で検出した大形の土坑である。ＳＫ 35 に後出する。平面形は小判形を呈し、規模は長軸長 2.30 m、短軸長 1.35 mで、深さは最大 0.46 mを測る。遺構内は北半が深く掘り込まれ、その南側に底面を有する。底面は狭小で、断面形は凹レンズ状を呈する。一方、遺構南半の底面は

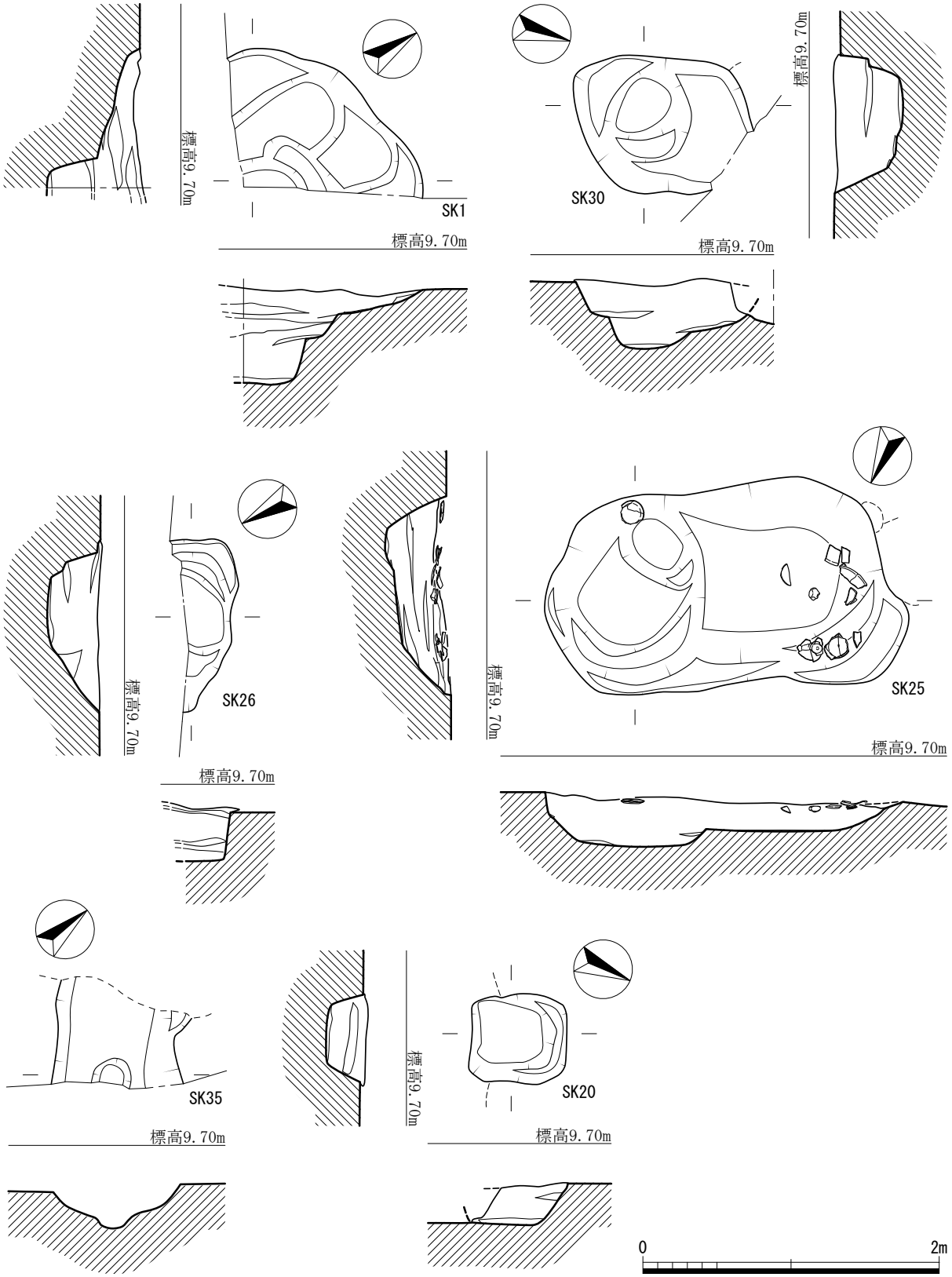
第 60 図　ＳＫ１・20 完掘状況（北東から）

第 61 図　ＳＫ 25 遺物出土状況①（北西から）

第 62 図　ＳＫ 25 遺物出土状況②（西から）

第 63 図　ＳＫ 25 完掘状況（北西から）

幅広で、ほぼ水平であった。各底面北側には複数のステップが設けられる。埋土は暗褐色土で、黄白色ブロック土を多く含み、炭化物および焼土も認められた。また、遺構の上層からは比較的多く



第 64 図　ＳＫ１・20・25・26・30・35 実測図（1/40）

の遺物が出土し、遺構の埋没過程で廃棄されたと推察される。埋土内からは土師器の蓋・坏・高台付坏・高坏・甕・鉢・把手、須恵器の蓋・盤・高台片・甕・壺に加え、鉄滓および被熱石が出土した。

ＳＫ 26（第 64・65 図）

ＳＫ 25 の北側 2.5 ｍで検出した。ＳＫ 26 に後出する。遺構の北半は調査区外に及ぶ。平面形は不明であるが、規模は長軸長 1.15 ｍ以上、短軸長 0.4 ｍ以上、深さ 0.37 ｍである。底面の断面形は凹レンズ状で、東西にはステップを有する。東壁面は外傾して、西壁面は緩やかに立ち上がり、南壁面はほぼ垂直であった。埋土はにぶい褐色を呈し、黄橙色のブロック土を少量含む。埋土内からは土師器の甕を含む小片 6 点、須恵器の甕を含む小片 3 点が出土したのみである。

第 65 図　ＳＫ 26 完掘状況（南西から）

ＳＫ 30（第 64・66 図）

ＳＫ 26 の南東で検出した。ＳＫ 25 に先行し、遺構の北端は調査区外に至る。平面形は倒卵形で、長軸長 1.19 ｍ以上、短軸長 0.9 ｍを測り、深さは 0.46 ｍである。遺構内中央の南寄りに底面を有し、西を除く三方にステップが認められる。東西の断面形は逆台形で、南北は段掘りの様相を呈する。埋土はにぶい褐色土で黄白色ブロック土を少し含む。埋土内からは、土師器の坏・高台付坏・甕、須恵器の蓋・坏・甕が出土した。

第 66 図　ＳＫ 30 完掘状況（西から）

ＳＫ 35（第 64・67 図）

調査区の東端ＳＫ 25 の東側で検出し、東側が調査区外に及んでいる。ＳＫ 25 に先行する。平面形は定かではないが、規模は長軸長 0.91 ｍ以上、短軸長 0.72 ｍで、深さ 0.15 ｍ前後と浅い。底面断面形は凹レンズ状で壁面は内湾気味に緩やかに立ち上がり上端に至る。底面の南東隅にピット状の掘り込みを確認し、埋土に差異は認められなかったため本遺構に伴うものと考えられる。埋土は暗褐色を呈し、黄白色ブロックを含む。埋土内からは土師器の坏・高台付坏・高坏・甕、須恵器の高台付坏・甕および被熱石が出土している。

第 67 図　ＳＫ 35 完掘状況（南西から）

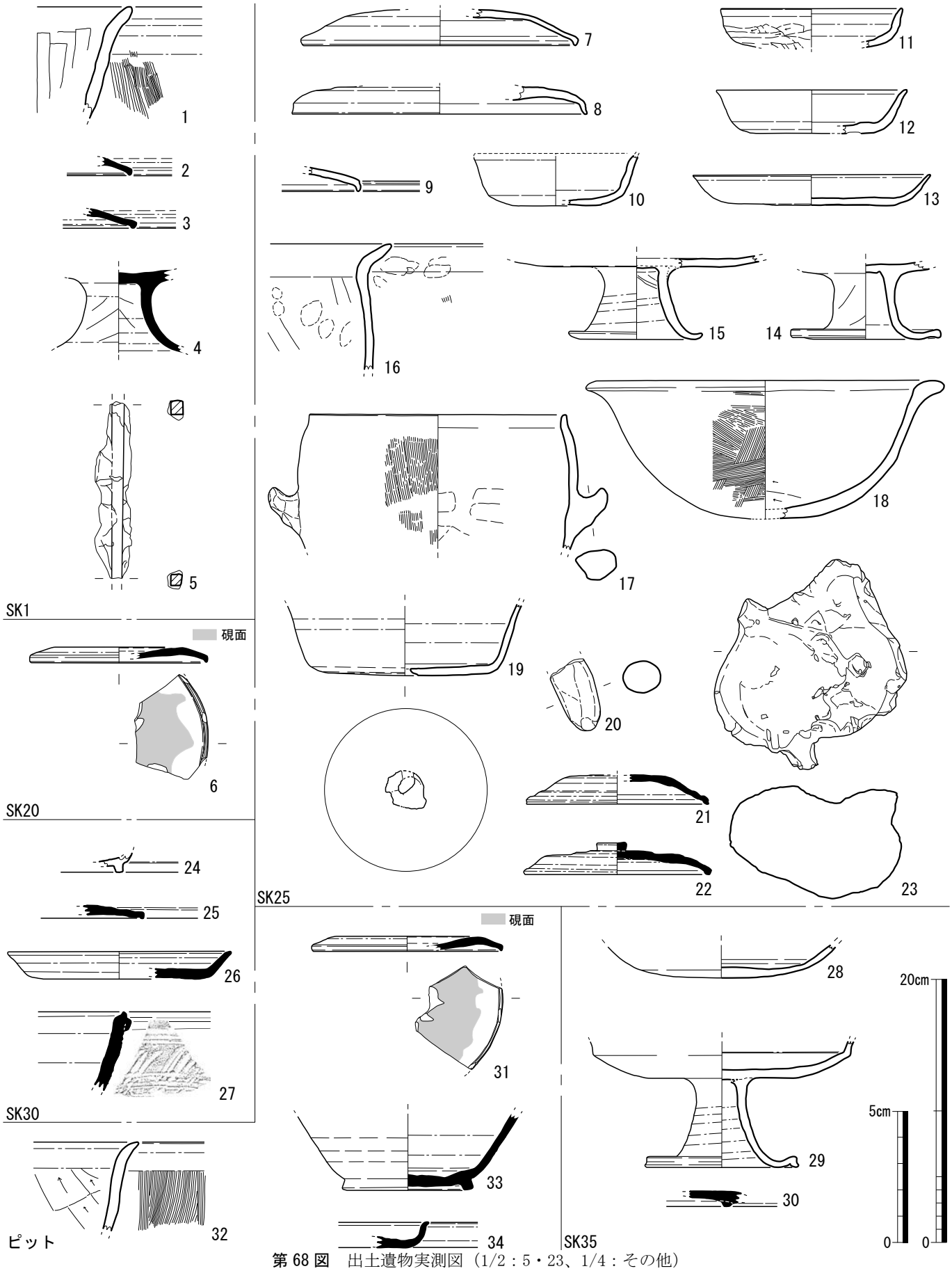
（廣木）

（４）出土遺物（第 68 ～ 71 図、第５表）

出土遺物はパンコンテナー１箱分で、ＳＫ 25 から出土したものが大半を占める。土師器を主体とし、須恵器が大袋２袋程度で、鉄製釘・鉄滓が各１点、このほか被熱した礫が出土している。以下、主な遺物について説明を加える。あわせて第５表の出土遺物観察表も参照頂きたい。

１～５はＳＫ１出土遺物。２・３は須恵器の蓋で、口縁が嘴状を呈する。３は口縁部内面に明確な稜を有する。**６**はＳＫ 20 出土遺物。須恵器の蓋である。内面が非常に平滑なため、硯に転用されていると推察される。内面を赤外線カメラで観察したところ、墨痕は確認できなかった。**７～23** はＳＫ 25 出土遺物。７～９は土師器の蓋である。７・９は口縁部が嘴状を呈し、８はわずかに外反する。７・８の天井部外面に回転ヘラケズリを施す。10 ～ 12 は土師器の坏である。10 は底部の外面に、11 は底部から体部の外面に手持ちヘラケズリを施し、10・12 は平底を呈する。13 は土師器の盤である。平底を呈し、体部から口縁まで外傾する。14・15 は土師器の高坏である。14 の脚端部は嘴状を呈し、15 は端部を摘まみ上げた形状をしている。また、15 は坏部と脚部の接点がないため図上で復元した。残存する坏部の外底部中央と脚部上面に接合痕が残ることから、坏部と脚部を個別に成形した後に接合している。16・17 は土師器の甕である。16 は口縁が大きく外傾する。17 は把手を有する。胴部から口縁にかけて内湾し、口縁は直行する。外面にハケメを施し、内面に指オサエが確認できる。18・19 は土師器の鉢である。18 は口縁が大きく外反し、底部は丸底を呈する。器壁に厚みがあり、特に口縁部が肥厚する。19 は平底で、底部に外側から打ち欠いた穿孔が確認できる。20 は土師器の脚である。被熱により一部赤色化し、端部が黒く変色している。21・22 は須恵器の蓋である。いずれも嘴状の口縁を有し、22 は端部に丸みを帯びる。また、22 は天井部に回転ケズリを施し、ボタン状のツマミを有する。23 は鉄滓である。重さが 234.1g を測り、比重が大きいことと金属探知機が強く反応したことから、鉄分が多く含まれると考えられる。**24 ～ 27** はＳＫ 30 出土遺物。25 は須恵器の蓋である。口縁部は嘴状の口縁が退化したもので、口縁端部内面に稜を残す。26 は須恵器の盤で、体部から口縁まで外傾する。27 は須恵器の甕である。口縁部に断面コ字状の粘土帯を１条付し、その直下に２条の沈線文を施す。その下位に斜線文を施し、その後に４条の沈線文を施している。**28 ～ 30** はＳＫ 35 出土遺物。29 は土師器の高坏である。脚端部は嘴状を呈する。脚部を円筒状に成形した後に坏部を接合している。30 は須恵器の高台付坏である。焼成がやや悪く、白に近い色を呈する。**31** はＳＰ８出土遺物。須恵器の蓋を硯に転用している。内面が平滑であり、硯面と考えられる。**32・33** はＳＰ 21 の出土遺物。33 は須恵器の高台付の壺である。体部は外傾し、高台は低く、外側に張り出す。**34** はＳＰ 31 で出土した須恵器の盤である。体部はやや内湾し、口縁部は短く外反する。内面にオリーブ褐色の自然釉が掛かる。

（河野）



第 68 図　出土遺物実測図（1/2：5・23、1/4：その他）

第５表　庄屋野遺跡第 15 次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量（cm）			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 長	底径 幅	器高 厚	外面	内面	外面	内面			
1 第 68 図	SK1	土師器	甕	-	-	(8.5)	橙	橙	ヨコナデ、刷毛目後ヨコナデ、刷毛目	ヨコナデ 工具ナデ	砂粒		202302 000005
2 第 68 図	SK1	須恵器	蓋	-	-	(1.4)	褐灰	褐灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良		202302 000003
3 第 68 図	SK1	須恵器	蓋	-	-	(1.45)	灰白	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	精良		202302 000002
4 第 68・69 図	SK1	須恵器	高坏	-	-	(6.3)	にぶい黄橙 灰白	灰白	回転ナデ	ナデか 回転ナデ	砂粒	脚部内外面シボリ痕	202302 000004
5 第 68・69 図	SK1	鉄製品	釘	(6.7)	0.6	-	-	-	-	-	-	13.9 g	202302 000001
6 第 68・69 図	SK20	須恵器	蓋	13.6	-	(1.2)	灰黄褐	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒	転用硯	202302 000007
7 第 68・69 図	SK25	土師器	蓋	21	-	(2.7)	橙 黄橙	浅黄橙 にぶい橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子	外面門歯痕か	202302 000010
8 第 68・69 図	SK25	土師器	蓋	22.4	-	(2.1)	橙	浅黄橙	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	細砂粒（石英、雲母）	内面門歯痕	202302 000021
9 第 68 図	SK25	土師器	蓋	-	-	(1.8)	浅黄橙 にぶい橙	浅黄橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ	精良		202302 000011
10 第 68 図	SK25	土師器	坏	-	-	(3.8)	浅黄橙	橙	回転ナデ 手持ちヘラケズリ	回転ナデ	砂粒 （石英、長石、雲母）		202302 000028
11 第 68・69 図	SK25	土師器	坏	13.6	-	(2.9)	橙	橙	回転ナデ 手持ちヘラケズリ	回転ナデ	細砂粒（雲母）		202302 000019
12 第 68 図	SK25	土師器	坏	14.4	-	(3.3)	にぶい橙	浅黄橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	微砂粒（石英、雲母） 赤色粒子	内面門歯痕か	202302 000020
13 第 68・69 図	SK25	土師器	盤	18.0	11.3	2.3	淡黄	灰白	回転ナデ ヘラ切り後ナデか	回転ナデ	礫 砂粒		202302 000025
14 第 68・70 図	SK25	土師器	高坏	-	11.4	(5.8)	橙	橙 浅黄橙	摩耗	ナデか	精良 赤色粒子	脚部外面シボリ痕	202302 000012
15 第 68・70 図	SK25	土師器	高坏	-	〔10.0〕	(6.1)	浅黄橙 橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	回転ヘラケズリ 接合ナデ 回転ナデ	回転ナデ 接合ナデ	精良 赤色粒子	図上復元 脚部内面シボリ痕	202302 000023 000024
16 第 68・70 図	SK25	土師器	甕	-	-	(9.5)	橙	橙	ナデ、指オサエ 刷毛目か	ナデ、指オサエ ヘラケズリ	砂粒（石英、長石、雲母）		202302 000013
17 第 68・70 図	SK25	土師器	甕	19.6	-	(10.2)	橙 にぶい橙	橙	ヨコナデ、刷毛目 ナデ	ヨコナデ、指オサエ ナデ、ヘラケズリ	微砂粒（雲母）、細砂粒（角閃石）、赤色粒子	胴部最大径：〔23.8〕	202302 000015
18 第 68・70 図	SK25	土師器	鉢	27.2	-	10.5	橙	橙 浅黄橙	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリか	細礫、微砂粒（雲母、角閃石）、赤色粒子		202302 000027
19 第 68・70 図	SK25	土師器	鉢	-	12.4	(5.4)	にぶい橙 褐灰	明褐灰 橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	礫 砂粒	底部穿孔 底部外面黒斑	202302 000022
20 第 68・70 図	SK25	土師器	脚	-	-	(5.5)	橙 明赤褐	-	ナデ	-	細砂粒（雲母） 赤色粒子	被熱	202302 000014
21 第 68・70 図	SK25	須恵器	蓋	13.8	-	(2.2)	灰白	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	細砂粒		202302 000017
22 第 68・71 図	SK25	須恵器	蓋	14.0	-	2.4	灰白	黄灰 灰白	回転ナデ、回転ヘラケズリ、接合ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	礫 砂粒	ツマミ径：2.3	202302 000016
23 第 68・70 図	SK25	鉄製品	鉄滓	8.0	6.5	3.7	-	-	-	-	-	234.1 g	202302 000026
24 第 68 図	SK30	土師器	高台付坏	-	-	(0.9)	橙	橙	回転ナデか 接合ナデ	ナデか	細砂粒（石英、雲母） 赤色粒子		202302 000029
25 第 68 図	SK30	須恵器	蓋	-	-	(0.9)	灰	灰黄	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	砂粒（石英、長石、雲母）		202302 000031
26 第 68 図	SK30	須恵器	盤	17.0	〔14.6〕	(2.1)	灰	灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	細砂粒（雲母） 赤色粒子		202302 000030
27 第 68・71 図	SK30	須恵器	甕	-	-	(5.9)	暗灰	灰白	回転ナデ 沈線、斜線文	回転ナデ	細砂粒 砂粒		202302 000032
28 第 68 図	SK35	土師器	坏	-	12.1	(2.5)	橙	浅黄橙 橙	ナデか 手持ちヘラケズリか	摩耗	砂粒		202302 000034
29 第 68・71 図	SK35	土師器	高坏	-	〔11.2〕	(9.6)	橙	浅黄橙 橙	回転ナデ、回転ヘラケズリ、接合ナデ	回転ナデ 接合ナデ	微砂粒（雲母） 赤色粒子		202302 000035
30 第 68 図	SK35	須恵器	高台付坏	-	-	(1.1)	灰白	灰白	接合ナデ ナデか	摩耗	細砂粒（石英）		202302 000036
31 第 68・71 図	ＳＰ８	須恵器	蓋	14.6	-	(1.15)	灰白 褐灰	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	細砂粒	転用硯	202302 000006
32 第 68 図	SP21	土師器	甕	-	-	(7.1)	褐灰 にぶい橙	橙	回転ナデ 刷毛目	ヘラケズリ 回転ナデ	細砂粒（雲母）	外面黒斑	202302 000008
33 第 68・71 図	SP21	須恵器	壺	-	高台径 10.0	(5.85)	灰 暗灰	灰	回転ナデ、回転ヘラケズリ、接合ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	微砂粒	畳付板状圧痕	202302 000009
34 第 68 図	SP31	須恵器	盤	-	-	(1.9)	浅黄	灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	細砂粒	内面自然釉	202302 000033

第 69 図　出土遺物写真①

第 70 図　出土遺物写真②

第 71 図　出土遺物写真③

4．総括

第Ⅸ章の総括を参照されたい。

Ⅸ．庄屋野遺跡（第 16 次調査）

１．調査に至る経緯

本調査は、令和５年６月 27 日、土地所有者より久留米市安武町安武本字庄屋野五 2932 番 11 における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出されたことに端を発する。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である庄屋野遺跡の範囲内に含まれており、令和４年 10 月 18 日に実施した試掘調査の結果、地表下 40 ㎝で複数のピットが確認されていた。開発予定建物の基礎構造上、遺跡の現状保存が不可能であったことから、令和５年７月４日、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年８月 23 日から９月８日にまで発掘調査を実施した。対象面積 200 ㎡のうち、調査面積は 84 ㎡である。

２．位置と環境

本調査地は、第 11 次調査地の北西に隣接する。周辺環境の詳細は、第Ⅲ章を参照されたい。

３．調査の記録

（１）調査の経過

今回の調査は、古代の遺構の広がりを確認するために行った。廃土置き場の確保が困難であったため、調査区を東西に分け反転して調査を実施した。令和５年８月 23 日に西区を重機による表土剥ぎを開始し、翌 24 日から遺構検出、遺構の掘削・測量を行った。同月 30 日に西区の全体写真を撮影し、翌 31 日に反転作業を行った。９月１日より東区の遺構検出、遺構の掘削･測量を開始した。同月６日に掘削が完了し、全体写真を撮影した。７日に重機による埋戻しを行い、翌８日に機材撤収を行い調査を終了した。遺構はトータルステーションで測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層図は水糸メッシュ法（1/10）で記録した。遺構写真はデジタルカメラ PENTAX　K-1 を用いた。

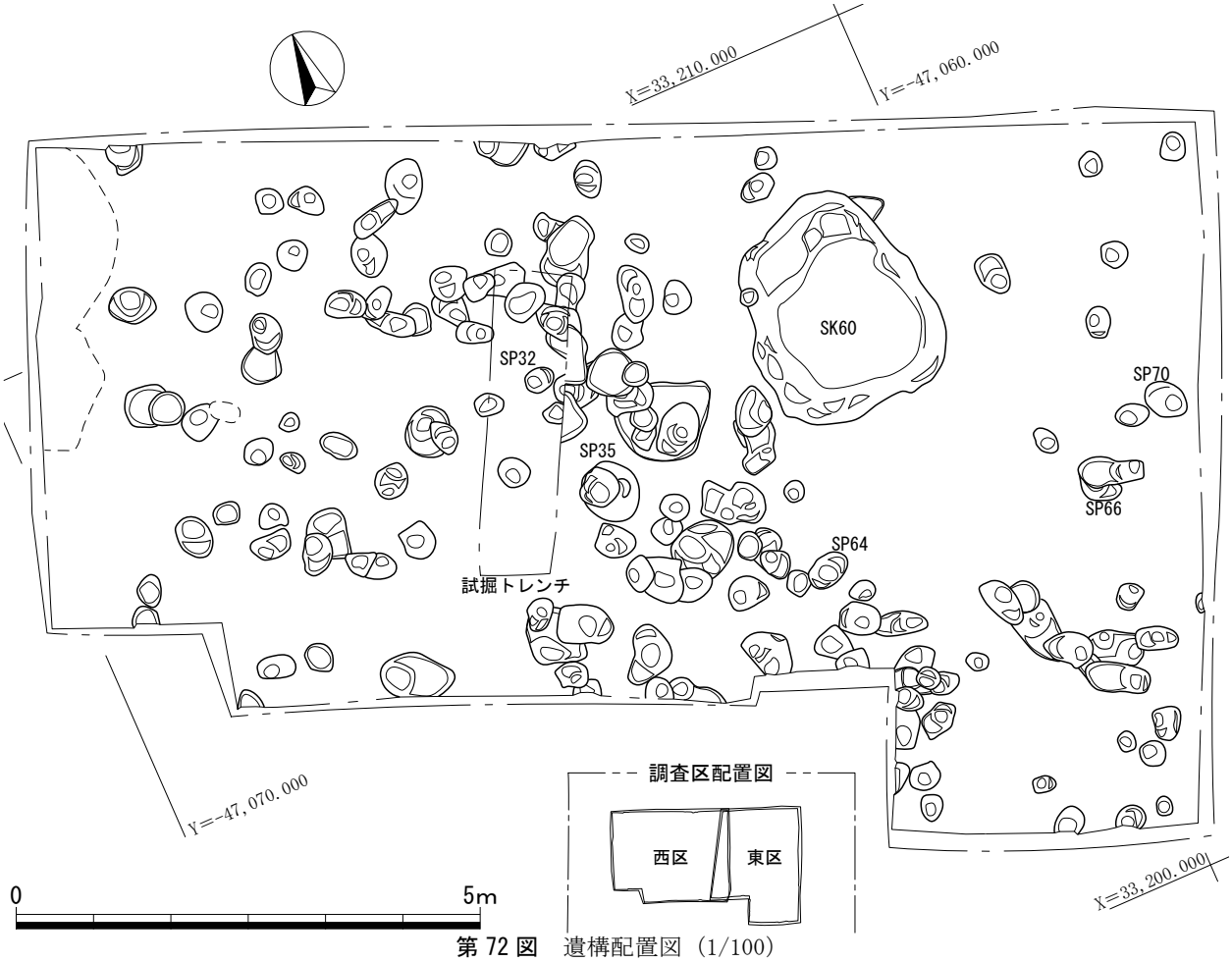
（２）検出遺構

調査地は水田として利用されており､床土の直下で遺構検出面が確認された。包含層はない。ピットが多数検出されたが､建物等を構成する遺構は確認できなかった。主要な遺構は土坑１基である。

土坑

ＳＫ 60（第 73・78・79 図）

調査区中央で検出した平面形が隅丸方形に近い形状の土坑である。土坑の周辺における遺構の分



第 72 図　遺構配置図（1/100）

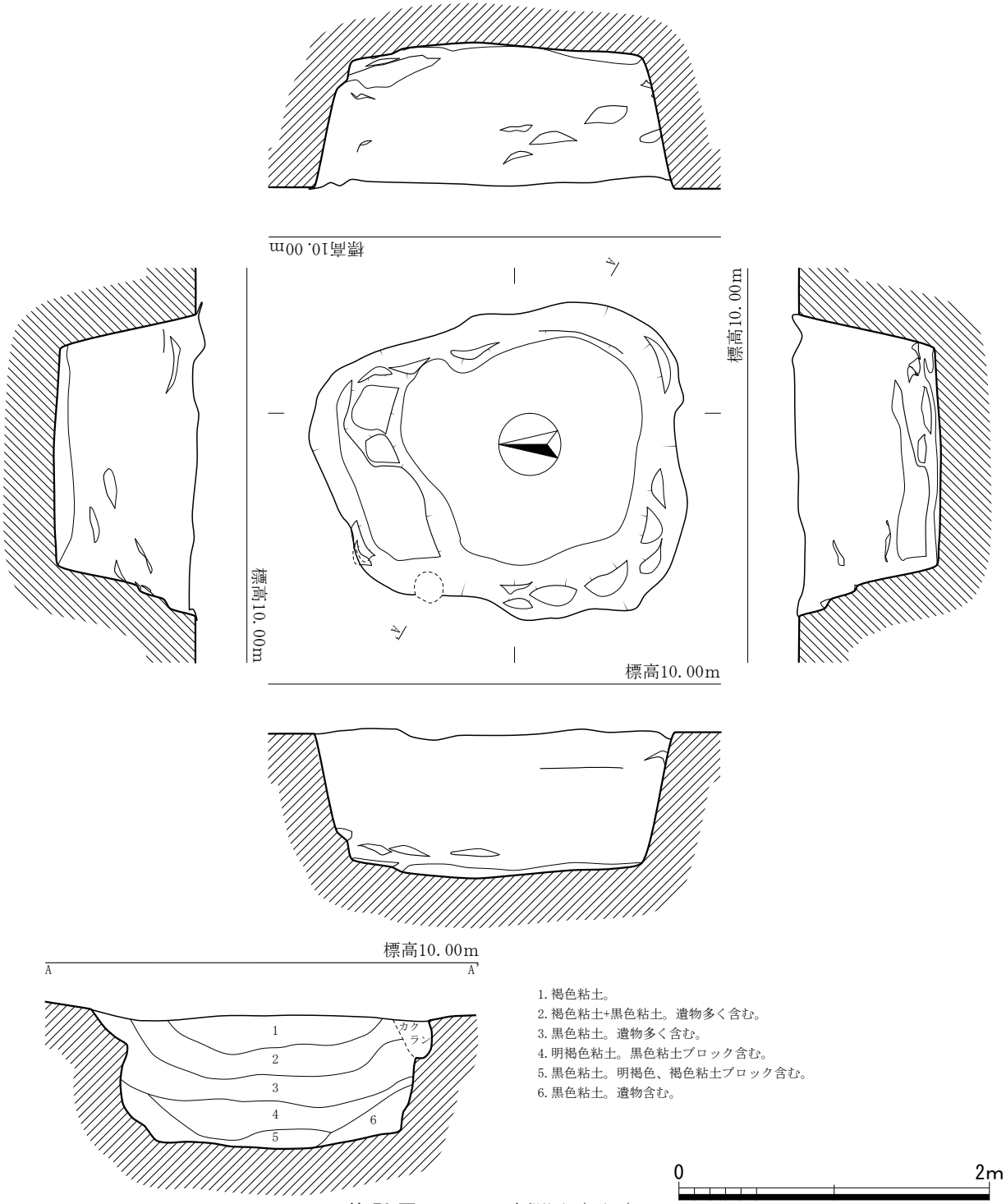
布は、西側にピットが密集するが、東側にはピットがあまり分布しない。遺構の規模は長軸長 2.44 m、短軸長 2.04 m、深さ 96 ㎝を測る。底面は北部で低い段を有し、壁面にも複数の段を有す。壁面の段は、西部に集中しており、ピット等の他遺構が重複している可能性もあるが、検出時、掘削時には確認できなかった。北側の壁面にある段の一部は、狸掘り状に壁面を掘りこまれている。壁面は基本的に平坦に掘削されている。

土師器や須恵器、土製品、石製品が出土し、遺物の特徴から８世紀前半に属すると考えられる。

（３）出土遺物（第 74・75・80 ～ 84 図・第６表）

今回の調査では、パンコンテナー２箱分の遺物が出土した。ＳＫ 60 から出土した遺物がほとんどであるが、ピットからも遺物細片が出土している。土師器、須恵器、土製品、石製品が出土した。図化可能な資料のみ掲載している。以下主要な遺物について述べる。

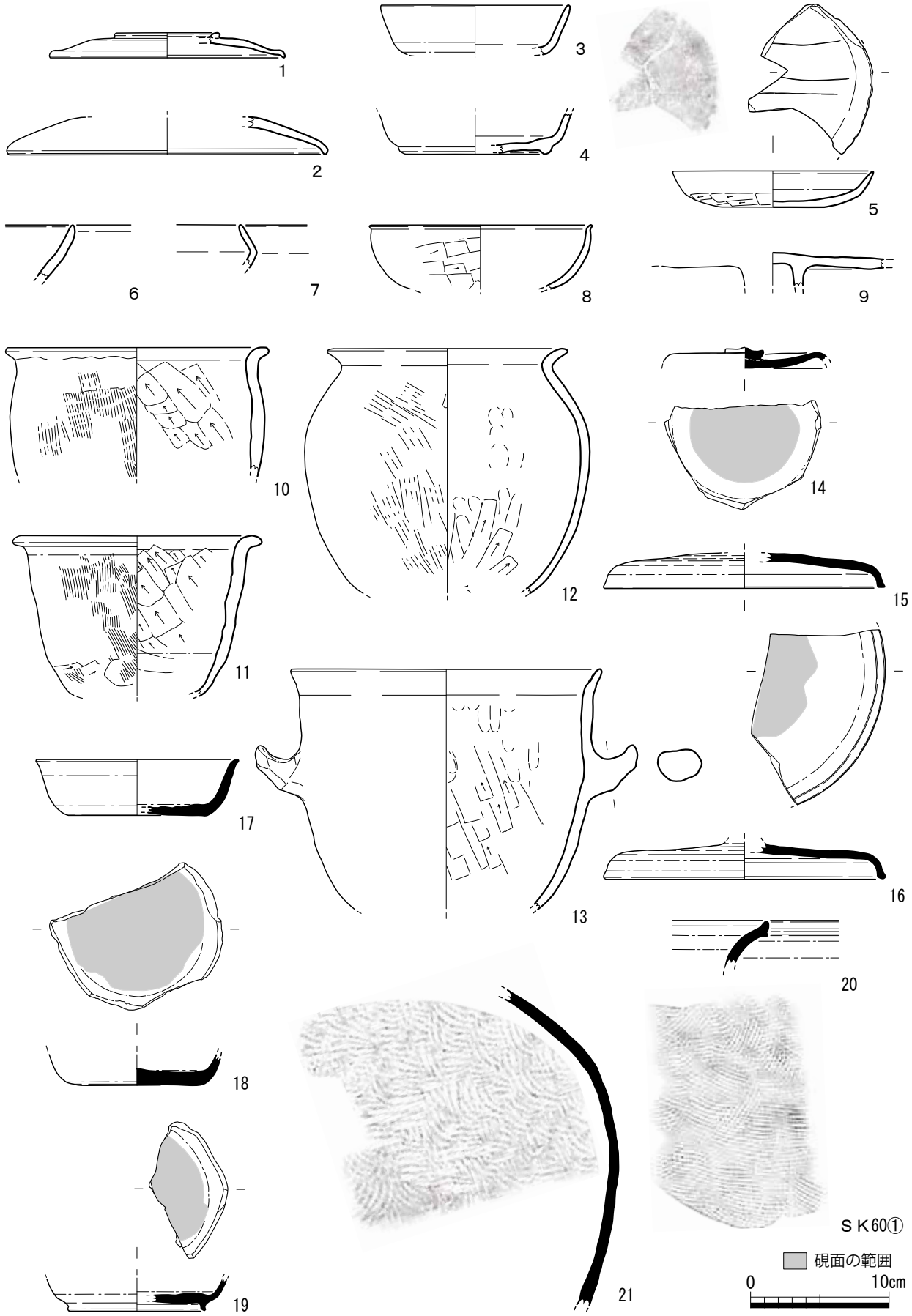
１～ 24 はＳＫ 60 出土遺物である。１～ 13 は土師器である。５は皿で、内面底部に３条の平行した直線が線刻される。14 ～ 21 は須恵器である。14 ～ 16 は蓋、17 ～ 19 は坏で、14・15・18・19 は内面の一部に平滑面があり、転用硯と考えられるが、墨痕は確認できなかった。22 ～ 24 は石製品である。22 は片岩製で表面と裏面に平滑な面があり、両面とも一部が敲打により窪む。また、側面と端部は敲打を加え成形している。同様な資料は筑後国府跡第 199 次調査のＳＩ 1982 から出



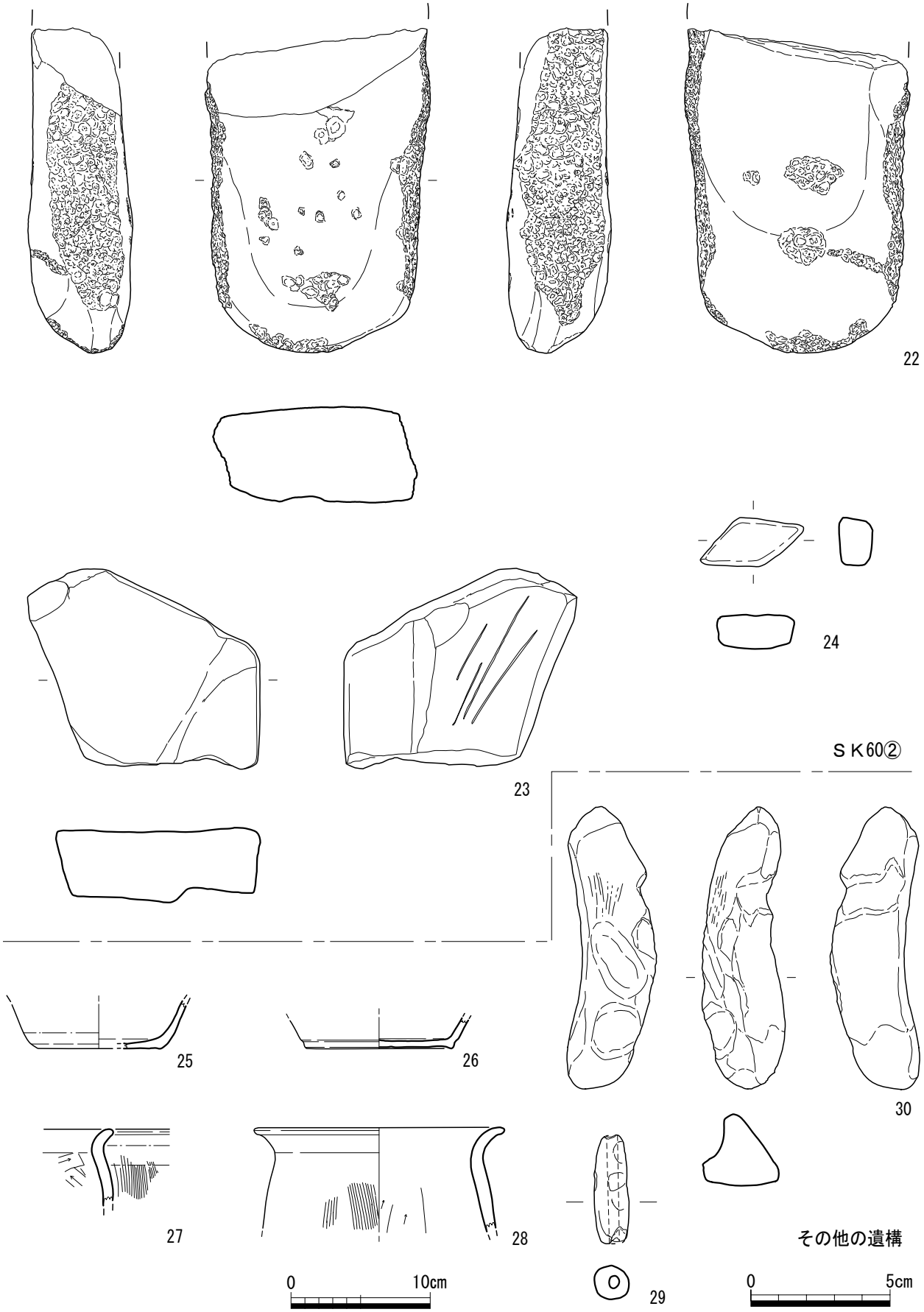
第 73 図　ＳＫ 60 実測図（1/40）

土している。筑後国府跡の資料は、表面・裏面共に使用により窪んでおり、砥石と判断され、硯として使用された可能性も指摘されている。22 も同様な利用がなされた可能性がある。24 は平面形が菱形の四角柱状を呈する用途不明の石製品である。砂岩製で６面とも平坦に加工される。**30** はＳＰ 70 出土の用途不明石製品である。安山岩製で側面に窪み、平滑面が確認される。

（小川原）



第 74 図　出土遺物実測図①（1/4）



第 75 図　出土遺物実測図②（1/2：22 ～ 24・30、1/4：25 ～ 29）

第６表　庄屋野遺跡第 16 次調査出土遺物観察表

遺物番号	出土遺構	材質	器種	法量（cm）			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	外面	内面	外面	内面			
1 第 74・80 図	SK60	土師器	蓋	(17.0)	(7.6)	1.8	橙	橙	回転ナデ	不明	雲母、砂粒含む	摩耗著しい	202310 000009
2 第 74・80 図	SK60	土師器	蓋	(23.2)	－	2.7	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		202310 000007
3 第 74・80 図	SK60	土師器	坏	(13.7)	－	(3.6)	灰白	灰白 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		202310 000020
4 第 74・80 図	SK60	土師器	坏	－	(10.8)	(2.9)	灰白 浅黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	精良		202310 000006
5 第 74・81 図	SK60	土師器	皿	(14.4)	(7.4)	2.6	にぶい橙 褐灰	にぶい橙	回転ナデ 手持ちヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	雲母、角閃石 砂粒、細砂粒含む	線刻あり	202310 000022
6 第 74・81 図	SK60	土師器	鉢		－	(3.9)	橙	橙	摩耗著しく不明	不明		摩耗著しい	202310 000008
7 第 74・81 図	SK60	土師器	鉢	－	－	(3.1)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		202310 000017
8 第 74・81 図	SK60	土師器	鉢	(16.2)	－	(4.6)	橙	にぶい橙	回転ナデ 手持ちヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	角閃石、細砂粒含む		202310 000018
9 第 74・81 図	SK60	土師器	高坏	－	－	(2.4)	にぶい橙 暗赤褐	にぶい橙 明赤褐	回転ヘラケズリ 回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	ほぼ精良	しぼり痕有	202310 000021
10 第 74・81 図	SK60	土師器	甕	(18.7)	－	(9.3)	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ、ハケメ	ナデ、ヘラケズリ	長石、角閃石 白色粒子含む		202310 000025
11 第 74・81 図	SK60	土師器	甕	(16.7)	－	(11.6)	明赤褐	明赤褐 にぶい赤褐	ヘラケズリ、ナデ ハケメ	ナデ、オサエ ヘラケズリ	白色粒子、雲母 細砂粒含む		202310 000029
12 第 74・82 図	SK60	土師器	甕	(16.4)	－	(17.7)	橙	橙	回転ナデ、ナデ ハケメ	回転ナデ、オサエ ナデ、ヘラケズリ	砂粒、細砂粒含む		202310 000019
13 第 74・82 図	SK60	土師器	甑	(22.2)	－	(17.3)	にぶい橙	橙	ナデ、オサエ	ナデ、オサエ ヘラケズリ	角閃石、雲母、赤色粒子 砂粒、細砂粒含む	摩耗著しい 表面剥離	202310 000023
14 第 74・82 図	SK60	須恵器	蓋	－	－	(1.5)	灰	灰	回転ナデ、ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	白色粒子含む	平滑面有	202310 000028
15 第 74・82 図	SK60	須恵器	蓋	(20.4)	－	(2.3)	褐灰	褐灰	回転ナデ	回転ナデ	砂粒わずかに含む	平滑面有	202310 000010
16 第 74・82 図	SK60	須恵器	蓋	(20.4)	－	(2.7)	灰	灰白、褐灰	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	砂粒わずかに含む		202310 000011
17 第 74・82 図	SK60	須恵器	坏	(14.5)	(9.9)	4.0	灰	黄灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	精良		202310 000026
18 第 74・83 図	SK60	須恵器	坏	－	8.4	(2.2)	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	白色粒子、微砂粒含む	平滑面有	202310 000027
19 第 74・83 図	SK60	須恵器	坏	－	(9.8)	(2.4)	灰黄褐	にぶい褐	回転ナデ、ナデ ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	砂粒をわずかに含む	平滑面有	202310 000014
20 第 74・83 図	SK60	須恵器	甕	－	－	(3.1)	灰黄褐	灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ	精良		202310 000015
21 第 74・83 図	SK60	須恵器	甕	－	－	(22.8)	灰黄褐	明褐灰 灰白	ナデ タタキ（格子、平行）	回転ナデ タタキ（青海波）	精良		202310 000024
22 第 75・83 図	SK60	石製品	不明	(11.7)	8.1	3.8	灰黄褐	－	－	－	－	側面、先端を敲打、540 g	202310 000013
23 第 75・84 図	SK60	石製品	砥石	7.2	8.4	2.7	灰黄褐	－	－	－	－	使用面４か所	202310 000012
24 第 75・84 図	SK60	石製品	不明	1.7	3.5	1.2	灰白	－	－	－	－	６面加工	202310 000016
25 第 75・84 図	SP35	土師器	坏	－	8.8	(3.4)	にぶい橙	にぶい褐	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	雲母、細砂粒含む		202310 000030
26 第 75・84 図	SP32	土師器	坏	－	(10.6)	(2.2)	橙	橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	精良	削り出し高台	202310 000001
27 第 75・84 図	SP64	土師器	甕	－	－	(5.5)	橙	橙	回転ナデ、ハケメ	回転ナデ ヘラケズリ	雲母、砂粒含む		202310 000002
28 第 75・84 図	SP66	土師器	甕	(18.0)	－	(7.5)	橙	橙	回転ナデ、ハケメ	回転ナデ ヘラケズリ	雲母、砂粒含む		202310 000003
29 第 75・84 図	SP70	土製品	土錘	7.8	3.0	2.4	褐灰	－	ナデ、オサエ	－	雲母、砂粒含む	穿孔有	202310 000004
30 第 75・84 図	SP70	石製品	不明	10.1	3.0	3.2	黄白色	－	－	－	－	側面に窪み有	202310 000005

４．総括

今回の第 10 ～ 16 次調査で確認した遺構は、柵列１条、掘立柱建物２基、土坑９基、ピット多数である。柵列と掘立柱建物の計画方位は第８次調査で確認した、８～ 13 度東に振れる建物群の中におさまる。また、出土遺物の時期は８世紀代を示し、以前の調査で出土した遺物の時期と相違ない。第 15･16 次調査においては転用硯が出土しており、識字層の存在を示唆する。今回の調査によって、第８次調査において確認された集落の広がりを確認することができた。（長谷川）

第 76 図　西区全景（東から）

第 77 図　東区全景（西から）

第 78 図　ＳＫ 60 土層堆積状況（北東から）

第 79 図　ＳＫ 60 完掘状況（東から）

第 80 図　出土遺物写真①

第 81 図　出土遺物写真②

第 82 図　出土遺物写真③

第 83 図　出土遺物写真④

第 84 図　出土遺物写真⑤

Ｘ．高三潴遺跡（第 14 次調査、概要報告）

１．調査に至る経過

令和５年９月８日、土地所有者から個人住宅建設に伴い久留米市三潴町高三潴字塚崎西畑 130-1 の一部における「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出された。対象地は高三潴遺跡内に位置し、試掘調査の結果、建設により遺構が破壊されることが明確であったため、発掘調査が必要な旨を回答した。現地での調査期間は、令和５年 10 月 16 日から 11 月 17 日までである。

第 85 図　調査地点の位置図（1/25,000）

２．位置と環境

調査地は久留米市西部である三潴町に位置する。地形は低位段丘の北裾部にあたり、周囲の沖積地より一段高い。南約 100 ｍに位置する第７・８次調査地点は特に標高が高い地点に位置する。一帯は、弥生時代前期末から後期を中心とする高三潴遺跡に含まれ、特に弥生時代後期初頭の標識土器である「高三潴式土器」が採集されたことが知られている。

第 86 図　西区全景（東から）

３．調査の概要

検出された遺構は井戸１基、土坑、ピットである。井戸は調査区隅で検出され、規模等詳細は不明だが、弥生土器や石器等が出土した。遺物の特徴から井戸は弥生時代中期のものと推察される。また、複数のピットからカキ殻や動物の歯等の遺存体が多数出土した。調査地点は高三潴遺跡の中でも北部に位置し、集落が比較的標高の低い低位段丘北部にまで広がっていることが判明した。

（河野）

第 87 図　井戸掘削状況（東から）

各種開発確認調査

久留米城本丸跡（第　1　次調査）
筑 後 国 府 跡（第 313 次調査）
西　郷　遺　跡（第　2　次調査）
筑 後 国 府 跡（第 314 次調査、概要報告）
東櫛原今寺遺跡（第 14 次調査、概要報告）
筑後国分寺跡（第 46 次調査、概要報告）

XI．久留米城本丸跡（第１次調査）

１．調査に至る経緯

本調査は、久留米市篠山町で実施した確認調査である。今回の開発の目的は、令和３年（2021）の有馬氏入城 400 年にあたり、篠山神社の境内管理のため多目的に使用できるスペースを確保することで、日常的な管理と史跡の活用に繋げていくことにある。多目的広場は、参道西側に 30 m× 5.0 m（約 150 ㎡）の範囲で整備される。工事内容は、西側の 30 m× 1.7 mを最大 165 ㎜漉き取り、東側に幅 400 ㎜、深さ 150 ㎜の掘削を施す。その後、全面に砂利舗装を敷き詰め、現高から最大 30 ㎝の盛土施工を行う。また、既存のツツジの生垣と松の巨木は撤去するというものだった。

令和３年５月６日、事業者である宗教法人篠山神社（宮司：山田茂人）より、久留米市篠山町 444 番地における多目的広場整備に先立つ「埋蔵文化財包蔵地の有無」の照会が提出された。同地は篠山神社境内に含まれ､昭和 58 年（1983）３月 19 日に指定された県指定史跡（史跡第 54）の「史跡久留米城跡」に位置するため、現状変更の届出と発掘調査が必要である旨を回答した。

令和３年５月 19 日付で、事業者より福岡県教育委員会教育長宛に「福岡県文化財現状変更許可申請書」が提出され、６月 15 日付の３教文第 529 号で許可が下りた。また、整備に先立つ確認調査についても同申請書を提出し、７月７日付３教文第 693 号で許可が下りている。

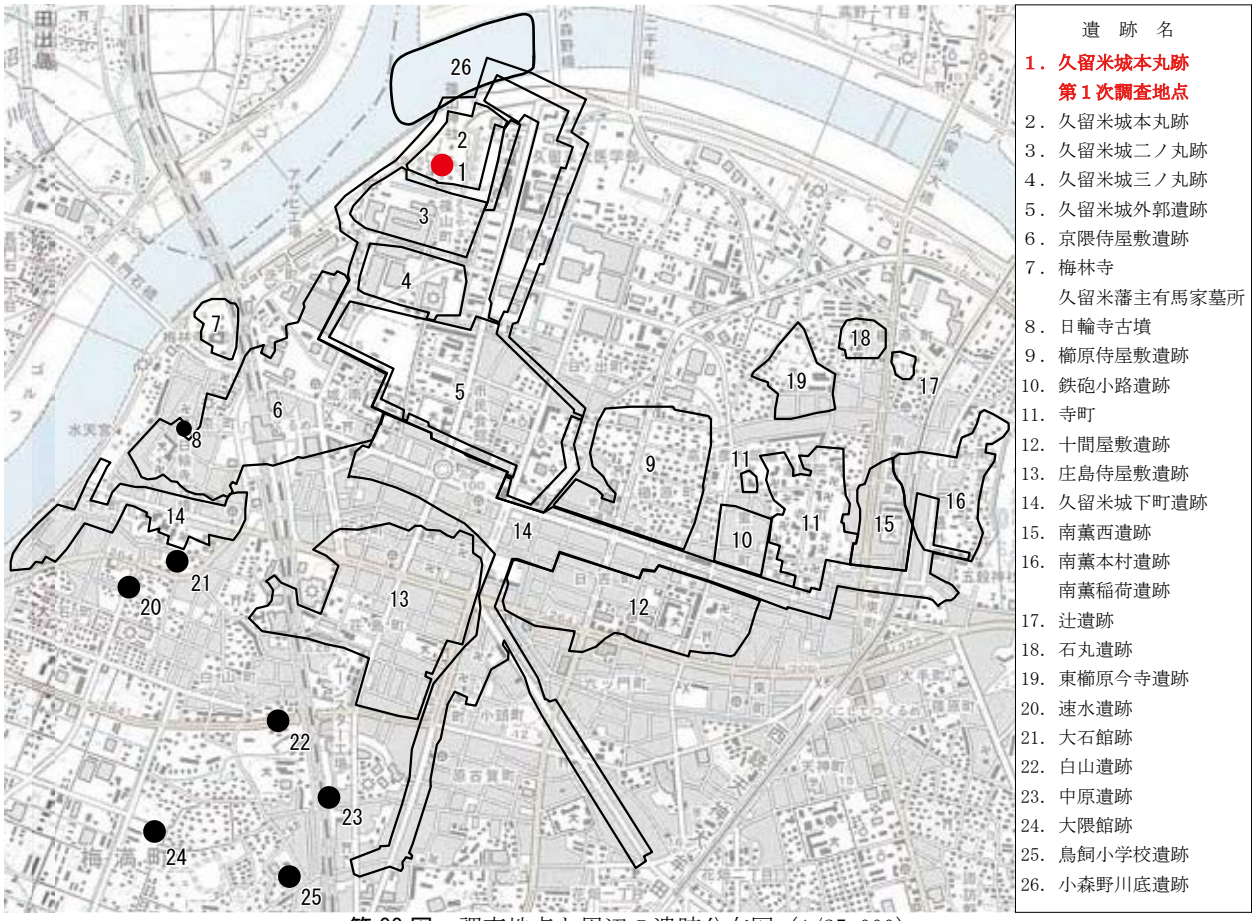
６月 11 日には、現地にて篠山神社側の関係者と事前打ち合わせを実施した。これを踏まえて、現地での確認調査は、７月９日より開始し８月 23 日に終了した。なお、対象面積 165 ㎡のうち、調査面積は 151.7 ㎡である。（小澤）

２．位置と環境

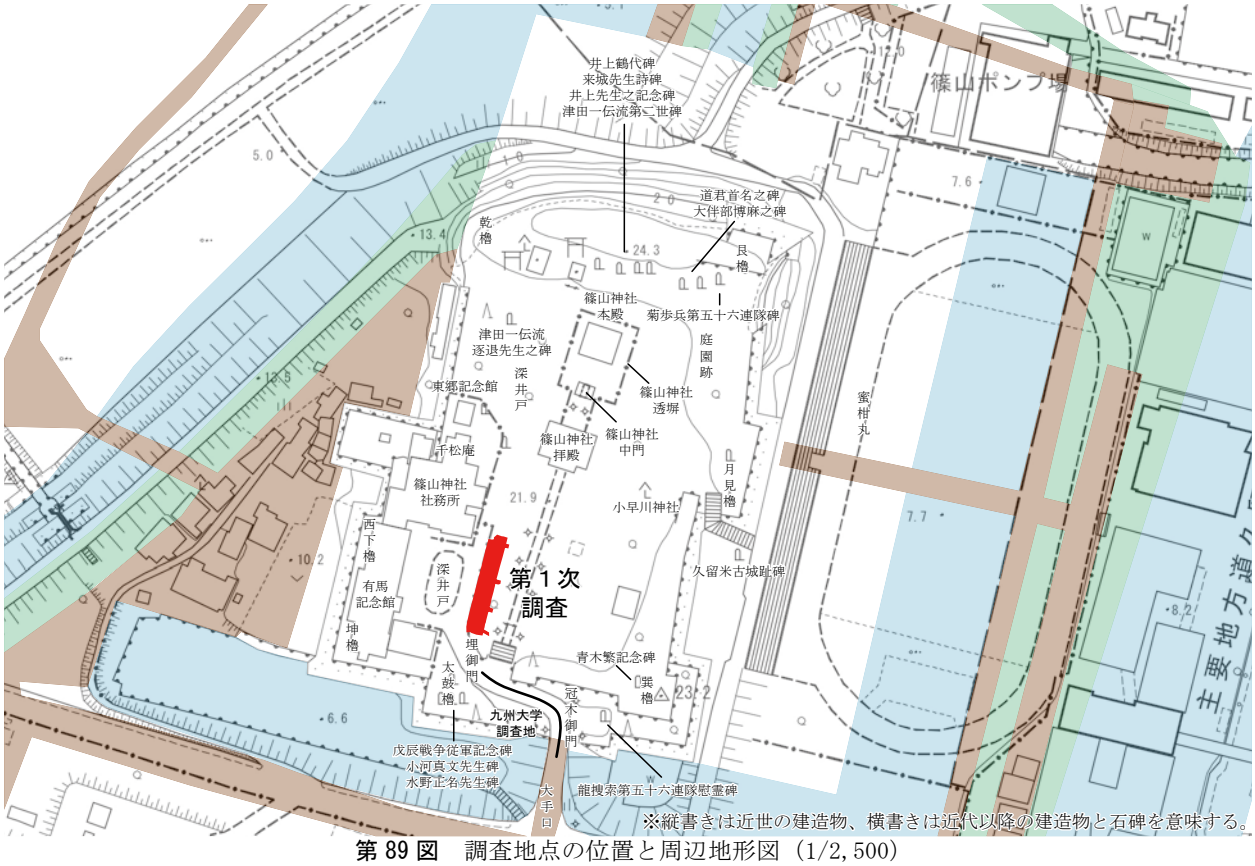
久留米市は筑紫平野の中心部に位置し、「筑紫次郎」の異名を持つ筑後川の中流域に面する。筑紫平野を流れる筑後川は、宝満川と合流して流れを南西へと変える。久留米城本丸跡は、筑後川左岸に形成された半島状の低位段丘の北西隅に位置し、第１次調査地点はその最頂部に近い標高約 22 mに立地する。

周辺での最古の遺物は、久留米城外郭遺跡で出土したナイフ形石器である。後世の遺構への混入品だが、旧石器時代後期には台地上が狩場として利用されていたことが窺える。

縄文時代の遺構として、中原遺跡と南薫西遺跡で検出された落とし穴状遺構が挙げられる。台地上を舞台に獲物を落とし穴に追い込む狩猟が行われていた可能性があり、久留米城外郭遺跡や久留米城下町遺跡、南薫西遺跡で出土した打製石鏃もこれを示唆する。ただし、落とし穴状遺構以外の明瞭な遺構は確認されておらず､時期が明確な遺物も中原遺跡の押型文土器以外は出土していない。



第 88 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）



第 89 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

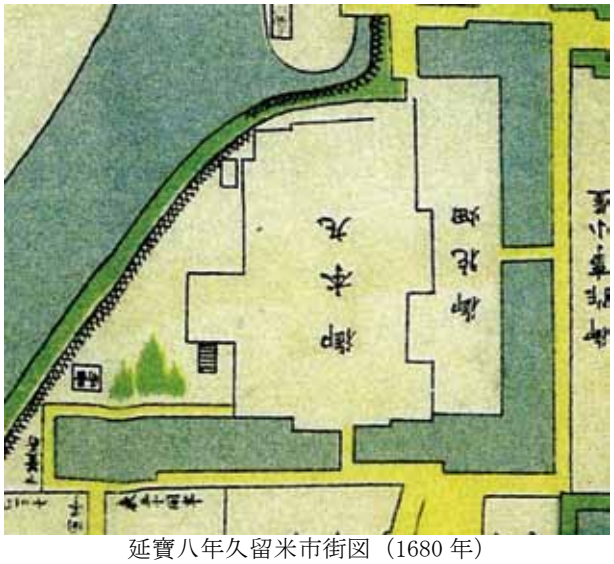
弥生時代には墓域が点在し、久留米城外郭遺跡や京隈侍屋敷遺跡、櫛原侍屋敷遺跡、東櫛原今寺遺跡、辻遺跡、石丸遺跡で甕棺墓が見つかっているほか、東櫛原今寺遺跡と南薫遺跡では木棺墓や石棺墓が検出された。特に、石丸遺跡では二列埋葬が確認されており、管玉の副葬や、磨製石剣や銅剣が出土した甕棺墓群が注目される。同時期の竪穴建物は、久留米城外郭遺跡や東櫛原今寺遺跡、石丸遺跡で確認されており、墓域に対応する集落の可能性が指摘されている。出土遺物は、京町侍屋敷遺跡で出土した磨製石剣や、東櫛原今寺遺跡で竪穴建物から出土した磨製石剣の切先、久留米城外郭遺跡と小森野川底遺跡で出土した磨製石戈が注目できる。

古墳時代には、低位段丘の西端に日輪寺古墳が築造される。５世紀末～６世紀初頭の前方後円墳であり、石室の石障に同心円文の線刻が施されている。日輪寺古墳の周囲では、京隈侍屋敷遺跡第 33 次調査で古墳の周溝が検出されており、往時は複数の古墳があったことが示唆される。京隈侍屋敷遺跡では、第 26 次調査で６世紀後半から８世紀後半の溝、第 32 次調査で６世紀の土坑、第 33 次調査で掘立柱建物や井戸、土坑が検出されている。久留米城外郭遺跡出土の模倣坏や十間屋敷遺跡の６世紀末頃～７世紀の掘立柱建物や区画溝、東櫛原今寺遺跡の５世紀前半の土坑とともに、古墳周辺の集落の存在が想定できる。なお、小森野川底遺跡では滑石製の子持勾玉が出土している。

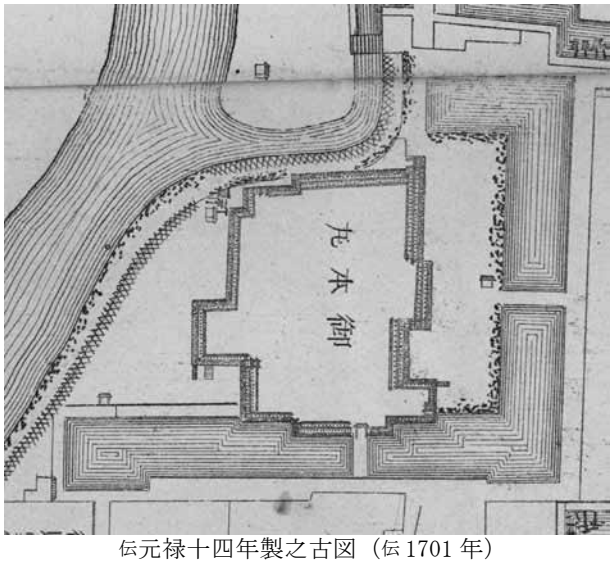
古代には、承平年間（931 ～ 938）に成立した『和名類聚抄』に登場する筑後国御井郡八郷に節原郷と鳥飼郷の名が見える。古代の遺構は、京隈侍屋敷遺跡第１次調査で８世紀の土坑、十間屋敷遺跡で竪穴建物や土坑が検出された。南薫西遺跡では、第６次調査で正方位に並ぶ掘立柱建物群が検出され、多数の瓦や刻書土器、墨書土器が出土したことから、節原郷の中心集落を彷彿とさせる。低位段丘の南部では、中原遺跡の７世紀の溝や、鳥飼小学校校庭遺跡の溝と土壙墓が鳥飼郷の様相を示す。『日本書紀』巻第二十九には、天武天皇七年（678）12 月に筑紫国で大地震が起きたという記述がある。このいわゆる「筑紫地震」は、耳納山地北麓の水縄断層が活動したことで起きたとされており、久留米市内には筑紫地震に伴うとみられる地震痕跡が点在する。久留米城周辺では、鳥飼小学校校庭遺跡で検出された地割れ痕跡や噴砂痕が筑紫地震に伴うものと考えられている。

中世の様相は、辻遺跡で検出された土壙墓や京隈侍屋敷遺跡の土坑と区画溝、櫛原侍屋敷遺跡で見つかった 15 ～ 16 世紀の溝が示している。久留米城の場所に土豪が城郭を築いたのは永正年間（1504 ～ 1521）と伝わり、天正年間には、高良山座主の麟圭が立てこもったとされる。周辺では、大石館や大隈館、春野屋敷といった屋敷の伝承がある。『筑後将士軍談』には、大隈館の比定地で礎石が出土したという記述があり、鳥飼小学校遺跡で検出された同時期の溝と共に注目できる。

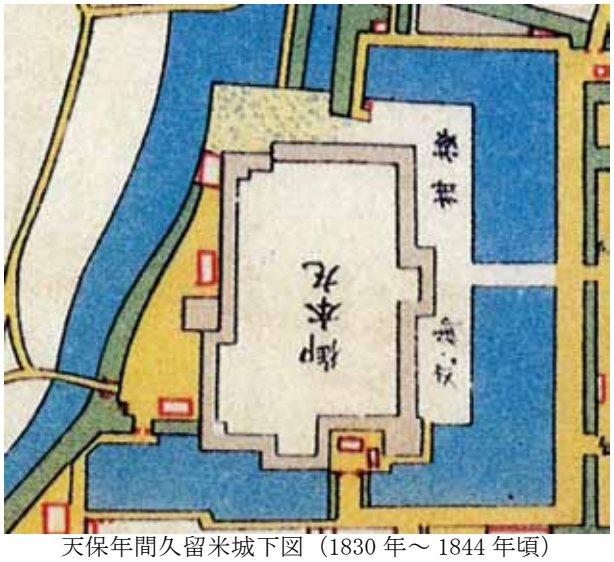
天正 15 年（1587）、豊臣秀吉の九州国割に伴い、小早川秀包が久留米城に入城した。秀包はキリシタン教会を築くなど城下の整備を行ったが、慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いで西軍に付いたため、翌６年（1601）に改易となった。筑後国主となった田中吉政は柳川城へ入城し、支城である久留米城には嫡子の吉信が入ったとされている。元和元年（1614）に一国一城令が出されたが、久留米城が破却されたかは不明である。元和６年（1620）、二代忠政が無嫡のまま死去したため田中氏も改易となり、翌７年（1621）に丹波国福知山から有馬豊氏が久留米城に入城した。（西）



延寶八年久留米市街図（1680 年）

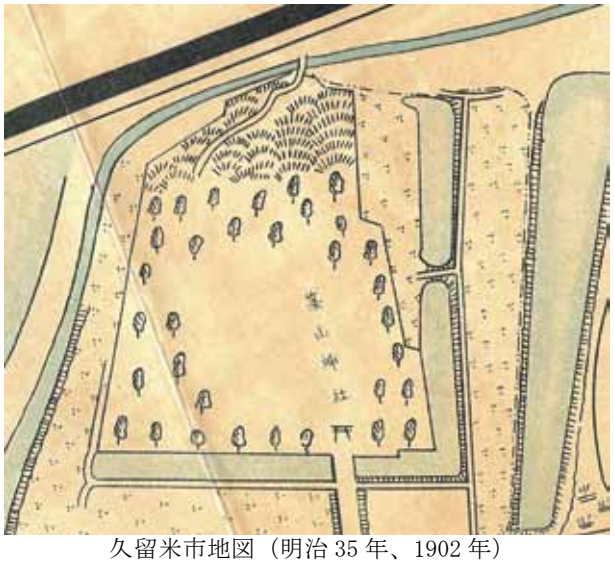


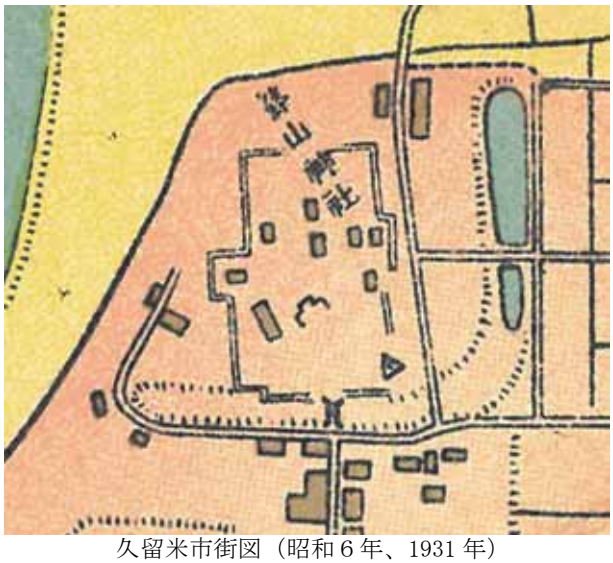
伝元禄十四年製之古図（伝 1701 年）



天保年間久留米城下図（1830 年～ 1844 年頃）

安政二年改旧廓図（1855 年）


久留米市地図（明治 35 年、1902 年）


久留米市街図（昭和６年、1931 年）

第 90 図　絵図と地図に見る久留米城本丸（抜粋）

３．調査の記録

（１）調査の経過

久留米城本丸跡は昭和 34 年（1959）に九州大学考古学研究室が石組暗渠の測量調査（注１）、昭和 38 年（1963）に福岡学芸大学久留米分校（現・福岡教育大学）が石垣の測量調査（注２）を行ったことがあるが、本丸内部の調査は実施されたことが無く、本丸御殿など近世の建物の残存状況は不明だった。そこで、本丸内の構造物の現存状況の把握、特に絵図との比較を行うために確認調査を行うこととなった。なお、調査地点は県史跡に含まれることから、発掘調査は遺構の上面確認に留め、一部を除き掘削は行っていない。

令和３年７月９日、降雨の中機材を搬入し調査に着手した。７月 12 日に現場作業員を投入してフェンスを設置し、表土の掘削を始めた。調査区南西部で瓦片と礫、石炭殻からなる砕石層を確認したが、層位を確認するために４本のサブトレンチを掘削し、検出した砕石層や整地層の層位と範囲を確認しつつ、撹乱や遺構の検出、生垣の周囲の掘削を行った。８月３日には、岩盤の確認と抜根時の遺構への影響を減らすために、樹根周囲の掘削を始めた。８月４日、調査区北部のサブトレンチの土層図を実測し、翌５日から調査区の清掃を始めた。８月６日、ドローンで調査区と本丸の全景を撮影し、台風養生を兼ねて機材の撤収を開始した。東京オリンピック開会式に伴う連休を挟み、機材の撤収と測量を行う予定だったが、８月 11 日以降は雨天が続き、11・12 日にフェンスの解体と回送を行うにとどまった。特に 13 日以降は天候が悪化し、18 日までの令和３年８月豪雨に見舞われた。８月 19 日以降、降雨を伴いながらも天候が回復し、８月 20 日に機材の撤収と測量を実施した。８月 23 日に機材撤収を完了、調査区を施工業者に明け渡して、現地での調査を終了した。

（２）基本層序

本調査地点の現況は篠山神社の境内で、有馬記念館前のロータリーに面する。ロータリーに沿っ

第 91 図　調査前風景（北東から）

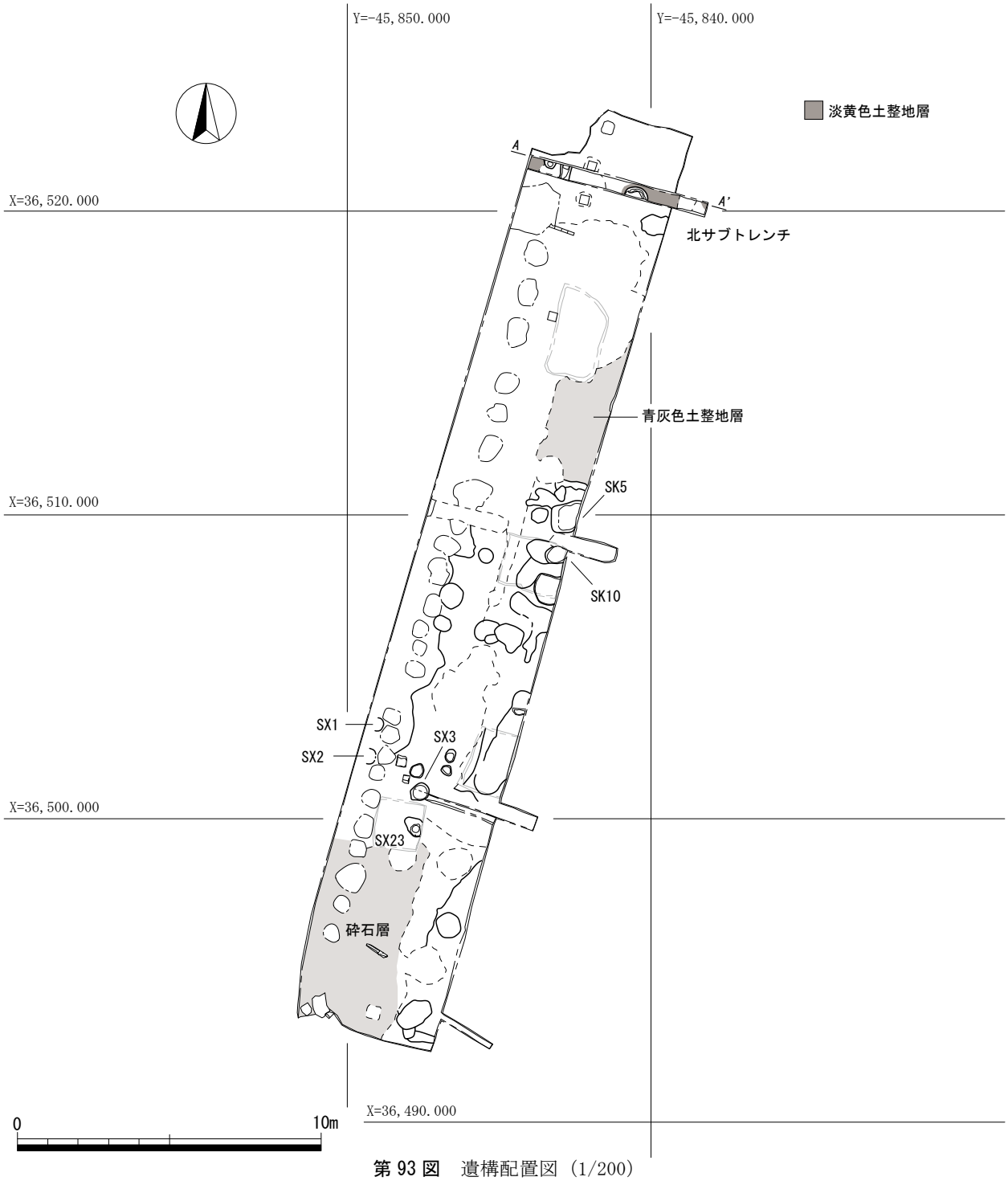
第 92 図　調査風景（北東から）

【注】
（１）鏡山猛「篠山城跡石組暗渠遺構」 久留米市教育委員会『久留米市文化財調査報告書第７集』 昭和 49 年
（２）波多野晥三『久留米城跡調査概報』 昭和 38 年（渡辺時雄・渡辺正氣・編『筑紫史論』第四輯　平成７年に再録）

て生垣が並ぶほか、マツ、エノキ、サクラが植えてあった。調査区の地表は、円礫を含み叩き締められ硬化した黒色土や灰色土が覆う。その下に、１～３㎝の円礫を含む黄橙色や浅黄色土の粘質土層があり、その直下の地表下 0.2 ～ 0.3 m、標高 21.05 ～ 21.2 mで整地層や砕石層、地山に至る。遺構の一部は、この整地層で検出した。調査区北端や一部の樹痕周囲で検出した地山は、風化した緑泥片岩を含む橙色粘質土が主体で、黄橙色土や白色土を一部含む。

（３）検出遺構

主な遺構として、土坑２基と埋甕４基、整地層、砕石層を検出した。



第 93 図　遺構配置図（1/200）

第 94 図　調査区全景（北西上空から）

第 95 図　久留米城本丸跡全景（西上空から）

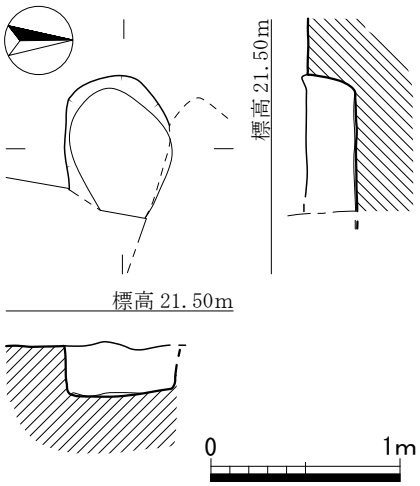
第 96 図　本丸上空から外郭方面を望む(北西上空から)

第 97 図　本丸上空から京隈方面を望む(北東上空から)

土坑

ＳＫ５（第 93 図）

調査区中央部で検出した土坑である。東半は調査区外に及ぶが、歪な台形の平面を有する。検出面の法量は、南北 1.04 m、東西 1.01 m以上を測り、深さ 0.3 mまで掘削した。出土遺物は丸瓦や平瓦が大半を占め、陶磁器や坂東寺焼とみられる土師器の細片が含まれる。



第 98 図　ＳＫ 10 実測図（1/40）

ＳＫ 10（第 98 図）

調査区中央部で検出した土坑である。北辺はサブトレンチが後出し、東端は調査区外に及ぶが、楕円形の平面を有するとみられる。検出面の法量は南北 0.59 m、東西 0.75 mで、深さは最大で 0.29 mを測る。遺物は大量の丸瓦と平瓦に加え、白磁碗の細片とモルタル片、丸礫が出土した。

埋甕

ＳＸ１（第 99 図）

調査区南西部壁際で検出した、遺構検出時に口縁部を確認した土師器の埋甕である。口縁部の西半は、ロータリー縁石の掘方が後出し、検出面で割れていることから、上半分も欠損していると考えられる。検出面での直径は、45 ㎝に復元できる。遺構検出に留めたため、取り上げた出土遺物は甕の胴部片のみである。

ＳＸ２（第 100 図）

調査区南西部壁際で検出した、土師器の埋甕である。遺構検出時に口縁部を確認したが、生垣に隣接し掘方は不明である。遺構の西半分はロータリー縁石の掘方が後出し、上半分も欠損していると考えられるのは、ＳＸ１と同様である。検出面での直径は、45 ㎝に復元できる。こちらも遺構検出に留めたため、取り上げた出土遺物は平瓦の細片と土師器甕の胴部片のみである。

ＳＸ３（第 101 図）

調査区南部のサブトレンチで検出した土師器の埋甕である。周辺の瓦片からなる整地層に後出する。掘方は南北 0.58 m、東西 0.91 mを測り、甕や瓦の破片、橙色土ブロックを含む褐色土で満たされる。埋甕は口縁部の直径は 0.45 m、深さ 0.26 mを測る。埋土は、甕の破片を含む灰黄褐色土が占める。甕内部からは埋甕の破片と瓦の細片のみ出土したほか、周辺からはＳＸ３のものとみられる土師器大甕の口縁部、丸瓦や平瓦の破片、陶器やモルタルの細片が出土した。

ＳＸ 23（第 102 図）

調査区南西部で樹根の周囲を掘削時に検出した、土師器の埋甕である。掘方は南北 0.65 m、東西 0.57 m、掘方から埋甕底部までの深さは最大で 0.24 mを測る。埋甕の大半は樹根と塩ビ管の埋設時に破壊されたらしく、底部の高さ 11㎝のみが現位置を保っており、検出時に大量の土師器の破片が出土した。埋甕の底部は残置しており、その他の出土遺物は、検出時に出土した平瓦の破片のみである。

第 99 図　ＳＸ１検出状況（南東から）

第 100 図　ＳＸ２検出状況（南東から）

第 101 図　ＳＸ３検出状況（南東から）

第 102 図　ＳＸ 23 検出状況（南東から）

その他の遺構

整地層（第 103 ～ 108 図）

北サブトレンチで検出した淡黄色粘土の整地層と、調査区北部で検出した青灰色土粘質土の整地層、調査区中央部の礫や瓦を含む灰褐色土に三分される。

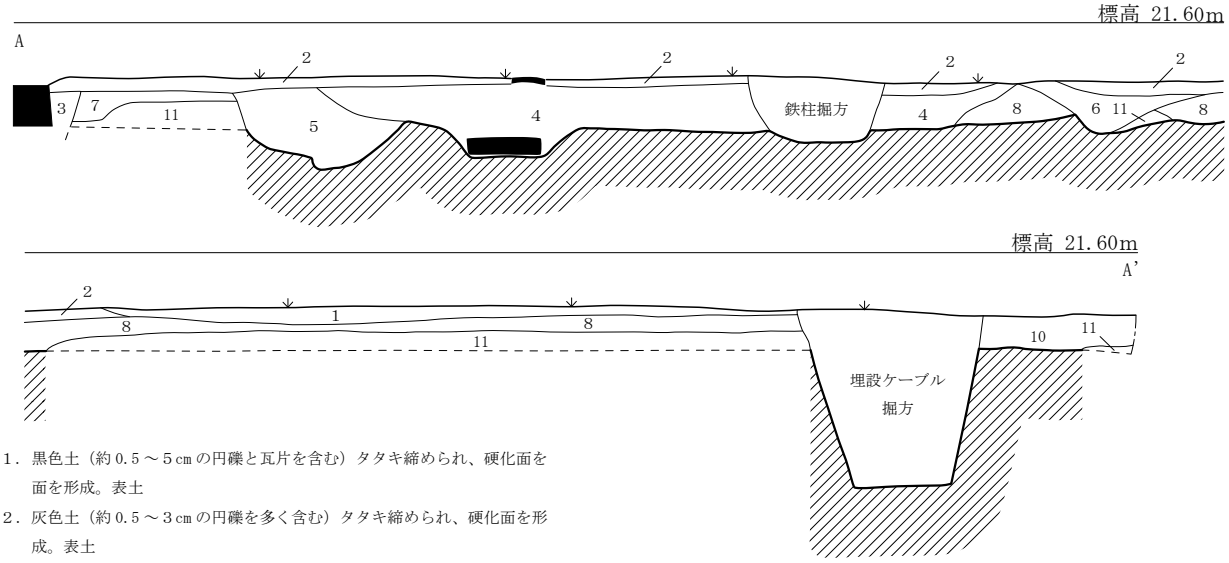
淡黄色粘土の整地層（第 103 図 11 層）は、北サブトレンチで検出した。撹乱やピットなど周りの遺構が後出し、南北 1.8 m、東西 5.9 mに点在する。緑泥片岩のチップを多量に含み、硬く締まり硬化面を形成する。サブトレンチの土層や後出する遺構の断面から、地山直上に形成されている。

青灰色土粘質土の整地層は、調査区北部の南北 4.8 m、東西 3.1 mにわたって分布する。東側は調査区外に及び、他の三方は撹乱が後出する。当初、台地の基盤層と考えていたが、豪雨後に煉瓦が出土したことから、近代の整地層と判断した。煉瓦以外にも、瓦の細片が出土している。

調査区中央部の灰褐色土は、瓦や礫を含む。樹根周囲の掘削から、厚さは 10 ～ 20cm で、その下には、瓦が大量に埋まっている。灰褐色土からは、瓦や陶器、モルタルの破片が出土した。

砕石層（第 109 図）

調査区南端の南北 6.3 m、東西 4.5 mで検出した。西方と南方は調査区外に及ぶ。瓦片が主体で、礫や石炭殻、モルタルの破片からなる灰色砂質土が分布する。瓦のほかには、碍子や染付、陶器の細片や、土師器の皿の破片が出土した。



1．黒色土（約 0.5 ～５㎝の円礫と瓦片を含む）タタキ締められ、硬化面を面を形成。表土
2．灰色土（約 0.5 ～３㎝の円礫を多く含む）タタキ締められ、硬化面を形成。表土
3．橙色粘土＋黄橙色粘土＋灰色土。ロータリー縁石掘方
4．灰色土小ブロック＋橙色粘土小ブロック（若干の黄橙色粘土小ブロックと鉱滓煉瓦片、瓦小片、礫を含む）
5．黒褐色土（橙色粘土粒子と黄橙色粘土粒子を若干含む）
6．黒褐色土（第５層と同じ、約１～３㎝大の円礫を若干含む）
7．暗灰黄色土
8．黄橙色粘土（約１～３㎝の円礫と風化した円礫を含む）
9．にぶい黄橙色土（橙色粘土、黄橙色粘土粒子を含む）
10．浅黄色粘土（橙色粘土ブロック、約１～２㎝の礫を含む）
11．淡黄色粘土（黄橙色粘土、橙色粘土小ブロックを若干含み、約１～６㎝の緑泥片岩チップを多量に含む）硬く締まり、上面は硬化面を形成。近世の整地層か。

0　1m

第 103 図　北サブトレンチ土層図（1/20）

第 104 図　北サブトレンチ西半土層（南西から）

第 105 図　北サブトレンチ中央土層（南西から）

第 106 図　北サブトレンチ東半土層（南西から）

第 107 図　青灰色土整地層検出状況（南西から）

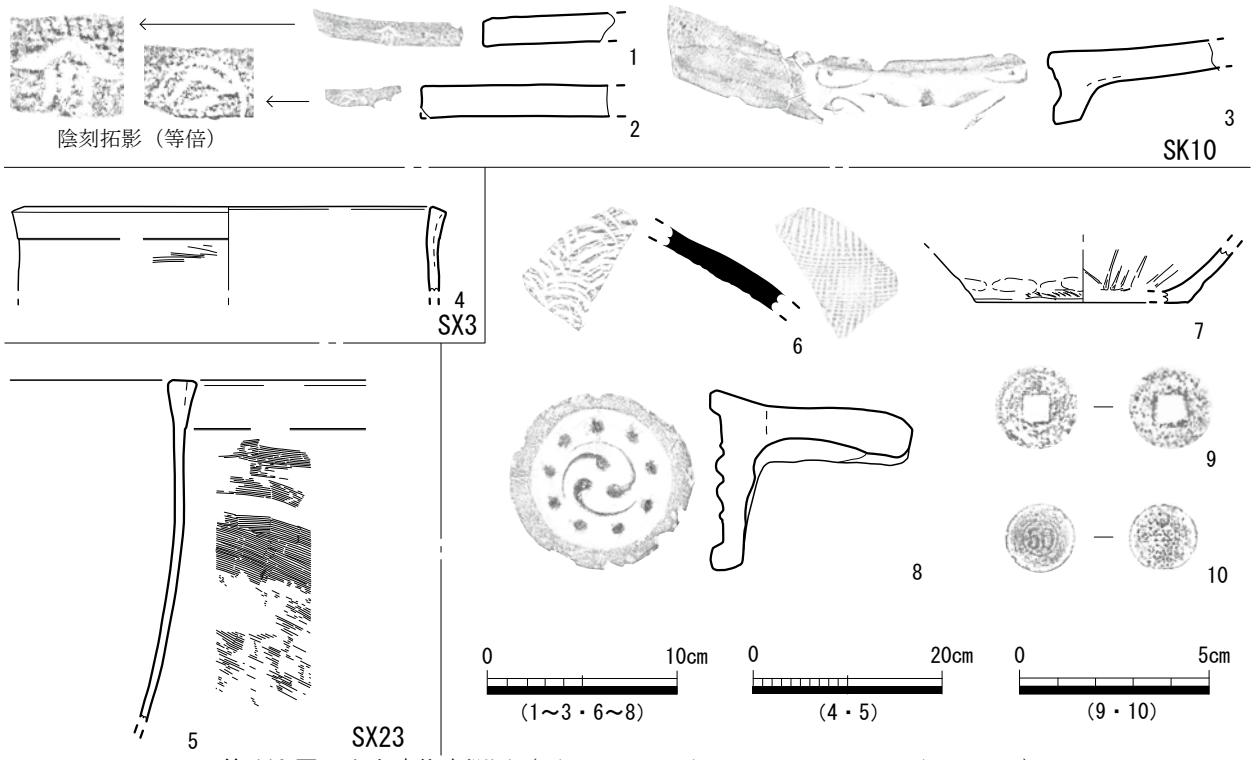
第 108 図　調査区中央部整地層検出状況（北東から）

第 109 図　調査区南部砕石層検出状況（北東から）

（４）出土遺物（第 110・111 図、第７表）

遺構検出に留めて完掘していないが、出土遺物の総量はパンコンテナー 14 箱分に及ぶ。近世と近代の瓦片が大半を占め、古代から中世の土師器や須恵器、近世の染付や陶磁器、土師器、瓦器、薬瓶やビール瓶、化粧瓶などの破片やビー玉といったガラス製品、銭貨や簪、鉄釘などの金属製品、モルタル片、石炭殻が挙げられる。この内、土坑から出土した陰刻を有する瓦や、埋甕、比較的古相の遺物、銭貨などを報告する。法量や色調などの詳細は、第７表を参照頂きたい。

１～３は、ＳＫ 10 出土の瓦である。１と２は平瓦で、小口面に１は「山と川」、２は「丸に全（または金か）」の陰刻を有する。２は表面が銀化しているが、１は銀化しておらず、厚さも２より薄い。３は、ＳＫ 10 検出時に出土した軒平瓦で、三葉文と均整唐草文を施す。側面には、袖部の接合痕が残る。**４**はＳＸ３の内部から出土した、埋甕の口縁部片とみられる土師器の大甕である。**５**はＳ



第 110 図　出土遺物実測図（1/8：4：5、1/4：1～3・6～8、1/2：9・10）

第 111 図　出土遺物写真

第７表　久留米城本丸跡第１次調査出土遺物観察表

遺物 No.	出土遺構	種別	器種	法量 (cm) 口径（長さ）	法量 (cm) 底径（幅）	法量 (cm) 器高（厚さ）	色調 外面（凹面）表面	色調 内面（凸面）裏面	調整・文様 外面（凹面）表面	調整・文様 内面（凸面）裏面	調整・文様 底面・高台（小口面、瓦当）	胎土重量	重量・備考	登録番号
1 第110図・111図	ＳＫ10 検出時	瓦	平瓦	(7.9)	(8.1)	1.45	黒褐色	浅黄橙色～灰色	ヨコナデ	ナデ、摩耗	ナデ、摩耗 陰刻	精良。褐色粒子、雲母を含む	陰刻「山に川」	202111 000008
2 第110図・111図	ＳＫ10	瓦	平瓦	(10.0)	(7.3)	1.7	灰色		ヨコナデ	ナデ	ナデ消し 陰刻	精良。雲母を含む	表面銀化 陰刻「丸に全カ」	202111 000006
3 第110図・111図	ＳＫ10 検出時	瓦	軒平瓦	(9.0)	(20.0)	1.6～3.7	にぶい黄褐色～褐灰色		ナデ	ヨコナデ	三葉文 均整唐草文	精良。微砂粒、雲母を含む	袖部 被熱により変色	202111 000007
4 第110図・111図	ＳＸ３	土師器	大甕	(43.2)	—	(8.9)	橙色		ハケ目 ヨコナデ、摩耗	ヨコナデ ナデ	—	多量の砂粒と雲母を含む	口縁部片	202111 000001
5 第110図・111図	ＳＸ23	土師器	大甕	—	—	(36.0)	橙色	橙色～にぶい橙色	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ 剥離	—	砂粒、微砂粒、雲母を含む	内外面摩耗	202111 000029
6 第110図・111図	北部 硬化面	須恵器	甕	—	—	(4.5)	灰色	青灰色	平行文叩き カキ目	青海波文叩き	—	精良。微砂粒を含む	肩部片	202111 000030
7 第110図・111図	樹根 周囲	土師器	擂鉢	—	(11.2)	(2.8)	橙色	橙色	ヨコナデ オサエ	ヨコナデ ４本単位の擂目	ナデ	砂粒、雲母を含む	底部片	202111 000031
8 第110図・111図	撹乱	瓦	軒丸瓦	10.7	9.5	9.8	暗灰色～灰色	灰色	ナデ	縄目痕 ナデ	尾長三つ巴 連珠文	精良		202111 000009
9 第110図・111図	表土	銅製品	銭貨	2.25		0.15	緑青		「寛……寶」	不明	—	2.45 g	寛永通宝	202111 000101
10 第110図・111図	撹乱	銅製品	銭貨	1.9		0.15	暗赤褐色 一部緑青		「日本国」「50」「昭和二十二年」	菊花文、右書きで「五十銭」	—	2.08 g	小型 50 銭黄銅貨	202111 000103

Ｘ 23 付近で出土した土師器の大甕で、ＳＸ 23 の破片と判断した。内外面共に摩耗が著しいが、外面胴部に調整痕がみられる。６は、調査部北部の整地層で出土した須恵器の破片である。７は、調査区北部の樹根周囲を掘削中に出土した、土師器の擂鉢である。８は撹乱から出土した軒丸瓦で、数少ない完形の瓦である。９と 10 は銭貨である。９は緑青に覆われているが、微かに「寛」「寶」の文字が残る。10 は昭和 22 年銘の小型 50 銭黄銅貨である。（西）

４．総括

（１）検出遺構について

既に述べたとおり、今回の発掘調査は確認調査のため、遺構の完掘は行っていない。そのため、遺構の規模や出土遺物の特徴、年代について不完全であることは否めない。以下、この前提に立って検出遺構の検討を行う。

まず２基の土坑は、いずれも瓦片が詰まっていた。ＳＫ５は坂東寺焼の細片、ＳＫ 10 はモルタル片が出土したことから、ＳＫ５は幕末以降、ＳＫ 10 は近代以降の所産である可能性が高い。瓦を廃棄した際の土坑と想定でき、後述する廃城以降の所産とみられる。

４基を検出した埋甕は、いずれも土師質の大甕であることが注目できる。大甕の年代は、久留米城下の発掘調査例から 18 世紀まで遡る可能性もある（注１）が、今回検出した埋甕は石炭殻やモルタル片を含む灰褐色土に後出することから、近代の遺構と考えられる。

整地層のうち、調査区北端で検出した淡黄色粘土の整地層は、緑泥片岩のチップを大量に含み、転圧をかけて整地したと考えられる。その範囲は本丸御殿の一部に収まり、出土遺物は無いが、近世まで年代が遡る可能性がある。その他の整地層や調査区南部の砕石層では、モルタルや石炭殻の破片が出土しており、近代以降の所産であることが想定できる。調査区中央部の灰褐色土の層の下には、大量の瓦が埋まっており、砕石層が北側に広がる可能性が示唆される。

以上、今回の調査で近世に遡る遺構は、調査区北端で検出した整地遺構のみである。本丸御殿の築造にあたって、地盤強化のために行われた整地と考えられ、有馬豊氏による築城に高度な土木技術が用いられたことが明らかとなった。同時に、調査区の南半分は撹乱が目立ち、近代以降に幾度も改変されていることが明らかとなった。

（２）出土遺物について

出土遺物に目を向けると、まず陰刻を有する平瓦が注目できる。いずれも、他の城郭や城下町に類例が無く（注２）、久留米周辺で製造された可能性が高い。図示した軒平瓦と軒丸瓦は、久留米城

【注】

（１）久留米市教育委員会『久留米城下町遺跡　―第 17 次調査―』久留米市文化財調査報告書第 262 集　平成 20 年
久留米市教育委員会『久留米城下町遺跡（通町十丁目）―第 22 次発掘調査報告―』久留米市文化財調査報告書 337 集　平成 25 年

（２）埋蔵文化財研究会『第 66 回埋蔵文化財研究会　幕藩体制下の瓦　―近世都市遺跡における生産と流通―』 平成 29 年
ただし、小倉城下では「山に上」の陰刻が施された瓦が複数地点で出土している。

下の分類（注１）の軒平瓦Ｃ類と軒丸瓦Ａ類にあたる。軒平瓦は、三葉文と渦巻が上下に並ぶ均整唐草文を施し、久留米城下町遺跡第１次調査（注２）のＳＫ 21 出土品に類似する。また、筑後地域では 18 世紀後半に軒平瓦の文様が三葉文から菊花文に変化することが指摘されている（注３）。これらの点から、今回図示した軒平瓦の年代は、18 世紀に収まると考えられる。

土坑や砕石層の瓦の由来だが、考えられるのは明治初頭の久留米城廃城に伴う本丸御殿の解体、もしくは昭和４年（1929）に篠山神社本殿が瓦葺から銅板葺になった（注４）改修である。この時大量に発生した瓦の再利用及び廃棄のために、調査区南部の瓦礫層や、調査区中央部の土坑が掘削された可能性が高い。

１点のみが出土した須恵器は、平行文・青海波文叩きやカキ目など、古墳時代から古代の須恵器の特徴を有する。久留米城本丸跡では、今回の発掘調査以外でも須恵器の破片が表採された例があるほか、故古賀壽氏が古瓦を表採したことがあるという（注５）。久留米城の場所に初めて城郭を築かれた、永正年間（1504 ～ 1521）以前の久留米城本丸跡に関する記録や伝承は未だ見つかっていないが、筑後川に面した丘陵が利用されていた可能性を示す資料である。

土師質の擂鉢は、陶器の擂鉢の出土例が圧倒的に多い久留米城下において、数例にすぎない土師質・瓦質の擂鉢の１点である。これらの土師質・瓦質の擂鉢は、京隈侍屋敷遺跡第 12 次調査（注６）や櫛原侍屋敷遺跡第 19 次調査（注７）のように 16 世紀まで遡る例もあるが、久留米城下町遺跡第１次調査（注８）や久留米城外郭遺跡第 15 次調査（注９）・第 19 次調査（注 10）・第 24 次調査（注 11）、京隈侍屋敷遺跡第 13 次調査（注 12）のように 17 世紀の出土例が多い。周辺の土器編年でも、土師質の擂鉢の登場は 15 世紀以前に遡り、その上限は 16 世紀から 17 世紀初頭とされている（注 13）。

久留米城の場所に土豪が城郭を築いたのは永正年間（1504 ～ 1521）と伝わり、天文年間（1532 ～ 1555）に三井郡司某が再興したという伝承がある（注 14）。今回出土した擂鉢は底部の破片、しか

【注】

（１）久留米市教育委員会『久留米城外郭　佐々木家屋敷跡』久留米市文化財調査報告書第 96 集　平成７年
（２）久留米市教育委員会『三本松町遺跡』久留米市文化財調査報告書第 74 集　平成４年
（３）秦憲二「矢加部町屋敷遺跡のまとめ」 九州歴史資料館『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 12 集　平成 24 年
（４）篠山神社社務所のご教示による。
（５）久留米市教育委員会『久留米城外郭遺跡　―第 19 次発掘調査報告―』久留米市文化財調査報告書第 328 集　平成 25 年
（６）久留米市教育委員会『京隈侍屋敷遺跡　―第 12 次調査―』久留米市文化財調査報告書第 277 集　平成 20 年
（７）久留米市教育委員会『櫛原侍屋敷遺跡　―第 19 次発掘調査報告―』久留米市文化財調査報告書第 365 集　平成 28 年
（８）注２文献『三本松町遺跡』
（９）久留米市教育委員会『久留米城外郭遺跡　―第 15 次発掘調査報告―』久留米市文化財調査報告書第 298 集　平成 22 年
（10）注５文献『久留米城外郭遺跡　―第 19 次発掘調査報告―』
（11）久留米市教育委員会『久留米城外郭遺跡　―第 24 次発掘調査報告―』久留米市文化財調査報告書第 374 集　平成 29 年
（12）久留米市教育委員会『久留米市指定文化財坂本繁二郎成果保存修理工事報告書』久留米市文化財調査報告書第 301 集　平成 23 年
（13）久留米市教育委員会『安武地区遺跡群Ⅷ』久留米市文化財調査報告書第 365 集　平成６年
田中克子「野多目Ａ遺跡群第４次調査出土の近世初頭の遺物について」 博多研究会『博多研究会誌　法哈嗟』第５号　平成９年
楠瀬慶太「日用雑器類から見た中世博多の土器様相　―調理具を中心として―」 日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』22　平成 21 年
（14）矢野一貞『筑後将士軍談』 嘉永６年（筑後遺籍刊行会『筑後国史　筑後将士軍談』 大正 15 年～昭和２年）

も遺構に伴う遺物ではないという制限はあるが、これらの伝承や有馬豊氏が入国する前の久留米城との関連が示唆される。

（３）篠山神社拝殿前の列石について

今回の発掘調査中、篠山神社の拝殿前に列石があるのを発見し、対象地外だったが、測量して写真を撮影した（第 112 ～ 114 図）ので、併せて報告しておく。

列石は２列に分かれる。北側の列石は南北 0.5 m、東西 0.9 m、主軸方位Ｎ -14°－Ｅおよび Ｎ -78°－Ｗを測り、若干間隔を有する５枚の板石からなる。南側の列石は東西 1.25 m、主軸方位Ｎ -79°－Ｗを測り、片岩性の３枚の板石からなる。

これらの列石は、主軸方位や検出状況が類似しており、同一時期のものと考えられる。また、篠山神社の拝殿の主軸方位とは異なることから、近代以降の所産とも考えにくい。そこで、本丸御殿の平面図と久留米城本丸跡の平面図（注１）を合成したところ、御殿中央部の曲水間と芭蕉間を結ぶ、若松御廊下に面した中庭に位置することが判明した。主軸方位も本丸御殿に類似する点から、この列石は現存する本丸御殿の遺構である可能性が高い。

（４）文献史料から見た久留米城本丸跡―近代以降を中心に

元和７年（1621）に久留米城に入った有馬豊氏は、元和元年（1615）の一国一城令のためか、寝所が無いほど荒れ果て狭小だった城郭の改修に着手した。同時に、低台地に侍屋敷を、低台地に囲まれた低地に城下町を配置し、正保３年（1646）までの 25 年をかけて城下の街並みを整備した。本丸の整備は、入城翌年の元和８年（1622）には「去春御入国已後御城内御堀等広」（注２）や「久留米城修繕成ル」（注３）の記述が文献に登場する。元和９年（1623）には「御城並御堀士屋敷等御普請、御本丸外建替広まり（『石原家記』）」とあり、本丸を含む城の改修が進んでいたことが想定できる。しかし、二ノ丸と三ノ丸、外郭を含む広大な城郭の整備にはなお時間がかかったらしく、『石原家記』に「御城御堀成就」の文字が見えるのは、豊氏入府から 10 年が経過した寛永８年（1631）のことである。

【注】

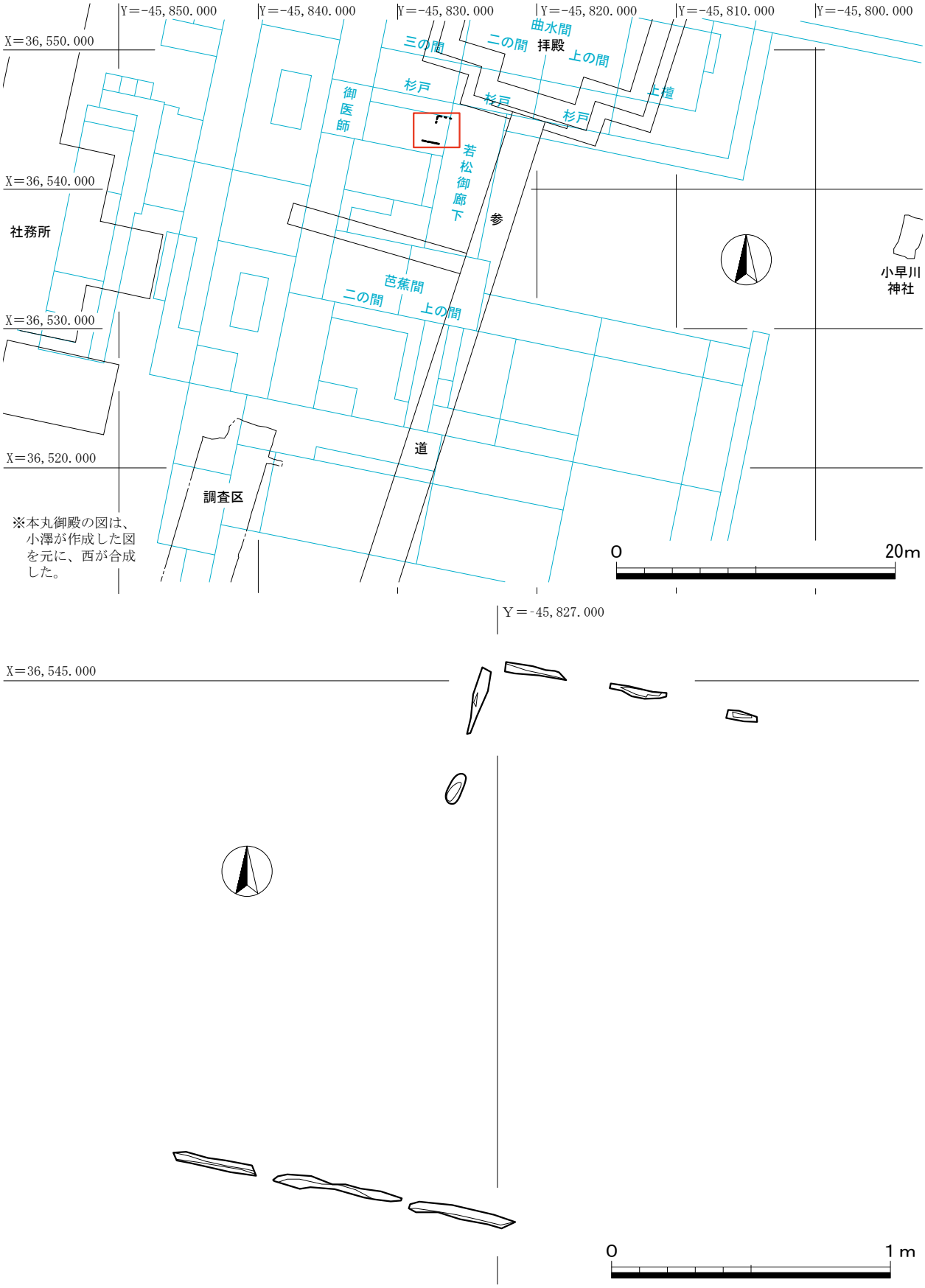
（１）松岡利郎「久留米城」 坪井清足・吉田靖・平井聖・監修『九州・沖縄』復元体系日本の城⑧　ぎょうせい　平成４年
　　富原道晴『富原文庫蔵陸軍省絵図―明治五年の全国城郭存廃調査記録』 戎光祥出版　平成 29 年

（２）石原為平『石原家記』 筑後史談会　昭和 19 年（後に再版。名著出版、昭和 48 年）

（３）戸田乾吉『久留米小史』巻ノ三　明治 27 年

第 112 図　篠山神社拝殿前列石遠景（南西から）

第 113 図　篠山神社拝殿前列石確認状況（南西から）



第 114 図　篠山神社拝殿前列石位置図・実測図（1/400、1/20）

本来なら、本丸の整備と現代までの変遷について、文献史料を提示して調査成果との比較を行いたいところだが、本丸を含む久留米城と城下町の変遷については、過去に何度も言及されているところであり（注１）、改めて行う紙幅は無い。また、今回検出した遺構は北端の整地層を除き、大半が近代以降に収まる。そこで本報告では、検出した遺構にも関連する廃藩以降の近現代の本丸跡について述べておく。なお、概要は第８表にまとめたので、併せて参照されたい。

明治３年（1870）から明治４年（1871）の久留米藩難事件に伴い、藩知事が不在という不安定な情勢の中、明治４年４月 14 日の廃藩置県により久留米県が設置された。久留米県の知政府は城内に置かれ、７月 25 日には布告に伴い御本丸表御門が県庁表御門に改称された。11 月 14 日、久留米県の廃止と三潴県の設置に伴い、旧久留米県庁は三潴県出張所に改められることになったが、翌明治５年（1872）２月 24 日の出張所改称の直前、２月 20 日に事務機能は旧藩校の明善堂に移った（注２）。これ以降、久留米の政治の中心は３月に旧御使者屋（現・両替町公園）へ移転した三潴県庁に移り、本丸の行政府としての役目は終焉したとされている（注３）。

三潴県出張所設置と同じ２月 24 日には、城郭近辺と城内の土居の樹木が伐採され３月 20 日に士族へ払い下げられる（注４）など、機能を終えた本丸の設備が早くも撤去され始める。陸軍省を経て大蔵省の管理となった本丸跡は売却されることとなり、８月４日、「旧久留米城城郭」の見立の入札期限を７日まで延長する布達が出されている（注５）。この入札の結果、久留米城は豊後国竹田の谷川忠悦が 100 両で落札した（注６）。８月 18 日には、23 日から 25 日の「四ツ時ゟ七ツ時（午前 10 時～午後４時)」に「旧城」を開放する布告が出された（注７）。実際、８月 18 日に町方から大勢の見物客が御殿と本丸東側の柳原を訪れ、握り飯を食べる者がいるなど「誠に珍敷事に御座候」と記録されている（注８）。10 月 29 日には大手門などの門や家老屋敷の取り壊しが始まり（注９）、本丸跡も石垣も取り壊されようとしたが、久留米城が他国に渡るのを危惧した緒方安平と古賀清蔵、古賀友平、富松某が買い取って阻止した（注 10）。

【注】

（１）古賀幸雄「毛利秀包と久留米」 久留米市史編さん委員会・編『久留米市史』第２巻　久留米市　昭和 57 年
田中俊博「久留米城の修築と城下町の建設」『久留米市史』第２巻
小澤太郎「コラム　筑後久留米本丸絵図と石垣普請」 久留米市文化財保護課『久留米市文化財保護課年報』Vol.13 平成 30 年
古賀正美『久留米城とその城下町』 海鳥社　平成 30 年

（２）以上、廃藩から久留米出張所移転までの動向は、下記の文献を参考にした。
深谷真三郎「廃藩置県と三潴県」 久留米市史編さん委員会・編『久留米市史』第三巻　久留米市　昭和 60 年

（３）注１文献『久留米城とその城下町』

（４）加藤田平八郎『加藤田日記』 久留米郷土研究会　昭和 48 年
久留米市『續久留米市誌』下巻　昭和 30 年

（５）三潴県庶務課「旧久留米城郭見立入札ノ事」 久留米市史編さん委員会・編『資料編　近代』久留米市史第 10 巻　久留米市 平成８年

（６）坂口寛司「石橋マツ子傳」『郷土研究筑後』第６巻第５号　昭和 13 年（昭和 50 年再版、筑後復刻委員会）

（７）注４文献『加藤田日記』
三潴県庁「久留米旧城縦観ノ事」『資料編　近代』久留米市史第 10 巻

（８）石本猪平、石本 昭一：翻刻、古賀 正美・山口 淳：校注『諸國見聞』 海鳥社　令和４年

（９）注４文献『續久留米市誌』下巻

（10）注６文献「石橋マツ子傳」

第８表　廃藩以降の久留米城本丸跡の変遷

年代	本丸跡改変の記録	その他の本丸跡に関する出来事
明治４年 (1871)		・４月 14 日、久留米県が設置され、知政府が城内に設置される。
明治５年 (1872)	・２月 24 日､城郭近辺と城内の土居の樹木が伐採される。 ・10 月以降、本丸内の建物が解体される。石垣も解体されようとしたが、緒方安平らが買い受けて阻止する。	・２月 20 日、三潴県の事務機能が明善堂に移動。行政府としての本丸跡が終焉する。 ・８月、豊後国竹田の谷川忠悦が 100 両で城を落札する。 ・８月 18 日～ 25 日、城内が一般開放される。 ・この年、久留米城は陸軍省の管轄となる。
明治７年 (1874)		・10 月 23 ～ 30 日、本丸と三ノ丸で博覧会が開催される。
明治 10 年 (1877)		・７月、篠山神社が創建される。
明治 12 年 (1879)	・篠山神社の本殿・拝殿・中門・透塀が築かれる。	
明治 21 年 (1880)	・境内の木々が育つ。境内には本殿・拝殿・社務所・宝蔵・絵馬堂などがあり。	
明治 22 年 (1889)	・石人首級碑が建立される。	
明治 25 年 (1892)	・道君首名之碑、大伴部博麻之碑、西海忠士碑が建立される。	
明治 26 年 (1893)	・井上先生之記念碑が建立される。	
明治 35 年 (1892)	・西海忠士之碑、井上鶴代之碑が建立される。	
明治 36 年 (1893)	・津田一伝流遂退先生之碑が建立される。	
明治 43 年 (1910)	・高良大社頓宮が建立される。	
明治 44 年 (1911)	・津田一伝流遂退第二世碑が建立される。	
大正３年 (1914)	・小河真文先生碑が建立される。	
大正 12 年 (1923)	・５月、狩塚門前の石橋を大手口に移築する。	
昭和４年 (1929)	・本殿・拝殿・中門・透塀の屋根を瓦葺から銅板葺に改築する。	
昭和６年 (1931)	・蜜柑丸を削平し濠が埋め立てられる。	
昭和８年 (1933)	・５月 21 日、水野正名先生碑が建立される。	
昭和９年 (1934)	・石橋マツ子、千松庵を寄贈する。	
昭和 10 年 (1935)	・戊辰戦争従軍記念碑が建立される。	
昭和 12 年 (1937)		・この頃、「天主閣」を再建し内部を徴古館にする計画あり。
昭和 13 年 (1938)	・蜜柑丸跡を久留米医専のグラウンドに整備。 ・９月、久留米古城趾碑が建立される。	
昭和 14 年 (1939)	・７月、来城先生詩碑が建立される。	
昭和 17 年 (1942)		・５月、久留米城の櫓を復元し、郷土記念館とする建設委員会の発会式が開催される。
昭和 20 年 (1945)	・収容人数 2,250 人の横穴式防空壕が掘削される。	
昭和 27 年 (1952)	・東郷元帥書斎が神社境内に移築される。	
昭和 30 年 (1955)	・この頃、東梅里が篠山神社の神苑を作庭する。	
昭和 34 年 (1959)	・10 月７日、有馬記念館と社務所を起工。千松庵を増改築し、石鳥居を冠木御門から境内参道に移築。境内外周に砕石敷の遊歩道を、大手口から本丸跡南西部にコンクリート敷の自動車道を敷設する。自動車道周辺の石垣を積み直したか。	・８月、九州大学考古学研究室が暗渠の測量調査を行う。
昭和 35 年 (1960)	・３月 31 日、有馬記念館と社務所、東郷記念館および自動車道路舗装などの工事が竣工する。 ・４月 24 日、上記施設の落成寄贈式が開催される。	
昭和 38 年 (1963)		・３月、福岡学芸大学久留米分校が石垣の測量調査を行う。
昭和 40 年 (1965)	・５月、菊歩兵五十六連隊碑が建立される。	
昭和 43 年 (1968)	・７月 21 日、青木繁記念碑の除幕式を開催。 ・11 月３日、久留米芸能会館が完成する。	
昭和 46 年 (1971)		・巽櫓の復元が計画される。
昭和 51 年 (1976)	・龍捜索五十六連隊慰霊碑が建立される。	
昭和 52 年 (1977)		・高圧電線鉄塔の建設計画が浮上するが、市民の反対運動で白紙となる。
昭和 56 年 (1981)		・久留米城郷学館の建設が計画される。
昭和 58 年 (1983)	・久留米芸能会館が諏訪野町に移転する。 ・月見櫓の石段が東向きに復原される。	・３月 19 日、久留米城跡として県史跡に指定される。
令和３年 (2021)	・多目的広場、本丸北面の遊歩道が整備される。	**・久留米城本丸跡第１次調査** ・有馬豊氏久留米入城 400 年
令和４年 (2022)		・10 月 31 日、篠山神社本殿・拝殿・中門・透塀が国有形文化財に登録される。

こうして、石垣と大井戸、礎石や庭園の一部は残ったが、本丸の建物は明治８年（1875）までに全て解体され（注１）、明治７年（1824）には博覧会が開催された。10 月 23 日から 30 日まで、本丸と三ノ丸で博覧会を開催する願出が田中龍之助などから三潴県に提出された。10 月 23 日、三潴県権令代理の水原久雄参事の名で「歌舞伎・歓物之類及茶店等」を三ノ丸で開くよう布達が出されている（注２）。博覧会の内容は出品目録が残る（注３）のみだが、博覧会を見学する小学校の教員と児童の名前を見学の前日までに提出するよう、10 月 29 日付で布達が出されている（注４）。

明治 10 年（1877）７月、有馬豊氏を祭神とする御霊社こと篠山神社が創建された（注５）。緒方安平が本丸跡を買い取った時と同額を寄付した（注６）ことで、明治 12 年（1879）11 月 16 日に現存する本殿や拝殿、中門、透塀が落成し（注７）、旧 10 月３・４日に行われた遷宮祭は、打上花火などで賑わったという（注８）。明治 21 年（1888）に刊行された名所画集（注９）には篠山神社の境内図があり、遠景などが誇張されているが、木々が育ちつつある様子が銅版画で描かれている。

以上のように、木々が生い茂る中に篠山神社が鎮座する今日の久留米城本丸跡の景観は、篠山神社の創建から約 10 年で形成された可能性が高い。明治 35 年（1902）の久留米市地図（第 90 図５）でも、二ノ丸跡と三ノ丸跡、外郭が工場の造成や市街地化などで城郭としての姿を失っている一方で、本丸跡は「篠山神社」の文字とともに木々が描かれている。篠山神社創建により開発に歯止めがかけられ、石垣を含む縄張りがほぼ残ったことが窺える。なお、明治 22 年（1889）以降、篠山神社境内には複数の石碑が建立されている。詳細は第８表を参照願いたい（注 10）が、大規模な開発が行われず、石碑が後世まで残る場所と認識されていた事が示唆される。

明治 43 年（1910）には高良大社の頓宮が築かれた（注 11）時点で、廃藩から篠山神社創建まで頻繁に行われた開発はいったん低調となる。第一次世界大戦中の大正４年（1915）３月 17 日（注 12）と 10 月（注 13）、久留米俘虜収容所に収容されていたドイツ兵捕虜たちが篠山神社に遠足している。この時に捕虜が撮影した写真や、ドイツの家族宛てに送った絵葉書に写った篠山神社は、いずれも

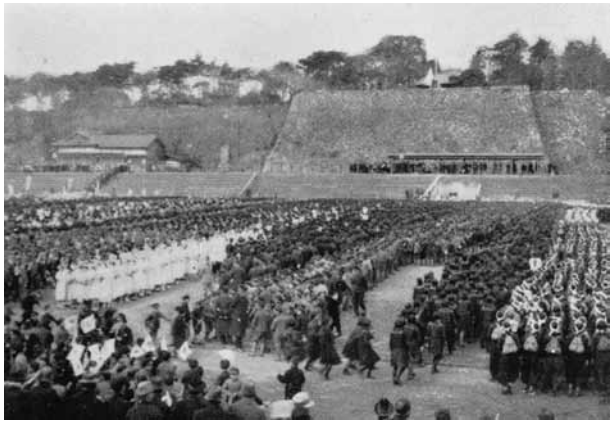
【注】
（１）Ｐ.81 注８文献『諸國見聞』
（２）三潴県参事「旧久留米等ニ於テ博覧会開場ノ事」『資料編　近代』久留米市史第 10 巻
（３）久留米市史編さん委員会・編『久留米市史』第６巻　平成２年
（４）學校懸「博覧会縦覧ニ付小学教員生徒出場人名等差出ノ事」『資料編　近代』久留米市史第 10 巻
（５）Ｐ.81 注４文献『續久留米市誌』・Ｐ.81 注８文献『諸國見聞』
　なお、篠山神社社務所も創建年を明治 10 年としているが、『久留米小史』巻ノ二は、創建を明治 11 年（1878）としている。
（６）Ｐ.81 注６文献「石橋マツ子傳」
（７）大日本神祇會福岡縣支部『福岡縣神社誌』中巻　昭和 20 年
（８）Ｐ.81 注４文献『續久留米市誌』下巻
（９）清水吉康『福岡県名所図録図絵』 大阪大成館　明治 21 年（昭和 60 年再版、大蔵出版会）
（10）石碑については、篠山神社のホームページのほか、下記の文献を参考にした。
　久留米碑誌刊行会『久留米碑誌』 昭和 48 年
　久留米市文化財保護課『久留米城本丸石碑めぐり』改訂版　平成 28 年
（11）山田義臣『福岡縣久留米市鎮座　縣社篠山神社案内記』 篠山神社社務所　明治 44 年
（12）「久留米俘虜収容所略年表」 久留米市教育委員会『ドイツ軍兵士と久留米　―久留米俘虜収容所Ⅱ―』
　久留米市文化財調査報告書第 195 集　平成 15 年
（13）エーリッヒ・フィッシャー、生熊文 訳「フィッシャー回想録」 久留米市教育委員会『ドイツ兵捕虜と収容生活
　―久留米俘虜収容所Ⅳ―』久留米市文化財調査報告書第 251 集　平成 19 年

第 115 図　瓦葺の篠山神社拝殿

第 116 図　銅板葺の篠山神社拝殿

木々が繁茂し、拝殿は瓦葺である（第 115 図）（注１）。さらに、シュトゥットガルト現代史図書館所蔵資料の写真には、現存しない瓦葺で２階建ての社務所も写っている（注２）。

昭和に入ると、先述のとおり昭和４年（1929）に篠山神社の屋根が瓦葺から銅板葺に代わったほか、昭和９年（1934）には千松庵が寄贈され、さらに複数の石碑が建立された。しかし、篠山神社境内の大規模な改変は無く、『久留米市誌』上巻（116 図）（注３）や昭和戦前期の「市民大会」（第 117 図）（注４）の写真には、本丸跡に樹木が繁茂したままの様子が窺える。もっとも、この間本丸跡の大規模な開発が皆無だったわけではない。大正 12 年（1923）５月、狩塚門の外濠（現・久留米商工会議所前交差点）に架けられていた石橋が大手口に移設された。昭和６年（1931）には、蜜柑丸を削平して濠の埋め立てが行われ、昭和 13 年（1938）に蜜柑丸の跡地に九州医学専門学校（久留米医専、現・久留米大学医学部）のグラウンドが造成されるなど、周辺の開発は着々と進んでいった。昭和 12 年（1937）に久留米商工会議所が発行した観光案内（注５）には、久留米城の「天主閣」を再建し内部を「徴古館」にする


第 117 図　戦前の久留米城本丸跡

【注】

（１）生熊文 訳「ヴィルヘルム・コッホ書簡集」『ドイツ兵捕虜と収容生活　―久留米俘虜収容所Ⅳ―』久留米市文化財調査報告書第 251 集　平成 19 年

（２）久留米市教育委員会『ドイツ兵捕虜とスポーツ ―久留米俘虜収容所Ⅲ―』久留米市文化財調査報告書第 213 集 平成 17 年

（３）久留米市役所『久留米市誌』上巻　昭和７年

（４）Ｐ.81 注４文献『續久留米市誌』下巻による。なお、写真のキャプションは「市民大会」のみで、具体的な撮影年月日は不明である。同文献には、久留米医専グラウンドで実施された行事として下記の記述がある。

国防婦人会久留米支部発会式（昭和 11 年３月 21 日）	皇威宣揚米英撃滅市民大会（昭和 16 年 12 月 10 日）
満州事変５周年記念式（同年９月 18 日）	戦捷第一次祝賀国民会（昭和 17 年２月 18 日）
皇軍戦捷祝賀会（昭和 12 年 11 月３日）	第 14 回建国祭（同年２月 11 日）
南京陥落祝賀会（同年 12 月 11 日）	第 15 回建国祭（昭和 18 年２月 11 日）
非常時局大会（昭和 15 年４月 21 日）	第 38 回陸軍記念日記念祭（同年３月 10 日）

（５）久留米商工会議所『躍進！久留米を語る　久留米及び筑後路の観光案内』昭和 12 年

ただし、すでに指摘がある（Ｐ.81 注１文献）が、有馬豊氏が改築した久留米城に天守は無い。本丸南東隅に位置する３層の巽櫓が大櫓と呼ばれ天守の代わりだとされている。上記文献の「天主閣」も、巽櫓を指している可能性が高い。

計画が記されている。さらに昭和 17 年（1942）５月には、紀元二千六百年記念事業並びに久留米観光協会創立十周年記念事業として、久留米城の櫓を復元し郷土記念館とするための建設委員会の発会式が篠山神社で挙行された。しかしこれらの復元計画は実行されず、昭和 20 年（1945）、戦局の悪化で本丸跡に収容人数 2,250 人の横穴式防空壕が掘削された（注１）。

第二次世界大戦後、再び本丸跡の大規模な改変が始まった。昭和 27 年（1952）、大手口の前にあった東郷元帥書斎（現・東郷記念館）が神社境内に移築された（注２）。昭和 34 年（1959）、翌年に迎える久留米市制施行 70 周年の記念事業の一環として、篠山神社の公園整備計画が立てられた。当初、久留米市が久留米市観光協会に 100 万円を支出して、10 月までに城内の草刈りと植栽が行われる予定だった（注３）。しかし、当時ブリヂストンタイヤ社長だった石橋正二郎氏がこの事業に 1,750 万円を投じて、老朽化した社務所と宝物庫を取り壊し、有馬記念館の新築や東郷元帥書斎、千松庵茶室の修復、冠木御門からの参道の自動車道路敷設などを行うことになった。

第 118 図　工事中の本丸跡入口

この間、８月に先述した九州大学考古学研究室による調査が行われている（注４）。同年 10 月７日、有馬記念館と社務所の起工式が実施されたが、10 月１日発行の広報紙に掲載された工事風景写真（第 118 図）（注５）では、大手口の石橋が撤去されて地固めが行われているほか、既にオート三輪が通行できるほどの自動車道路が敷設されている。

昭和 35 年（1960）４月 24 日、有馬記念館開館記念式典（注６）で配布されたパンフレット（注７）には、篠山神社境内の平面図が掲載されている。社務所の位置が今日と異なり、遊具を有する公園や遊歩道など現存しない施設もあるが、この時に今回の調査地点付近の様相は大きく変わったと考えられる。なお、調査地点南側に位置する埋御門跡の石垣は、積み上げ方が本丸跡周囲の石垣と異なることから、自動車道路敷設の際に積み直された可能性が高い（注８）。

本丸跡への構造物の新設は、その後も南東部を中心に続いた。昭和 43 年（1968）には巽櫓に青木繁記念碑が建てられ（注９）、久留米芸能会館が移転完成（注 10）した。さらに、久留米市による巽

【注】

（１）Ｐ.81 注４文献『續久留米市誌』下巻
（２）Ｐ.81 注４文献『續久留米市誌』下巻
（３）「美しくなる篠山城址」 久留米市役所『市政くるめ』第 78 号　昭和 34 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅰ〉に再録）
（４）Ｐ.69 注１文献「篠山城跡石組暗渠遺構」
（５）「自動車のまま城内へ　篠山城址整備工事進む」 久留米市役所『市政くるめ』第 80 号　昭和 34 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅰ〉に再録）
（６）「篠山城址 整備成る」 久留米市役所『市政くるめ』第 87 号　昭和 35 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅰ〉に再録）
　　石橋正二郎『私の歩み』 昭和 39 年
（７）ブリヂストンタイヤ株式会社『有馬記念館の落成寄贈式に際して』 昭和 35 年
　　久留米教育クラブ『有馬記念館と東郷記念館』 昭和 35 年
（８）現地で石垣を実見された岡寺良氏ならびに宮武正登氏のご指摘による。
（９）「青木繁記念碑 二十一日に除幕式」久留米市役所『市政くるめ』第 249 号　昭和 43 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅰ〉に再録）
（10）「久留米芸能会館が落成 篠山城趾」久留米市役所『市政くるめ』第 256 号　昭和 43 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅰ〉に再録）

櫓の復元計画（昭和 49 年）（注１）や久留米城郷学館の建設計画（昭和 56 年度）（注２）があったが、いずれも実現しなかった。昭和 52 年（1977）には、高さ約 60 mの高圧電線鉄塔建設計画が浮上し、久留米郷土研究会など市民による反対運動の結果、白紙となった（注３）。昭和 58 年（1983）３月 19 日に本丸跡が久留米城跡として県史跡に指定され、久留米芸能会館が諏訪野町に再移転した（注４）ほか、月見櫓の石段が東向きに「復原」されるなどの修復事業が行われた（注５）ことで、本丸内部の開発は再び落ち着くことになった。

そして令和３年、有馬氏入城 400 年にあたり、今回の調査の原因となった多目的広場や、本丸北面の遊歩道が整備された。一方で、令和４年（2022）10 月には篠山神社の本殿と拝殿、中門、透塀が登録有形文化財（建造物）になるなど、新たな文化財の保全も図られている。

（５）おわりに

以上、本丸跡の発掘調査の成果と近代以降の変遷について述べた。限られた調査だが、本丸御殿の築造に伴う整地層を検出した点、有馬豊氏入城以前の古代と 17 世紀初頭の遺物が出土した点、調査地点付近は近代以降に著しい改変を受けた点、拝殿前で本丸御殿に伴うとみられる列石を発見した点、以上の４点が成果として挙げられる。

久留米城と久留米藩に関する史料は、篠山神社文庫（篠山神社所蔵）や新有馬文庫（久留米市中央図書館蔵）などが現存する。さらに、文化財保護課では文献史料に加え、本丸で使用したと伝わる文政６年（1823）銘の鬼瓦なども所蔵している。今回は担当者の力不足で、これらの史料の検討はおろか、参照もしていない。また、福岡城や佐賀城、秋月城、柳川城など、周辺の城郭との遺構や出土遺物の比較も行うことができなかった。

久留米城本丸跡の調査は、今回の確認調査で口火を切ったに過ぎない。所蔵する史料の調査や現地での確認調査による遺構の把握、地質学や土木工学などの他分野からのアプローチ、そして他の城郭との比較など、より能動的･総合的な調査が望まれる。（西）

※発掘調査にあたり、下記の皆様には現地で種々のご教示を賜りました。記して御礼申し上げます（所属は発掘調査当時、五十音順、敬称略）。

岡寺良（九州歴史資料館）、古賀正美（元久留米市文化財保護課課長）、宮武正登（佐賀大学教授）、吉田洋一（久留米大学教授）

【注】

（１）「見つめよう郷土の文化 篠山城の雄姿再び」 久留米市役所『市政くるめ』第 388 号　昭和 49 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅰ〉に再録）

（２）「振興センター建設も予算化 続々と登場します“新五ヵ年計画事業”」 久留米市役所『市政くるめ』第 555 号　昭和 56 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅱ〉に再録）

（３）橋富博喜・塚本直次・樋口一成・稲永清泰「文化・体育活動の広がり」 久留米市史編さん委員会・編『久留米市史』第４巻　久留米市　平成元年

（４）「久留米芸能会館 移転工事が完成」久留米市役所『市政くるめ』第 603 号　昭和 58 年（『市政くるめ』〈縮刷版Ⅱ〉に再録）

（５）久留米市文化財保護課『久留米城跡』歴史散歩 No. 12（第二版）　平成 23 年

Ⅻ．筑後国府跡第 313 次調査

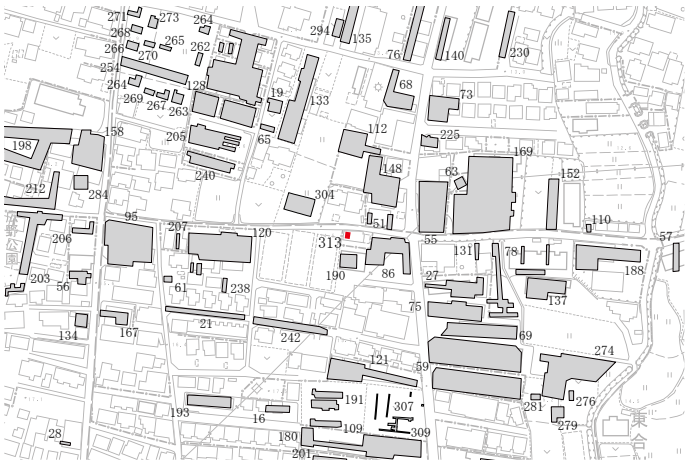
１．調査に至る経過

本調査は、住宅建設に伴う発掘調査である。令和５年４月 13 日、土地所有者より久留米市朝妻町 1416 - ３における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡内にあたり、国府域の中央部を東西に延びる道路遺構、推定官道上の南側に接する。また、東側隣接地の第 86 次調査ではイスラム陶器片を含む東西溝ＳＤ 3713 が検出されており、当該地に及ぶことが予想された。このため、４月 18 日に確認調査を実施し、ＳＤ 3713 の延長部と推察される東西溝を検出した。建物の建設は、遺構を保存するための保護層が確保される計画であったが、遺構の重要性を鑑み上面確認調査を行う旨を回答した。その後の協議により、国庫補助事業として対応することとなり、４月 27 日に土地所有者から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、現地調査を実施する運びとなった。調査期間は令和５年５月 10 日から５月 11 日である。

２．位置と環境

筑後国府跡は市内を東西に貫流する筑後川中流域の左岸に位置し、耳納山地西端の高良山から北西に派生する低位段丘、通称「枝光台地」上に立地する。この台地の南側には水縄断層帯が東西に延びており断層崖を形成し、崖下には複数の湧水地点が見られる。一方北側は、台地端部から２～３ｍ比高を減じ、筑後川が成した氾濫原が広がる。転じて、東側は崖下の湧水に端を発する井田川が、西側は高良山南側に源を発した高良川が北流し筑後川へと注いでおり、これらの断層崖、氾濫原、井田川、高良川が国府域の四至を画している。

筑後国府跡が位置する枝光台地とその周辺は、市内でも特に遺跡が集中する地域である。代表的な遺跡として、縄文時代前期の標識遺跡である野口遺跡や石冠・石棒が出土した西小路遺跡に加え、弥生時代の甕棺墓や祭祀土坑が検出された国史跡安国寺甕棺墓群、環状土坑列が確認された市ノ上北屋敷遺跡、さらに円墳や方墳を調査した福聚寺古墳群、古墳時代初頭の１辺約 25ｍの方形区画溝が検出された市ノ上東屋敷



第 119 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）

遺跡が挙げられる。また、天武７年（679）の筑紫国地震に起因すると考えられる地割れ痕跡を確認した神道遺跡、８世紀代の回廊状遺構を検出したヘボノ木遺跡などがある。

７世紀後半、枝光台地北西端の田代・古宮地区を中心に大溝や土塁、河川によって囲まれた台地に官衙的な遺構群が出現する（前身官衙）。その後、筑後国が成立した７世紀末から８世紀中頃にかけて、古宮地区に南北約 180 ｍの築地塀で区画された官衙が営まれる（Ⅰ期政庁）。九州において律令体制が安定した時期を迎える８世紀中頃に古宮地区から約 200 ｍ東の阿弥陀地区に築地塀で区画され、９世紀前半には礎石建物が築造される南北 75 ｍ、東西 67.5 ｍの政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁では、西脇殿や政庁前の朝集殿的な建物群、築地塀、大量の古瓦等が検出されている。この時期、政庁付属官衙群は枝光台地一帯に広がり、各官衙ブロック毎に計画方位をもって造営されており、Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約 200 ｍの場所には、国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は 10 世紀前半に焼失したと推察され、東へ約 600 ｍの朝妻地区に移転する（Ⅲ期政庁）。付属する官衙群はⅢ期政庁の東に多数確認されており、国司館と推定される施設も存在する。さらに 11 世紀末には南東約 400 ｍへ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良記』に見える「今ノ苻」と考えられるこの政庁は、12 世紀後半頃まで存続していたようである。『筑後国検交代使実録帳』には、大治５年（1130）から仁治２年（1241）までの国府院や駅館の荒廃した様子が描かれ、南北朝争乱期には懐良親王が筑後国府に陣を置いた記事がある。実質的な機能は別として、筑後国府の名称は 15 世紀まで存続したと推測される。13 世紀以降の国府に関連する遺構は発見されていないが、今後の調査で明らかになると思われる。

第 120 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

３．調査の記録

（１）調査の経過

本調査は、推定官道とされる道路遺構の確認と、第 86 次調査で検出した東西溝ＳＤ 3713 の西側延長部の確認を目的とした上面確認調査である。

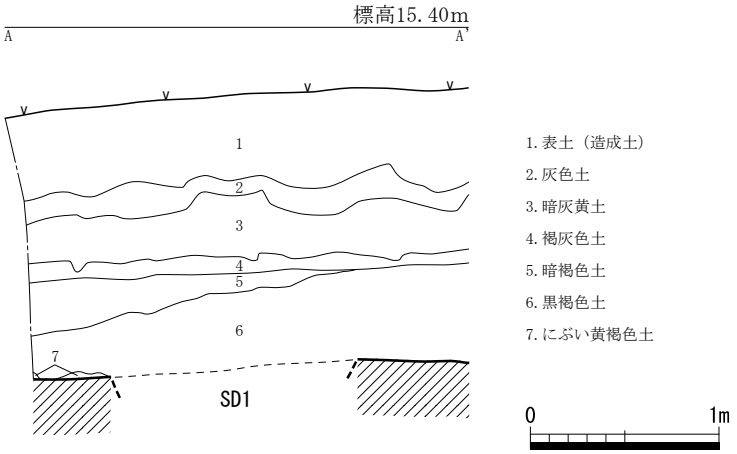
第 121 図　調査風景（北東から）

調査は、令和５年５月 10 日に重機による表土剥ぎから開始した。表土剥ぎ終了後早速作業員を投入し、遺構検出および試掘溝の掘削を行った。５月 11 日には、全体写真撮影を行うとともに、遺構配置図・土層図を作成した。同日午後には埋め戻しを行い、発掘機材を撤収して、全ての現地作業を終了した。土層図（1/10）は水糸メッシュ法で作製し、遺構配置図はトータルステーションを用い、その記録は株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん cubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、Canon EOS 6D で撮影した。

第 122 図　調査区全景（南から）

（２）基本層序（第 123 図）

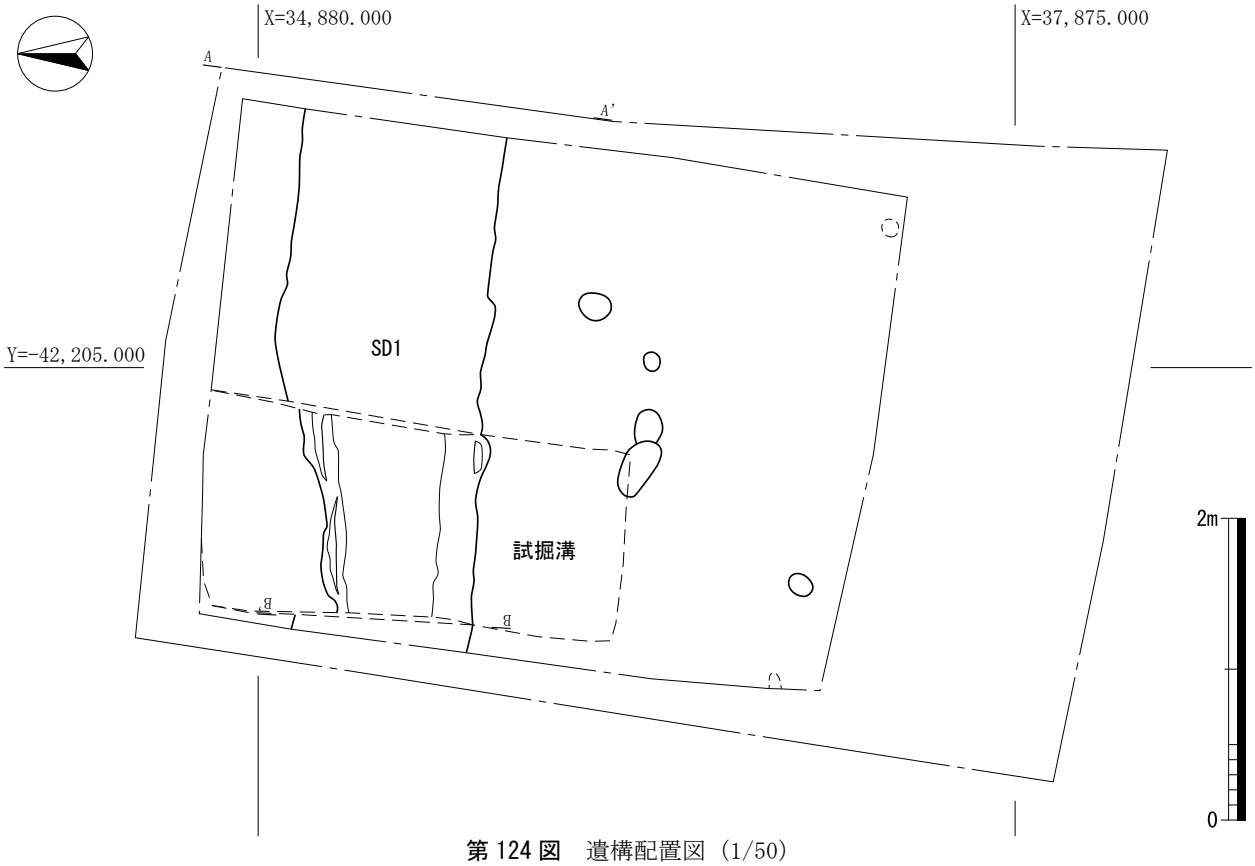
調査地は、南から北へ向かって比高を減じる緩傾斜地、標高 15 m 地点に位置する。基本層序は、造成土（40 ～ 50 ㎝）下位の灰色土（10 ～ 20 ㎝）および暗灰黄色土（25 ～ 35 ㎝）を経て、遺物包含層に至る。遺物包含層は上位から褐灰色土（10 ㎝）、暗褐色土（最大 30 ㎝）、黒褐色土（25 ～ 50 ㎝）が堆積し、黒褐色土下位が遺構検出面の地山であり、現地表からの深さは約 1.5 m、標高は 13.5 mを測る。



第 123 図　調査区東壁北側土層図（1/40）

（３）検出遺構

検出した遺構は、溝１条とピット５基である。ピットの平面形は円形や長円形で、10 ～ 40 ㎝程度を測るが、建物を構成する柱穴は確認できなかった。また、東西に延びる道路遺構の南端部は、検出し得なかった。なお、調査区東壁の土層観察では非常によく締まるにぶい黄褐色土（第７層）が認められ、道路遺構に関連する土壌の可能性も考えたが面的な広がりはなかった。



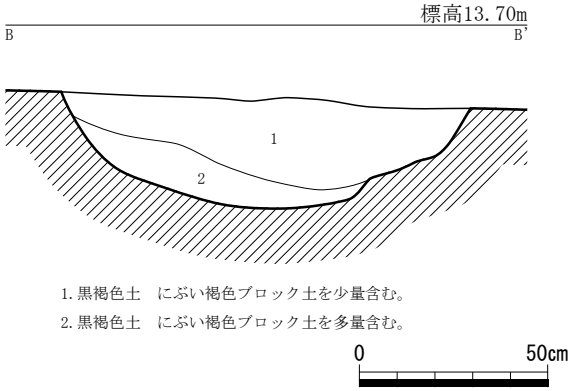
第 124 図　遺構配置図（1/50）

溝

ＳＤ１（第 124 ～ 126 図）

調査区北側で検出した東西方向に延びる溝である。長さは 3.4 ｍで、幅は東側が 1.35 ｍ、中央が 1.40 ｍ、西側が 1.17 ｍで、深さが 29cm を測る。底面断面形は凹レンズ状で、壁面は緩やかに立ち上がり、溝底面に高低差は認められない。埋土は黒褐色を呈し、ブロック土の多寡で上下２層分けられる。埋土中から遺物は出土していない。

第 125 図　ＳＤ１土層（東から）

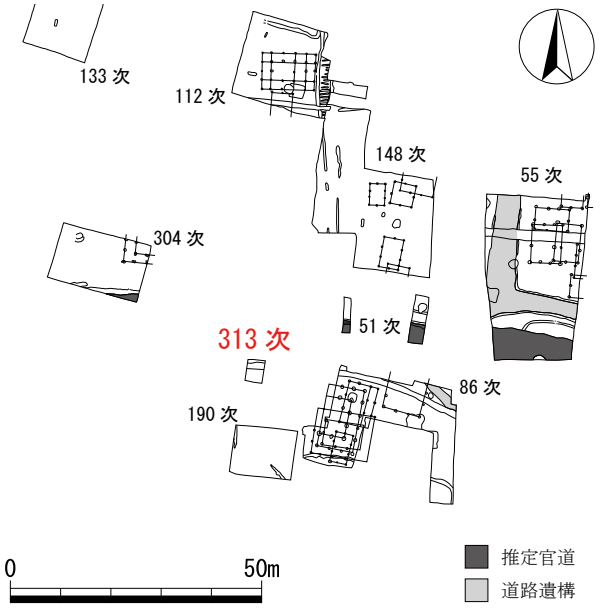


第 126 図　ＳＤ１土層図（1/20）

４．総括

本調査は、調査地の東西延長部で検出されている道路遺構、推定官道の確認と、第 86 次調査ＳＤ 3713 の西方延長部の確認を目的として調査を実施した。結果、道路遺構は検出できなかったが、東西溝ＳＤ１を確認した。道路遺構は大宰府方面から南下したのち、井田川右岸に位置するヘボノ木遺跡南西部で西方へ路線を変え、井田川左岸の筑後国府跡中央部を東西方向に伸びるルートが復元されている。左岸の道路遺構については幅 10 ｍ程度で、築造年代は７世紀末～８世紀初頭と 10 世紀中頃の２時期があり、11 世紀末～ 12 世紀初頭に廃絶したものと考えられている。

今回道路遺構を検出し得なかったのは、路線がやや北よりに西方へ伸びているためと思われる。道路遺構の南端は本調査区よりも北側、現市道南側付近を通るものと推察され、86 次調査の成果を追認する形となった。ＳＤ１は、遺構の規模・形状に若干の相違はあるものの、検出位置からＳＤ 3713 の延長部と考えられ、先の調査で 11 世紀後半の年代が与えられている。（廣木）



第 127 図　第 313 次調査と周辺の主要遺構模式図（1/1,500）

Ⅲ．西郷遺跡第２次調査

１．調査に至る経過

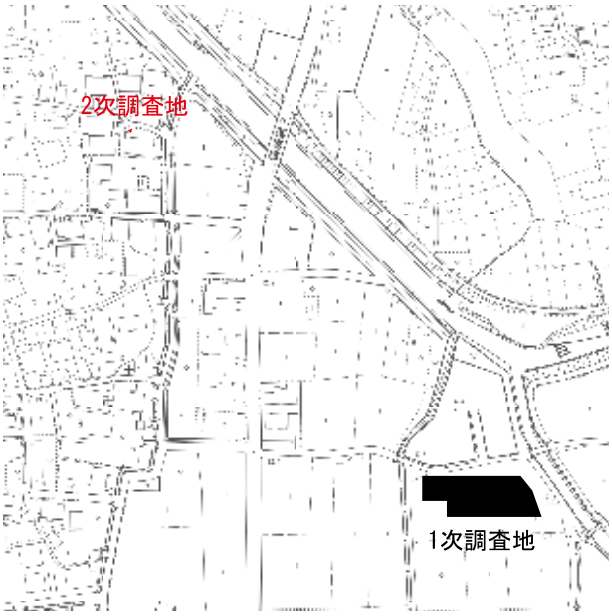
本調査は、住宅建設に伴う発掘調査である。令和５年４月 18 日、土地所有者より久留米市田主丸町中尾 840 - 3 他における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地は周知の遺跡である西郷遺跡内に所在することから、４月 27 日に確認調査を実施した。結果、開発予定範囲では表土を殆ど確認できず地山が露出した状態であったが､削平をうけた甕棺墓１基を確認したため、発掘調査が必要である旨を回答した。その後の協議により、国庫補助事業として対応することとなり、５月８日に土地所有者から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、現地調査を実施する運びとなった。調査期間は、令和５年５月 16 日から５月 17 日である。

２．位置と環境

西郷遺跡は、田主丸町の西端に位置する西郷地区を中心に広がる遺跡である。国道 210 号の南側を西流する巨勢川は、本遺跡の北側で国道と交差し善導寺町付近で筑後川に流れ込む。遺跡周辺部は、耳納山麓からの流入土と巨勢川の河岸段丘生成の相乗効果で微高地となっており、調査地はその東側、標高 14.4 ｍ地点に位置する。

平成９年度から３か年をかけて実施した遺跡等詳細分布調査の結果、当地区周辺は遺跡の分布が希薄であるが、巨勢川を挟んだ北東側に弥生時代の以真恵筑陽遺跡や、弥生・古墳時代の唐島西遺跡が所在することが明らかとなっている。また、本調査地付近には弥生時代中期を中心として、濃密な遺物の散布が認められた。

これを裏付けるように、調査地点の北西 300 ｍで実施した西郷天神免遺跡の調査では、弥生時代の竪穴建物１軒、中期の甕棺墓２基のほか、古墳時代の竪穴建物２軒が確認された。一方、南東 250 ｍ地点で実施した第１次調査では、古墳時代初頭の溝、中世の溝、井戸、土坑が検出された。また、黒曜石製の小形ナイフ型石器、流紋岩製の角錐状石器なども出土している。西郷地区には近世の遺物も散布していることから、現代まで連綿と集落が営まれてきたようである。



第 128 図　調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）

第 129 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第 130 図　調査区全景（西から）

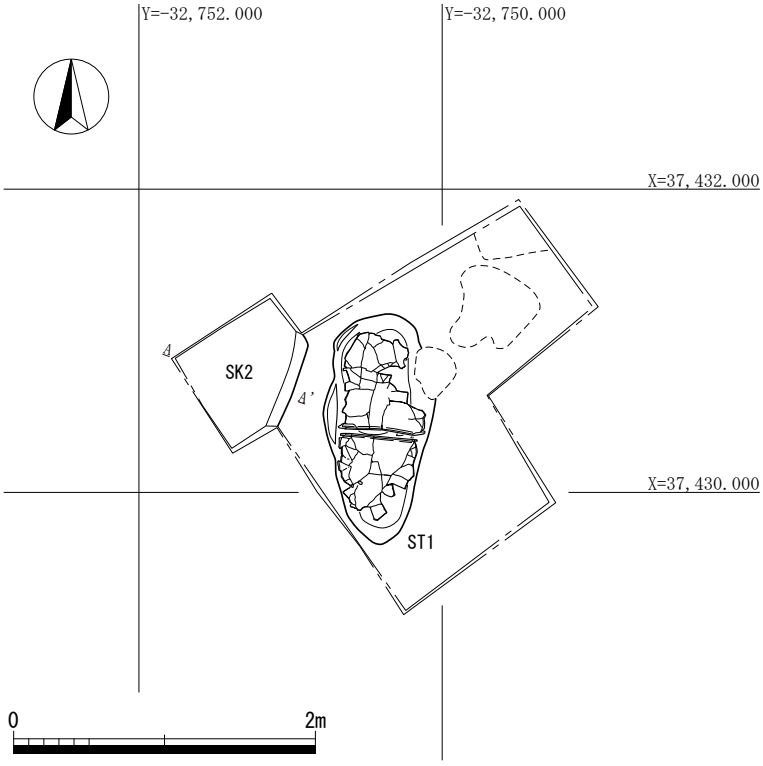
３．調査の記録

（１）調査の経過

本調査は、確認調査の際に発見した甕棺墓の記録保存を目的とした調査である。調査は、令和５年５月 16 日に開始した。早速作業員を投入し、トレンチの設定後、確認調査時に甕棺墓の応急措置として施していた覆土の除去を行った。その後遺構検出を実施し、棺内の堆積土や撹乱等を掘り下げ、全体の写真撮影を行った。翌５月 17 日には、実測作業と墓壙完掘状況の写真撮影を行い、トレンチの埋め戻しと発掘機材を撤収して、全ての現地作業を終了した。遺構実測図（1/10）は水糸メッシュ法で作製し、遺構配置図はトータルステーションを用い、その記録は株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん cubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、Canon EOS 6D で撮影した。

（２）検出遺構

調査地は、標高 14.4 ｍを測る微高地上の北東端に立地する。調査地の西側 200 ｍ地点が微高地の頂部にあたり、標高は 15.5 ｍである。頂部から調査地に向かって緩傾斜を成し、調査対象地を境に大きく削平を受け



第 131 図　遺構配置図（1/50）

ている。一方、東側 70 ｍには巨勢川が流れ、調査地付近から急激に比高を減じる。

遺構検出面は淡黄色土を呈する地山で、削平の影響により表土は殆ど残っていない。地元の古老の話によれば、昭和中期には既に削平を受けていたようであり、調査地付近で露出していた大型の甕を複数見かけたという。検出した遺構は、甕棺墓１基、土坑１基である。

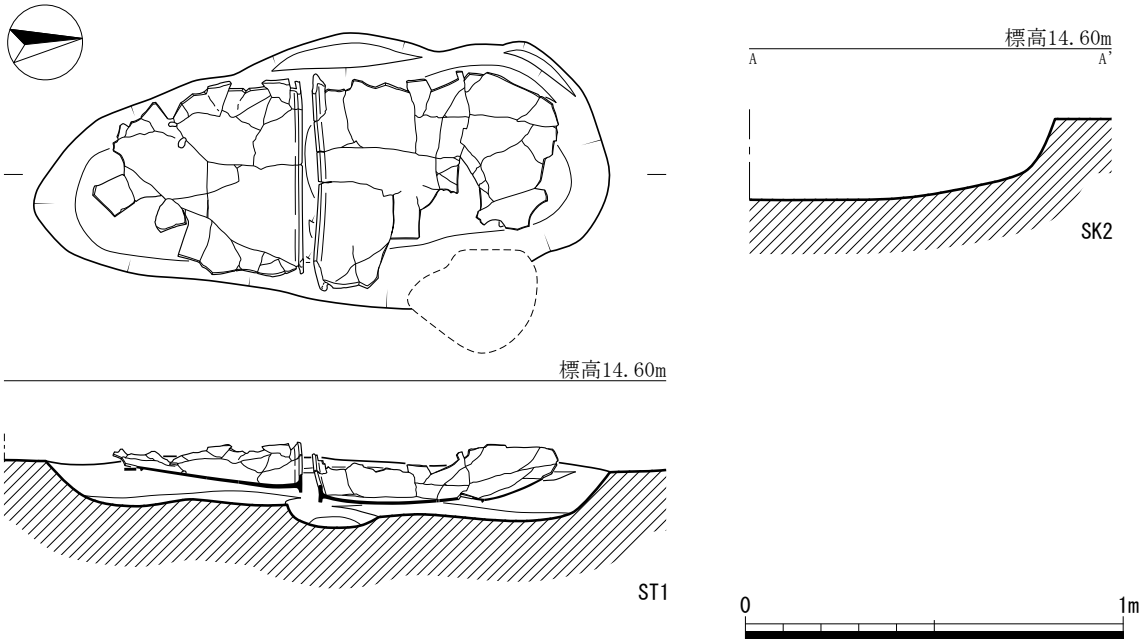
甕棺墓

ＳＴ１（第 132 ～ 134 図）

削平の影響により遺存状態が悪く、甕棺の下部がかろうじて残存していた。検出できた墓壙の平面形は南北に長い倒卵形を呈し、規模は最大で長軸長 1.53 ｍ、短軸長 0.73 ｍ、深さ 18cm を測る。壁面は緩やかに傾斜し、底部はほぼ水平であるが、中央が僅かに窪む。甕棺はいずれも大形で、南側で検出した甕棺が僅かに上位に位置していたため上甕と判断した。目張りの粘土は確認できなかったが、合口形式は接口式と思われる。埋置角はほぼ水平、主軸方位はＮ-6.5°-Ｅと推察される。

第 132 図　甕棺検出状況（南から）

第 133 図　甕棺検出状況（北東から）



第 134 図　ＳＴ１実測図・ＳＫ２断面図（1/20）

土坑

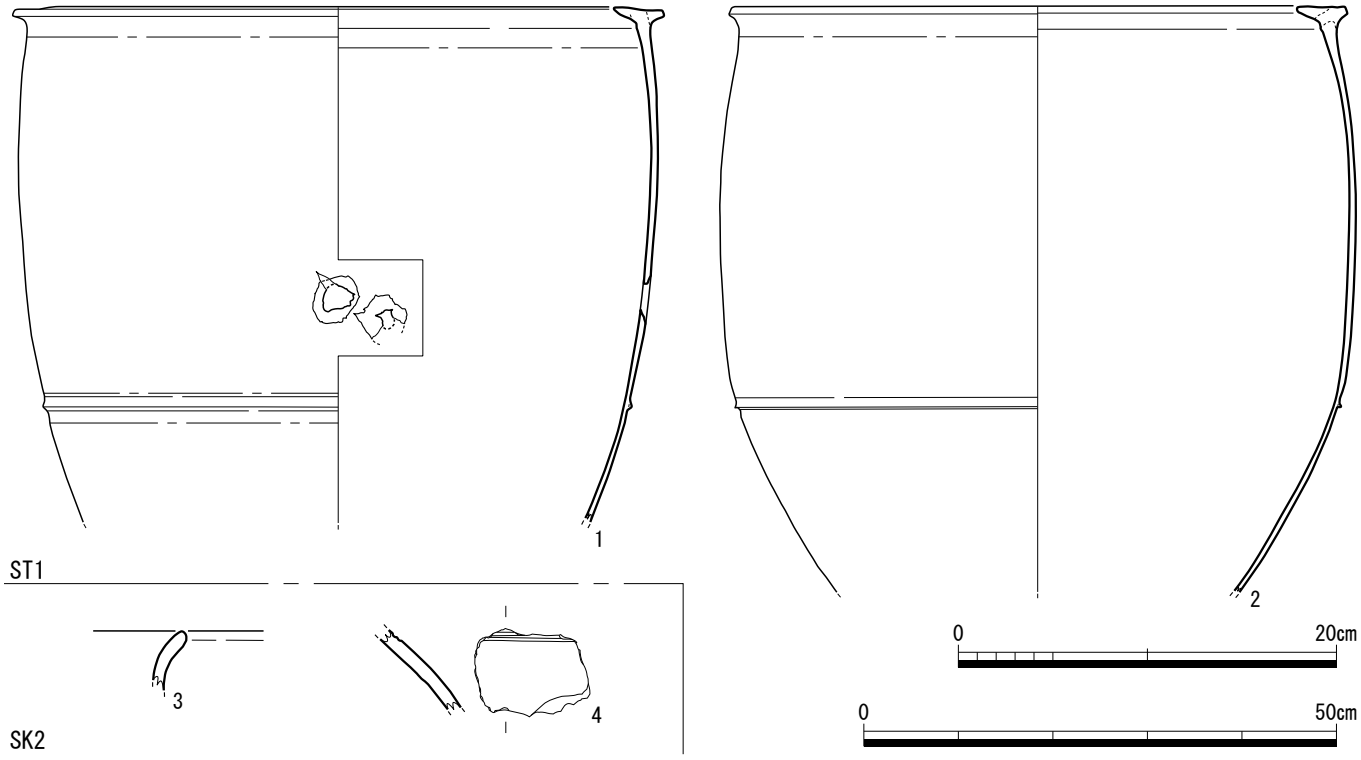
ＳＫ２（第 131・133 図）

ＳＴ１の西側で検出した。平面形は不明であるが、規模は東西長0.８ｍ以上、南北長1.00ｍ以上で、深さ 20cm を測る。底面は凹レンズ状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色を呈する砂質土で、埋土内からは弥生土器の甕片７点、壺片１点が出土した。

（３）出土遺物（第 135・136 図、第９表）

出土遺物はパンコンテナー１箱分で、弥生土器のほか、撹乱から近世磁器の型打ちの皿が出土している。

１はＳＴ１の上甕で、胴部下位から底部を欠く。口縁上部は外に低く傾斜し、内側に大きく張り出す。口縁下部はややすぼまり、胴部に三角突帯が１条付される。器壁は胴部中位で７㎜と薄く、突帯上位に外面から孔が２か所穿たれている。調整は内面が摩耗しているが、口縁部および突帯付近にヨコナデ、外面に刷毛目後ナデ消しを施す。**２**はＳＴ１の下甕で、胴部下位から底部を欠く。口縁部は上部がほぼ平坦で、下部がすぼまる。また、内側へ大きく張り出す一方、外側への発達は未熟である。胴部には上甕よりも細かくシャープな三角突帯を１条付し、器壁は８～９㎜と薄い。調整は内外面ともに刷毛目後にナデ消し、口縁部および突帯付近にヨコナデが残る。**３**はＳＫ２から出土した弥生土器甕の口縁部で、如意形を呈する。器面は摩耗もしくは剥落が著しいが、内面にヨコナデが残る。**４**はＳＫ２出土の弥生土器壺の肩部片で、外面に沈線が配されており、頸部との境にあたるものと推察される。沈線は２条を確認でき、調整は内外面ともにナデが施される。



第 135 図　出土遺物実測図（1/8：1・2、1/4：3・4）

第９表　西郷遺跡第２次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量（cm）			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
				長	幅	厚							
1 第135・136図	ST1	弥生土器	甕棺	69.0	-	(54.6)	橙・黒	にぶい橙・褐灰	ヨコナデ 刷毛目後ナデ消し	ヨコナデ 摩耗	細砂粒（長石、石英、雲母）	胴部最大径：(67.8) 胴部中位穿孔２か所	202305000001
2 第135・136図	ST1	弥生土器	甕棺	65.6	-	(62.1)	橙・褐灰・黒	橙・浅黄橙・褐灰	ヨコナデ 刷毛目後ナデ消し	ヨコナデ 刷毛目後ナデ消し	細砂粒（長石、石英、雲母）	胴部最大径：(67.4)	202305000002
3 第135・136図	SK2	弥生土器	甕	-	-	(3.2)	にぶい橙・浅黄橙	灰黄褐・にぶい黄橙・橙	摩耗 剥落	ヨコナデ	砂粒（長石、石英）		202305000003
4 第135・136図	SK2	弥生土器	壷	-	-	(4.3)	にぶい黄橙・褐灰	浅黄橙・灰	ナデ	ナデ	砂粒（長石、石英）	外面沈線２条	202305000004

第136図　出土遺物写真

４．総括

本調査では、弥生時代中期前半の甕棺墓１基と、前期の土坑１基を検出した。本調査地が立地する微高地上の北西端部で実施した西郷天神免遺跡の調査においても、弥生時代前期の土坑および中期前半の甕棺墓が検出されている。また、古墳時代の竪穴建物に先出するベッド状遺構を有する長方形プランの竪穴建物が確認され、後期の所産と推察される。西郷遺跡が立地するこの微高地上においては、弥生時代を通じて人々の活動痕跡が見られる。前期および後期の状況については言及し難いが、中期については墓域が微高地の周縁部に、集落域が微高地の中央部に営まれている可能性がある。これまでの調査事例が少なく憶測の域をでないが、今後の調査の進展を待ちたい。

（廣木）

XIV．筑後国府跡（第 314 次調査、概要報告）

１．調査に至る経過

令和５年３月７日に住宅建設における「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出された。当該地は史跡指定地の隣接地にあたり、且つ過去の調査により弥生時代の遺構が展開することが確実であった。このため、５月 31 日に確認調査が必要である旨を回答し、６月 13 日から７月 19 日まで発掘調査を実施した。

第 137 図　調査地点の位置図（1/25,000）

２．位置と環境

筑後国府跡は筑後川の中流域左岸に位置し、高良山から北西に派生した標高約 11 ～ 15 ｍの段丘上、通称「枝光台地」上に立地する。調査地は筑後国成立にともない設置された筑後国府Ⅰ期（古宮）政庁の北側隣接地にあたるとともに、周辺の調査では拠点集落とみられる弥生時代後期の集落跡も確認されている。

第 138 図　東区全景（北から）

３．調査の概要

調査の結果、弥生時代の掘立柱建物、竪穴建物、土坑および古代の溝を検出した。いずれも出土遺物は少量であったが、弥生時代の遺構は終末期を主体とし、古代の溝は８世紀代と考えられる。弥生時代の遺構は既往の調査と比して密度が希薄であるが、その広がりを確認できた。古代の溝は東西方向に延びるもので、幅 20 ㎝、長さ 25 ｍ（第 278 次調査分を含む）を測る。この溝はⅠ期政庁北面築地と並走し、所属時期も同時期の可能性があり注目される。

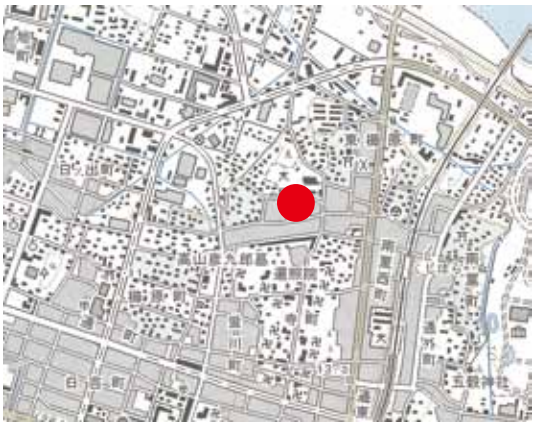
（廣木）

第 139 図　西区全景（南から）

XV．東櫛原今寺遺跡（第 10 次調査、概要報告）

１．調査に至る経過

令和５年５月 29 日に住宅建設における「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出された。試掘調査の結果、甕棺墓が１基確認された。対象範囲が狭く、全面調査は難しかったが、遺跡の範囲や性格を確認するため、確認調査が必要な旨を６月 23 日に回答した。７月 18 日から８月 18 日にかけて発掘調査を実施した。



第 140 図　調査地点の位置図（1/25,000）

２．位置と環境

東櫛原今寺遺跡は筑後川中流域左岸の低台地上に立地し、標高は約 12 ｍを測る。これまでの調査で、調査地の北側を中心に、竪穴建物や甕棺墓等、弥生時代の遺構の他、古墳時代・中世・近世の遺構・遺物が確認されている。

第 141 図　調査区全景（北西上空から）

３．調査の概要

対象地の大半は撹乱により遺構が確認できなかったため、遺構が確認できる範囲を掘削した。弥生時代中期の甕棺墓３基と時期不明の石蓋土壙墓１基、弥生時代前期末～中期初頭の土坑３基を確認した。調査区南部で検出した石蓋土壙墓や土坑の残存状況は比較的良好であったが、調査区の北部に集中していた甕棺墓は、上半を大きく失っており、北側が著しく削平されていることがわかった。甕棺墓は弥生時代中期初頭の土坑群を埋め戻した後に作られており、調査地は集落域から墓域へと変化したことが推測される。これまで当遺跡で確認されていた集落域・墓域の南への広がりを確認することができた。　（小川原）

第 142 図　遺構掘削状況（北上空から）

XVI. 筑後国分寺跡（第 46 次調査、概要報告）

１．調査に至る経過

令和５年 11 月 22 日に土地所有者から住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出された。対象地は筑後国分寺跡内に位置する。専用住宅建設にあたり保護層の確保は可能であったが、筑後国分寺跡に所在し、重要な遺構が検出される可能性があるとして、土地所有者と協議を行った結果、確認調査を行う運びとなった。現地での調査は、令和５年 11 月 29 日に実施した。

第 143 図　調査地点の位置図（1/25,000）

２．位置と環境

本調査地は耳納山地の西端に位置する飛岳から派生した台地上に立地する。筑後国分寺跡の僧寺にあたり、現在は日吉神社に隣接する。北方約 100 ｍには国分尼寺跡、北方約２㎞には筑後国府跡が所在する。本調査地の西側からは国分寺の塔跡が確認されており、日吉神社境内では今でも国分寺に伴う古瓦が散見される。

第 144 図　遺構検出状況（南から）

３．調査の概要

本調査は確認調査のため、トレンチ調査に留めた。包含層から瓦がビニール袋１袋分出土した。本調査地より西に金堂が位置すると推定されており、関連遺構の検出が想定された。トレンチ全体に大型の土坑が検出されたため、サブトレンチを入れたところ、埋土から遺物は出土しなかった。周辺の第 16・41・42・44 次調査等で確認された大型土坑と同様な性格であると考えられ、土取りの土坑であることが推定される。（河野）

第 145 図　サブトレンチ掘削状況（西から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	れいわ５ねんど　くるめしないいせきぐん
書　　名	令和５年度　久留米市内遺跡群
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 450 集
編著者名	小川原励（編）・小澤太郎・廣木誠・西拓巳・長谷川桃子・河野美帆
編集機関	久留米市　市民文化部　文化財保護課
所　在　地	〒 830-8520 福岡県久留米市城南町 15 番地３ TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email：bunkazai@city.kurume.lg.jp
発行年月日	令和６（2024）年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
高倉遺跡（たかくらいせき） 第２次調査（だいじちょうさ）	久留米市大善寺町（くるめしだいぜんじまち） 夜明（よあけ）1117-7	40203	30743	33° 27′ 41″	130° 46′ 85″	20220705 ～ 20220729	95 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高倉遺跡 第２次調査	集落	古代	井戸　３基 土坑　３基 土壙墓　１基 ピット　多数	土師器、須恵器 石製品、輸入陶磁器	古代末の井戸３基を検出した。

要　約

調査地は高倉遺跡第１次調査地の東隣に位置する。10 世紀から 12 世紀の遺構を検出した。調査区の東部では複数の井戸が狭い範囲に集中している。第１次調査では甕棺墓が検出されたが、今回の調査では弥生時代の遺構は確認できなかった。また、第１次調査で検出された土壙墓からは完形の輸入陶磁器が出土したが、第２次調査で検出された土壙墓からは土師器の小皿が出土した。

土木工事の届出日	令和４年６月 14 日	遺物の発見通知日	令和４年８月４日 （４文財第 1319 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
庄屋野遺跡（しょうやのいせき） 第 10 次調査（だいじちょうさ）	久留米市安武町（くるめしやすたけまち） 安武本字庄屋野五（やすたけほんあざしょうやのご） 2961-1 の一部（いちぶ）、 2963-1 の一部（いちぶ）	40203	31131	33° 17′ 71″	130° 29′ 41″	20220908 ～ 20220922	59 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
庄屋野遺跡 第 10 次調査	集落	古代	柵列　１条 ピット　多数	土師器、須恵器	古代の集落跡を確認した。

要　約

庄屋野遺跡は、標高 10 ｍの低位段丘上に位置する。今回の調査では、柵列１条と多数のピットを確認した。検出した柵列は第８次調査で確認した柵列や掘立柱建物群と方位を同じくする。

土木工事の届出日	令和４年６月 28 日	遺物の発見通知日	令和４年９月 26 日 （４文財第 1788 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 だい　じちょうさ 第 11 次調査	くるめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほんあざしょうやのご 安武本字庄屋野五 2961-1 の一部、 2963-1 の一部	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 41″	20220908 ～ 20220922	95 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
庄屋野遺跡 第 11 次調査	集落	古代	掘立柱建物　1 棟 ピット　多数	土師器、須恵器	古代の集落跡を確認した。

要　約

庄屋野遺跡は、標高 10 mの低位段丘上に位置する。今回の調査では、掘立柱建物とピットを確認した。検出した掘立柱建物は第８次調査で確認した柵列や掘立柱建物群と方位を同じくする。

土木工事の届出日	令和４年６月 28 日	遺物の発見通知日	令和４年９月 26 日 （４文財第 1791 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 だい　じちょうさ 第 12 次調査	くるめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほんあざしょうやのご 安武本字庄屋野五 2961-1 の一部	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 41″	20220908 ～ 20220922	89 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
庄屋野遺跡 第 12 次調査	集落	古代	掘立柱建物　1 棟 ピット　多数	土師器、須恵器	古代の集落跡を確認した。

要　約

庄屋野遺跡は、標高 10 mの低位段丘上に位置する。今回の調査では、掘立柱建物１棟とピットを確認した。検出した掘立柱建物は第８次調査で確認した柵列や掘立柱建物群と方位を同じくする。

土木工事の届出日	令和４年９月９日	遺物の発見通知日	令和４年 12 月１日 （４文財第 2421 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 だい　じちょうさ 第 13 次調査	くるめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほんあざしょうやのご 安武本字庄屋野五 2961-1 の一部	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 41″	20221108 ～ 20221128	89 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
庄屋野遺跡 第 13 次調査	集落	古代	溝　1 条 土坑　3 基 ピット　多数	土師器、須恵器	古代の集落跡を確認した。

要　約

庄屋野遺跡は、標高 10 mの低位段丘上に位置する。今回の調査では、８世紀中頃から後半の土坑を検出し、古代の集落の広がりを確認することができた。

土木工事の届出日	令和４年 11 月４日	遺物の発見通知日	令和４年 12 月１日 （４文財第 2424 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 だい　じちょうさ 第 14 次調査	くるめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほんあざしょうやのご 安武本字庄屋野五 2961-1 他 11 筆 の一部	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 40″	20221108 ～ 20221128	9　㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
庄屋野遺跡 第 14 次調査	集落	古代	ピット　多数	土師器、須恵器	古代の集落跡を確認した。

要　約

庄屋野遺跡は、標高 10 mの低位段丘上に位置する。今回の調査ではピットを検出し、古代の集落の広がりを確認することができた。

土木工事の届出日	令和４年 11 月 21 日	遺物の発見通知日	令和４年 12 月１日 （４文財第 2427 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 だい　じちょうさ 第 15 次調査	くるめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほん 安武本 2932-36	40203	31131	33° 17′ 53″	130° 29′ 39″	20230418 ～ 20230502	85　㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
庄屋野遺跡 第 15 次調査	集落	古代	土坑　６基	土師器、須恵器 転用硯、鉄製品	土坑及びピットから８世紀代の転用硯が出土した。

要　約

調査地点は通称「庄屋野台地」の北西端部に位置し、標高 10.3 m程度を測る。既往の調査結果から、古代の遺構の広がりを確認することを目的として調査を実施した。結果、8 世紀代の土坑およびピットを検出し、出土遺物には転用硯が認められた。西 200 m地点には 8 世紀後半代のヘラ書き土器「主」が出土した第 2 次調査地点が位置するとともに、南 600 m地点には三潴郡田家郷の中枢を占めると考えられる野瀬塚遺跡が所在しており、関連が注目される。

土木工事の届出日	令和５年３月 10 日	遺物の発見通知日	令和５年５月８日 （５文財第 305 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
しょうやのいせき 庄屋野遺跡 だい　じちょうさ 第 16 次調査	くるめしやすたけまち 久留米市安武町 やすたけほん 安武本 2932-11	40203	31131	33° 17′ 54″	130° 29′ 40″	20230823 ～ 20230908	84　㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
庄屋野遺跡 第 16 次調査	集落	古代	土坑　１基 ピット　多数	土師器、須恵器 転用硯、石製品	土坑から８世紀代の転用硯が出土した。

要　約

調査地点は通称「庄屋野台地」の北西端部に位置し、標高 10.3 m程度を測る。既往の調査結果から、古代の遺構の広がりを確認することを目的として調査を実施した。結果、8 世紀前半に属すると考えられる土坑およびピットを検出した。土坑からは多数の遺物が出土し、転用硯も認められた。ピットの分布は調査範囲内で粗密が認められる。

土木工事の届出日	令和５年７月４日	遺物の発見通知日	令和５年９月 13 日 （５文財第 1474 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
たかみずまいせき 高三潴遺跡 だい　じちょうさ 第 14 次調査	くるめしみずままち 久留米市三潴町 たかみずまあざつかざきにしはた 高三潴字塚崎西畑 130-1	40203	―	33° 15′ 55″	130° 27′ 27″	20231016 ～ 20231117	72 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
高三潴遺跡 第 14 次調査	集落	弥生	井戸　1 基 ピット　多数	弥生土器、石器 動物遺存体	弥生時代の井戸を検出し、擬朝鮮系無文土器の破片が出土する。

要　約

調査区隅で井戸を検出した。遺物の内容と周辺の状況から井戸は弥生時代中期のものと推察される。また、複数のピットから牡蠣の貝殻や牙など動物遺存体が多数出土した。調査地点は高三潴遺跡群の中でも北部の低地に位置し、集落が比較的標高の低い低位段丘北部にまで広がっていることが判明した。

土木工事の届出日	令和５年９月８日	遺物の発見通知日	令和５年 11 月 22 日 （５文財第 6912 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
くるめじょうほんまるあと 久留米城本丸跡 だい　じちょうさ 第１次調査	くるめしささやままち 久留米市篠山町 ばんち 444 番地	40203	30005	33° 19′ 41″	130° 30′ 27″	20210709 ～ 20210823	152 ㎡	多目的広場建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
久留米城本丸跡 第１次調査	城館跡	近世 近代	整地層 埋甕　4 基	弥生土器、土師器 須恵器、瓦、陶磁器 金属製品 ガラス製品	近世・近代の整地層を検出した。

要　約

久留米城本丸跡は、筑後川左岸に形成された半島状の低位段丘の北西隅に位置する。第１次調査地点は最頂部に近い標高約 22 ｍに立地し、16 世紀に築かれた久留米城の本丸にあたり、元和７年（1621）に入城した有馬家により、久留米藩の本丸御殿が建てられた場所である。確認調査のため、現地表から深さ 0.1 ｍで到達した瓦片などが主体の整地層で遺構を確認した。整地層は、調査区北端で確認した淡黄色土の層が近世まで遡る可能性があるが、大半が石炭殻や煉瓦、モルタル片などを含む、近代以降の所産である。また、埋甕４基を検出したが、これらは近代の整地層に後出する、新しい年代の遺構とみられる。調査地点である本丸跡の南部は、廃藩後に著しく改変されていることが明らかとなった。

土木工事の届出日	―	遺物の発見通知日	令和３年８月 26 日 （３文財第 1456 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ちくごこくふあと 筑後国府跡 だい　じちょうさ 第 313 次調査	くるめしあさづままち 久留米市朝妻町 1416-3	40203	30112	33° 18′ 49″	130° 32′ 49″	20230510 ～ 20230511	15 ㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
筑後国府跡 第 313 次調査	官衙	古代	溝　1 条 ピット　5 基	―	推定西海道の路線の位置を限定するとともに、既往の調査でイスラム陶器片が出土した溝の延長部を確認した。

要　約

本調査は、国府域の中央を東西に伸びる西海道と推察される道路遺構の確認と、第 86 次調査において検出したＳＤ 3713 の西側延長部の確認を目的に実施した。結果、道路遺構は検出できなかったが東西走行の溝１条を確認した。道路遺構については路線の南端が調査区北側に限定され、東西溝は遺構の検出位置からＳＤ 3713 の延長部であると考えられる。

土木工事の届出日	令和５年４月 13 日	遺物の発見通知日	―

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
西郷遺跡 第２次調査	久留米市田主丸町 中尾 840-3 外	40203	－	33° 20′ 13″	130° 38′ 54″	20230516 ～ 20230517	4　㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
西郷遺跡 第２調査	墓地	弥生	甕棺墓　１基 土坑　１基	弥生土器	弥生時代中期前半の甕棺墓および前期の土坑を検出した。

要　約

調査地は田主丸町の西端に位置する標高 15 m前後を測る微高地上の北東端に立地する。本調査は、確認調査の際に発見した甕棺墓の記録保存を目的に実施した。結果､弥生時代中期前半の甕棺墓１基と前期の土坑１基を確認した。同一微高地上の北西部で実施した西郷天神免遺跡の調査成果とあわせて、中期の墓域は微高地上の周縁部に、集落域は中央部に営まれているものと推察される。

土木工事の届出日	令和５年４月 18 日	遺物の発見通知日	令和５年５月 19 日 （５文財第 410 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
筑後国府跡 第 314 次調査	久留米市合川町 1183-1	40203	30112	33° 18′ 58″	130° 32′ 17″	20230613 ～ 20230719	89　㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
筑後国府跡 第 314 次調査	官衙	古代	掘立柱建物　１棟 竪穴建物　１棟 土坑　１基 溝　１条	弥生土器、土師器 須恵器、石器	弥生時代の建物跡やＩ期政庁北面築地と並走する８世紀の溝を検出した。

要　約

調査地は、筑後国成立にともない設置された筑後国府Ｉ期（古宮）政庁の北側に近接する。また、弥生時代終末期の竪穴建物 29 棟などが検出された第 74・278 次調査地の東側に位置する。調査の結果、弥生時代の掘立柱建物、竪穴建物、土坑および古代の溝を検出した。弥生時代の遺構は先の調査と比して密度が希薄であるが、その広がりを確認できた。古代の溝は東西方向に延びるもので、Ｉ期政庁北面築地と並走し、所属時期も同時期の可能性があり注目される。

土木工事の届出日	令和５年５月 29 日	遺物の発見通知日	令和５年７月 21 日 （５文財第 1009 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
東櫛原今寺遺跡 第 10 次調査	久留米市東櫛原町 1268-2	40203	30074	33° 32′ 14″	130° 52′ 06″	20230718 ～ 20230818	73　㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
東櫛原今寺遺跡 第 10 次調査	集落	弥生	甕棺墓　３基 石蓋土壙墓　１基 土坑　３基	弥生土器、石器	土坑埋没後に甕棺墓や石蓋土壙墓が形成される。

要　約

弥生時代中期の甕棺墓３基と時期不明の石蓋土坑墓１基が確認された。甕棺墓は上半を失っており、当地が大きく削平されていることが明らかになった。甕棺墓は弥生時代中期初頭の土坑群を埋め戻した後に作られており、集落から墓域への変化がみられる。また、弥生時代の集落・墓域の南への広がりが確認できた。

土木工事の届出日	令和５年７月６日	遺物の発見通知日	令和５年８月 21 日 （５文財第 1258 号）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ちくごこくぶんじあと 筑後国分寺跡 だい　じちょうさ 第46次調査	くるめしこくぶまち 久留米市国分町 あざみやのわき 字宮ノ脇 743-12、743-15	40203	30618	33° 17′ 42″	130° 31′ 20″	20231129 ～ 20231129	15 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
筑後国分寺跡 第46次調査	寺院	古代	土坑　1基	瓦	大型の土坑を検出した。

要　約
調査区の大部分を大型の土坑が占める。同様の大型土坑は周辺の第16・41・42・44次調査等で確認されており、土取りのための土坑であることが想定される。

土木工事の届出日	令和５年11月22日	遺物の発見通知日	令和５年12月５日 （５文財第2210号）

令和５年度

久留米市内遺跡群

久留米市文化財調査報告書　第450集

令和６年（2024）３月31日　発行

発行　久留米市教育委員会

編集　久留米市市民文化部文化財保護課

印刷　香和印刷株式会社

久留米市津福本町2320-15